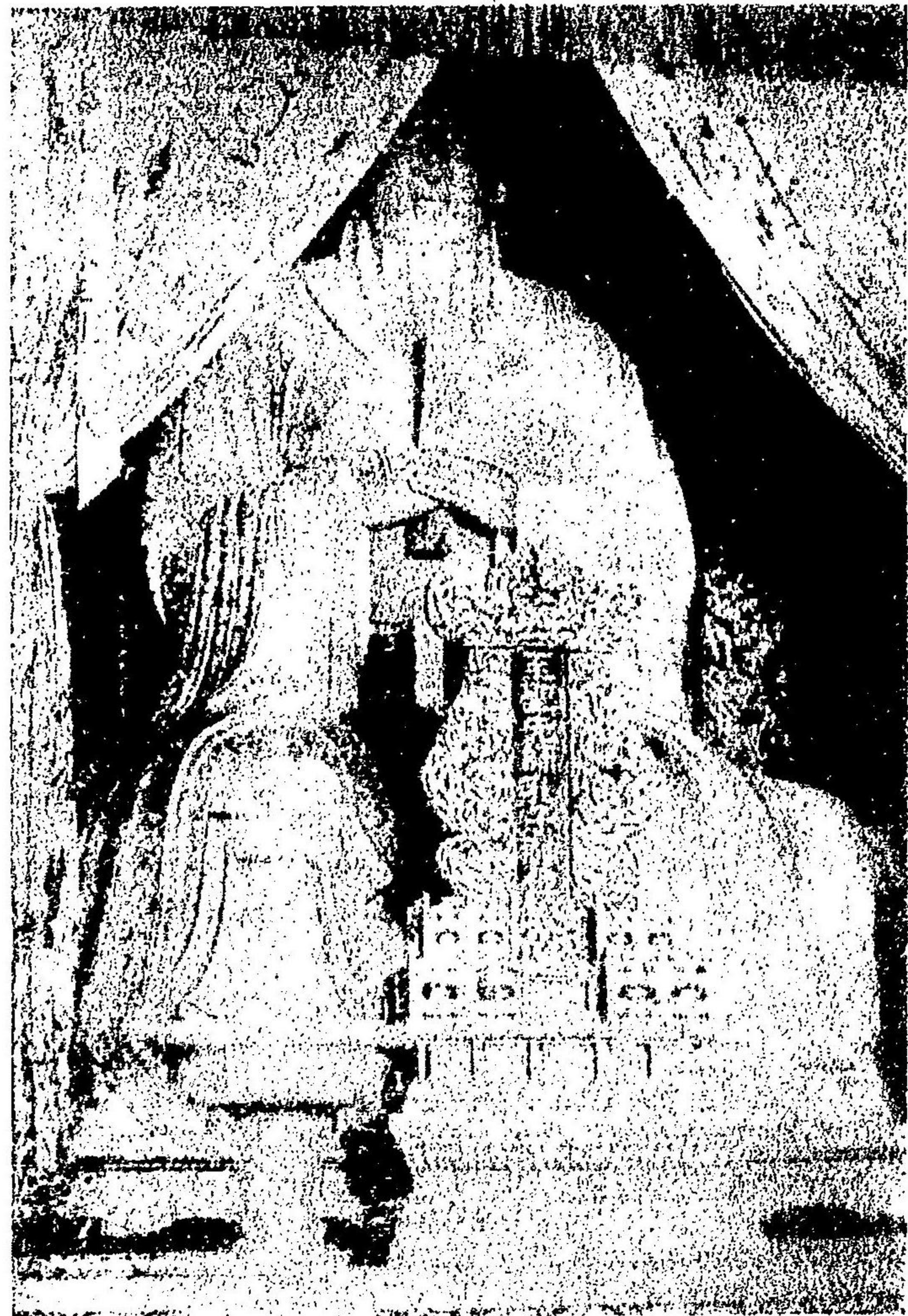
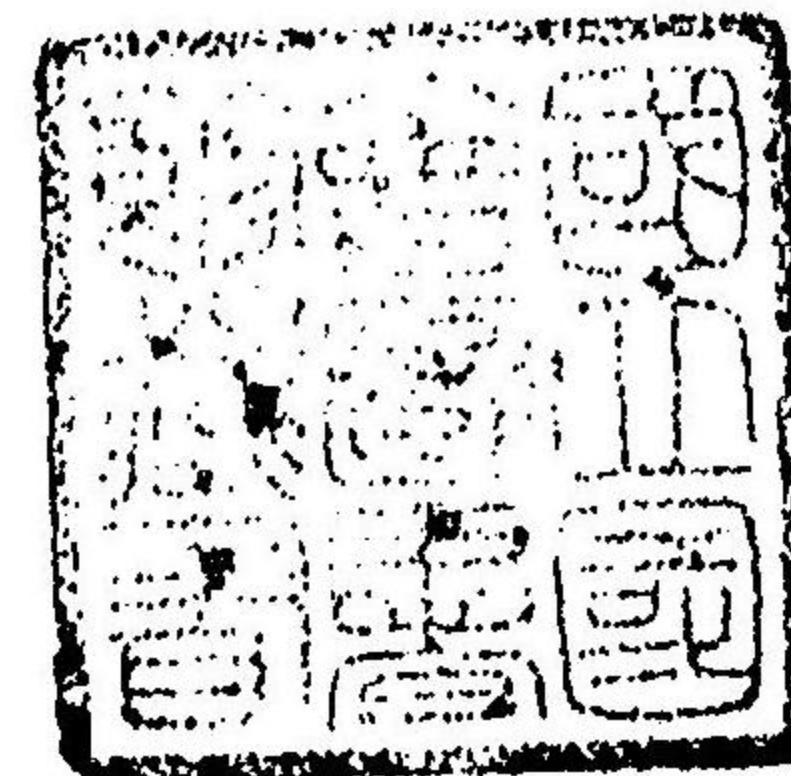


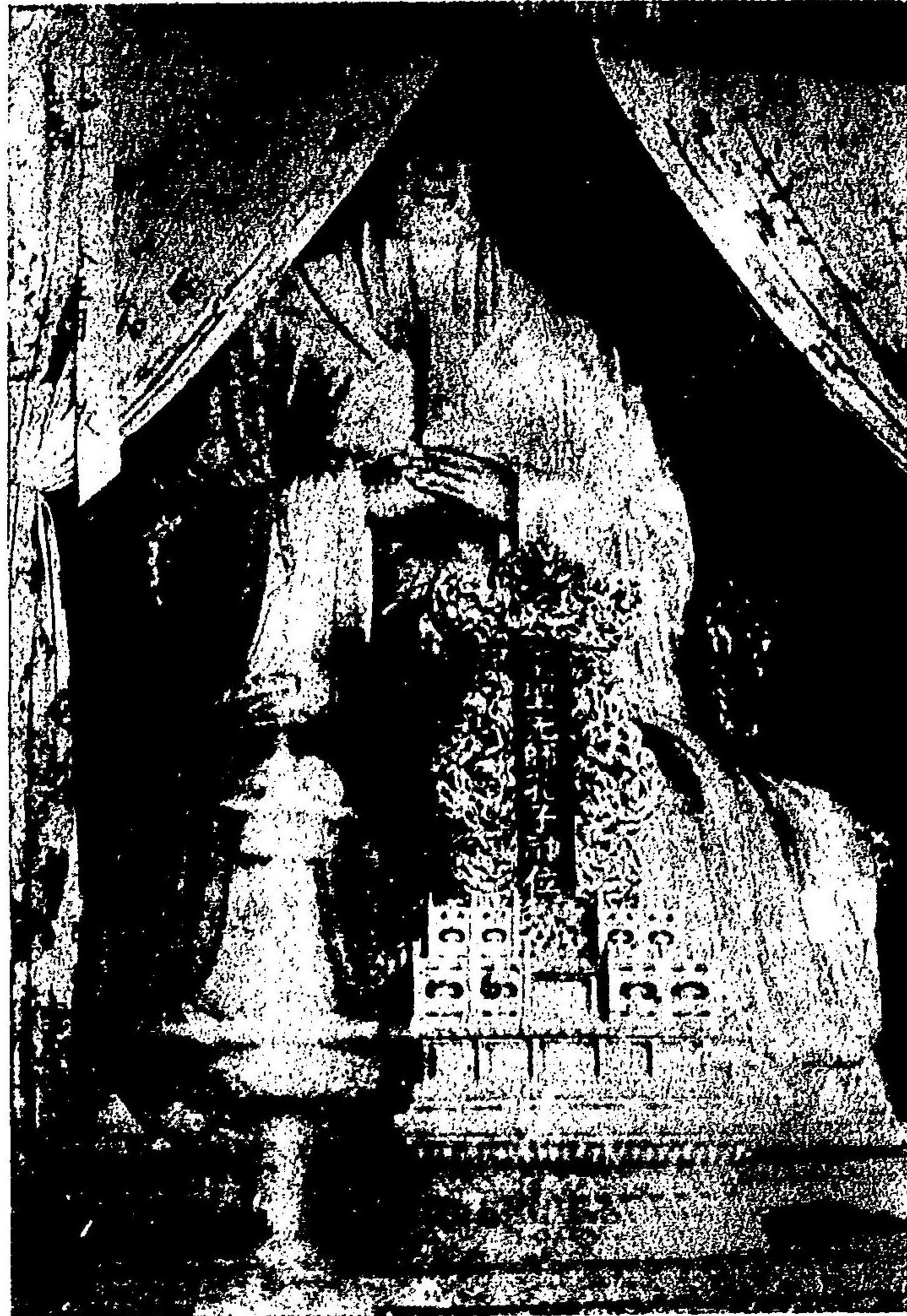
孔子



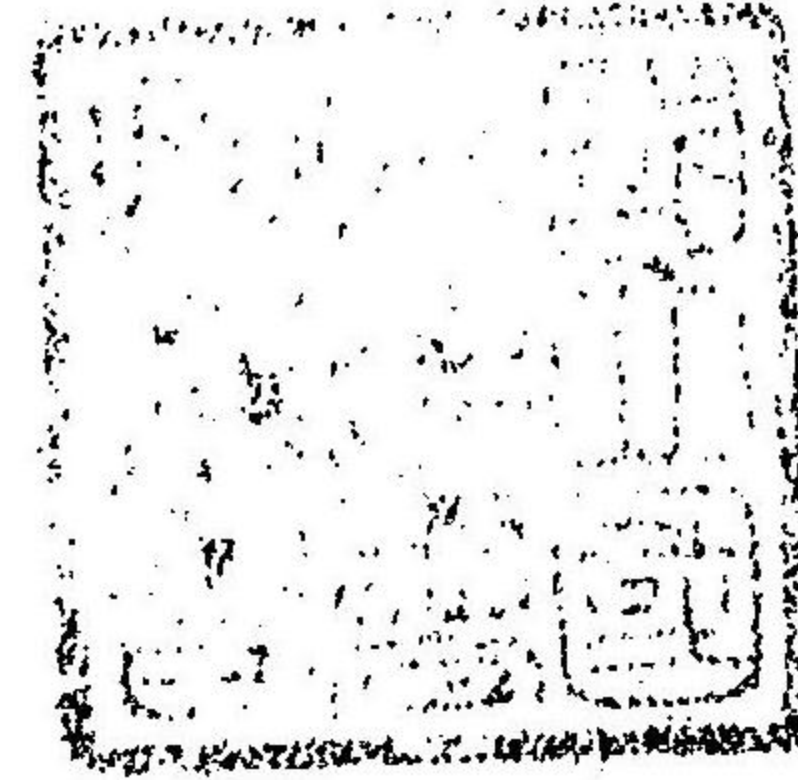
124.2  
S:555K



31575



129.2  
81555K



81575

是れ山東省曲阜縣なる孔子の邸宅の址なりと傳へらるゝ文廟大成殿に安置せる孔子像の寫眞にして服部博士の所藏に係る  
孔子の形貌につきては諸書言ふもの多し闕里誌には四十八表ありといへども俗傳元より信じ難し孔子世家、白虎通、韓詩外傳及び論衡には喪家の狗の如しとあり或は然りしならんか世家には又顔頰が窪み崩りたりと記されあり荀子に「仲尼の狀面蒙牛の如し」とあれど蒙牛の何の義なるやを定め難し最も善く風采を想望せしむるものは論語の記載なり「子、温にして厲、威ありて猛からず、恭にして安し」とある是れ也温にして厲なるは其の音聲也威ありて猛からざるは其の面容也恭にして安しとは其の態度也又子實は孔子を評して「温良恭儉讓」と云へり是れ其の道徳を總稱せるものなれども徳は必らず身を潤ほすものなれば此の言又眼前に孔子を睹るの想あらしむ尙ほ論語一書を讀み了れば何人も孔子てふ一大偉人の風采が何となく彷彿として現はれ出づるを覺ゆるならん若し希世の美術家あり此の萬人の想像を渾一して具體化するを得ば極めて妙ならん此に掲出せる像の如き亦此の類なれども未だ吾等の想像とは一致せざるものあるが如し

### 謹みて先考の墓前に捧ぐ

左は明治二十七年、余が文科大學漢學科に入るとき、某に答へたる書の一節也。正を竹添先生に乞ひしもの。

僕家世世倉藩之庖人也。至家君發憤力學。不敢顧家業。以此逢執政之怒。擺糶家君不屏。讀書愈勤。後遂以備舉於藩。又參與政務。僕之幼也。家君嘗近僕於膝下。語以此事。頗有自得之色。既而又蹙然語曰。乃父。上觸執政之怒。下拂同族之諫。而問無師讀無書。千辛萬苦。纔以至。此汝輩幸生於昭代。良師易得。書籍不乏。加無家業之累。眞當勉之。秋乃父半生之遺業。畢以委爾。蓋期大成於僕也。自此。晝則經傳。夜則子史。爲僕詳詳講之。有時聞鶴鳴而始輟。若此三四年。雖所聞未解其要。而略啓問學之端。僕之於斯學。不可謂無素矣。

家君集中、又左の一篇あり、蓋し壯歲の作なり。

吾元庖人子。乃知非士流。少小輕流俗。遠與古人遊。割烹不必講。于湯豈有山。明君初政日。賞信而罰必。屏居垂三旬。幽憤托文筆。忽得叨特恩。毛錐脫靈出。此邦稱富強。經世應有方。股肱扶元首。喜色及稻梁。吾亦陳微力。仰欲裨彼蒼。

余や、江湖放浪の間、歲月流るゝが如く、學成るなく、業遂げず。家君亦既に世を逝り、墓木漸く長ず。往年を顧みて、悔恨備さに至るものあり。眇たる此の書、固より宿昔の志を遂ぐるものに非ずと雖も、先づ馳せて一本を家君の墓前に獻すと云爾。

孔子を説くもの、又亦茲に一小著を加ふ。思ふに、孔子は地下に其の煩なるを一笑せん也。蒼海の水、之れを汲むも盡きず、ます／＼其の大なるを覺えしむ。たゞ之れを汲むの一人も多く、一日も多きを望むのみ。

著者は、教育的見地より古經を研鑽し、自ら亦足らず。此の書、元と其の一部局たり。今一二の篇章を加へ、或は列次を更め、又教育學的叙説の精細に逸するものを省き、以て上木に付す。著者は、孔子の孔子たる所以は、教化に在りと爲すが故に、斯くて以て、決して此の書に名づくる所以を失はざりしを信す。且つ其の考證序述する所、全然無用の詮索ならざりしを信す。尙ほ一事の附言すべきあり、此の書引く所の典據、皆之れを邦文に譯す、紛々たる經解、著者おのづから隨從あるは、其の訓讀の間に看取されんことを乞ふ。亦少しく著者苦心の存する所。

而して、著者が別に草する所の彪然たる古典教育學稿、成りて之れを公にするの一日も疾からんことを、我が古聖賢の英靈に禱る。鯉洋生識す。

# 孔子目次

## 第一篇 孔子略傳及其追尊

### 第一章 孔子の小傳

偉大なる性格の永生……生誕と祖先……其の幼時……其の青年期……周に遊び齊に往く……其の官仕……衛に於ける孔子……天下を遍歴す……衛を経て魯に歸る……晩年と終焉

### 第二章 歴代の追尊

死後の崇敬……孔墨併稱及他の諸學派……漢代の尊信……魏晉六朝の尊信……隋唐五代の尊信……宋明の尊信……清朝の尊信……我が國の尊信

## 第二篇 孔子の人格

### 第一章 完全なる尋常人

先づ孔門逸足の評言に徴せん……平凡なる偉人……多知多藝多能博學……美的素養に富む……其の慈愛溫情……其の方正謹嚴……舒暢寛裕の和氣……意志の勇猛……完全なる道徳……孔子の謙徳につきて……謙讓とは何ぞや……孔子は自ら任ずる厚し……教祖に

共通なる自信

### 第二章 偉大なる教育家

四九

人格と教育……熱心なる教育家……教育と過去現代及び將來……超凡、意氣及び安心立命……温情と嚴正……子弟を信じ其進歩を喜び高弟を敬す……偉大なる教化力と其の自信

### 第三章 修養と蓄積

六五

決して生知の聖ならず……貧賤の恩恵……完全なる修養……知識的蓄積……實行的修養……困頓と磨厲

## 第三篇 孔子の事業

七七

### 第一章 孔子の集大成

七七

#### 第一節 政教原理の展開

七七

集大成とは何ぞや……祖述と憲章……政教一致と一貫の道……忠恕につきて……論語と中庸との中庸説……堯舜の中と孔子の中庸……禮につきて……禮と禮讓……中と禮との關係……仁につきて……親愛と調和……忠恕、中庸、禮、仁及び一貫の道……君臣關係の規定

#### 第二節 易理の新意義

一〇四

## 第二章 孔子の經世濟民

一一二

### 第一節 官仕中の孔子

一一二

周公と孔子……微官としての孔子……魯の司寇となる……司寇中の教化的事功……其の外交的手腕……少政卿を誅す……挂冠して魯を去る……國老たりし晩年

### 第二節 遍歴中の孔子

一一二

遍歴の意義……世道人心の爲めにす……熱誠なる救濟……意を仕途に絶つ

## 第三章 孔子の教育的事業

一三九

### 第一節 孔門の教育概説

一三九

一黨の師……教育家たる決心……教育に對する年來の志望……十七歳の年少先生……其の誤謬……最初の門弟子……家塾教育の初年……始終せる門徒の教育……三千の弟子と其異論……門人の頗る多數なりし説話……大成せる七十餘人……孔門熱則の綱領……四教の教育……經四の訓育……入門の禮……師弟の關係……師弟相愛の情……四科の俊秀……孔門の教材、詩、書、禮、樂……文と禮と……最も禮を重んず……講禮に過ぎし務……孔門洋々たる樂聲……多端なる教育……天下を治むる學術……個別的なる問答的教式……門人相互の切磋……考試の法……講話の筆記……孔子の家庭教育……孔門の謝禮

第二節 孔門の教授法

一八〇

ソクワデスに似たる啓蒙的教授……兩端を叩くの教授法……中と真理……開發教授の二三實例……開發教授の餘弊……獨修を尙ふ……二様の問答的様式と講演……多様な實問……懇切なる應問……直接的興味喚起……眞率なる師弟授受……國語の正音を川ふ……直觀的教授

第三節 孔門の訓育法

二〇〇

訓育と倫理觀……孔子個人の感化……禮と訓育及び其の弊……其一、模倣化する……其二、美情の作はざる……其三、至情を矯むる……樂と訓育……寬嚴の張弛……個性に注意す……誠實眞率なる批判……個性甄別の利用……子弟相互の比較……能く人を好み能く人を惡む……理想の人格……各其の志を言はしむ

第四章 孔子の述刪

二二二

寧ろ教科書編纂……六經と孔子……詩を修整す……書を刪定編纂せしや……書序を作爲せしや……禮樂を整理す……易を推獎す……春秋を著はす……春秋の名につきて……六經總論……孝經について……六經の教育的價值及其の注意……孔子果して六經を併稱せしか

附載 論語及六經解説

二四六

(一) 論語について

二四六

三論と其合併……論語の編者及其作意……重なる註解……朱子集註の缺點……朱子以後

の註解

(二) 詩經について

二五四

上代の詩及び采詩の制……詩の效用……四派の説詩家……詩の註解

(三) 書經について

二五九

書の來歴及内容……今文と古文……今古二尙書の消長……古文僞作の決定

(四) 易及十翼について

二六六

周易及び諸卦重卦者……上下經の作者……文王周公說の出處及び誤謬……易の解釋と費氏易……十翼の作者……十翼著作の時代

(五) 三禮について

二七三

(天) 周禮について

其の傳來……信疑の二説……其の註釋

(地) 儀禮について

其の傳來……其の註釋

(人) 禮記について

其の編輯……其の内容

(六) 春秋及三傳について

二八〇

古史の體制……春秋の編纂……三傳の短長……三傳外の三傳……其の註釋

### 第四篇 孔子教育説

二八六

#### 第一章 教育概論

二八六

教育の意義と人性觀……發達と矯正……教育の可能及び効果……教育の必要……教育の無効なる一階……教育の困難と愉快……教育の初期……其有效期間……教育は老死まで有効なり

#### 第二章 教育目的論

三〇四

理想の人格……士とは何如……成人とは何如……君子とは何如……身分位置に因る區別……道徳を偏重す

#### 第三章 教授論

三二六

文化と教材……尙書の教育的價值……詩と政治及外交的辭令……詩と禮及び博物……雜技小識即ち所謂異端の害……統一の智識……興味と應用……現代の知識……應用的觀念……提示と考察……開發と程度

#### 第四章 訓練論

三三二

知と行との關係……知行の前後……教材の訓育的價值……其の一、詩書……其の二、禮樂……意志活動の訓練……示範と感化……忠愛と努力……常識的訓育……交友の影響

#### 第五章 女子教育説

三四四

女子教育の可能……女子教育の目的及び女子に關する當代の思想……女子は男子の附庸……其の社會的職能……男女尊卑の別……對待的關係と内外尊卑の意義……淫亂を爲さず争鬭を防ぐ……男女別を設くる效果……婦徳……婦教……其の一、家庭教師……其の二、婦教の科目

### 第五篇 孔子の政教論

三六三

#### 第一章 政教概論

三六三

政教一致の觀念……徳治と教化……一種の社會教育……政教の目的及效果……國民の思想形式を一樣にせんとす……躬行と務本主義……儀表と輔弼……教化の確實なる成功……教化と他の政務との關係

#### 第二章 禮樂論

三八三

禮樂と政教及び大權……禮と政教……樂と政教……時勢の差異……荀子の禮樂論

#### 第三章 國語統一論

三九三

孔子の正名論……名と祖との關係……當時の狀勢と標準語……思想統一及び主權者

## 孔子目次終



學、以、精、一。積、之、以、歲、月。則、學、之、成、未、必、爲、難、也。惟、成、與、不、成、天、而、已。  
爲、與、不、爲。其、貴、在、僕、矣。或、曰。子、道、不、言、乎。日、日、新。又、日、新。及、今、之  
時。追、故、聖、之、學。抑、亦、迂、矣。僕、答、曰。經、云。溫、故、知、新。可、以、爲、師。徒  
新、且、逐。我、道、不、與、焉。嗚、呼、是、僕、所、以、修、淺、學、也。孔、夫、子、曰。道、不、同。不  
相、與、讓。僕、未、嘗、與、人、爭、我、道、之、短、長。今、爲、足、下、一、言、之。足、下、以、爲、何、如。  
竹、添、先、生、評。眞、所、謂、豪、傑、之、士、哉。能、體、其、志。繼、其、業。不、獨、爲、孝、子。  
亦、爲、天、下、之、士。

又、評。無、吝、氣。無、勝、心。非、有、得、孔、聖、之、道。則、不、能、焉。余、深、敬、之。

右、前、に、掲、げ、し、答、某、書、の、末、節、抄、録。往、の、志、は、彼、れ、が、如、く、に、し  
て、今、の、業、は、即、ち、此、く、の、如、し。掲、げ、て、以、て、自、ら、戒、し、む。不、孝  
の、兒、不、竹、の、弟、子、次、郎、謹、み、て、識、す。

# 孔子

白河鯉洋著

## 第一篇 孔子略傳及其追尊

### 第一章 孔子の小傳

偉大なる性  
格の永生

偉人は死せず、而かも決して老いず、あらず、ますます、生育長大し來る。山東の  
僻村に生れ出でし一個の貧書生は、倉庫の番人より、牛羊の牧者より、魯の大夫と  
なり、國老となり、竟に所謂素王素王とは位なと稱せらるゝに至り、幾多生滅起伏す  
る歴朝帝王の先師と仰がれ、坤輿に徂徠する億兆民人の先聖と崇められ、威あり  
て猛からざる其の容、今吾が目に光りあり、温にして厲なる其の聲、今吾が耳に力  
あり、其の説を其の書に見るにあらず、朝夕常に親しく其の教に接しつゝ、あり、思

孔子の小傳

ふに吾が至聖先師孔夫子のためとき生命は、吾が宇宙と共に、際涯あることなき也。

されば、孔子の傳記は、其の生まるゝに始まるも、今猶ほ終らざる也。孔子の活動の刮目して見るべきは、寧ろ今後に在るやも或は知るべからず。何となれば東西の文明を湊會する明治の日東に於いて、孔子は今方に盛んに其の新空氣を呼吸しつゝあれば也。

若し更らに極言せしめば、孔子の教義は或は變じて、全然其の始めを失ふことあらん、而かも其の偉大なる性格は、決して磨するも磷せざる也。故に孔子を知るは其の性格を知るより善きはなし、其の志傳、其の事業、及び其の學說を研究するは、寧ろ其の性格を知るの便に供するに過ぎざるのみにして可也。

故に此の章題して小傳といふもの、其の形骸の死するに至りて止まる。其の精神氣魄、即ち其の性格が、如何に民人の心裡に生存しつゝあるやは、之れを歴代の追尊に徴して、次章に列叙せんとす。儒教の沿革の如きは、必らずしも永生せる孔子の人格の記録にあらざれば也。

此の偉大なる性格を載すべき天の惠福を賦せられたる形骸は、周の靈王二十一年、陰曆八月二十一日を以て、魯の昌平鄉陬邑今山東省の沂州に在りに生まる。正に耶蘇未だ出でざる五百五十二年、前釋迦滅するに前だつこと九年、我が朝に在りては神武即位紀元百九年なりき。名は丘、字は仲尼。

英雄は屢私生兒より出づ、孔子は野合の子なりき。其の父叔梁紇、顔氏の女、名は徵在禮記檀弓と野合して孔子を生めり世家。紇は左傳の記する所によれば襄公十年及十七年、武勇頗る衆に秀で、齊の軍を夜襲して、之れをして師を引き回へらしめしことあり。杜預は註して陬邑の大夫となせり、邑大夫とは村長の類也。

左傳に孔子を稱して「聖人の後也」昭公七年といへり、蓋し孔氏は宋の湣公より出づ、湣公は般の微子啓の後なれば也。孔子が自ら吾れは般人也禮記檀弓上といへる、以て證となすべし。又孔子より七代の祖孔父嘉は宋の大司馬たり、穆公死するるとき、遺命して殤公を屬し、社稷を之れに托したる左傳隱公三年と、又公羊傳に、

孔父、色を正しうして朝に立てば、則ち人政て過ちて難を其の君に致すものなし。孔父は、義、色に形はるといふべし。(桓公二年)

とあるとを見れば、國家の重器たりしは想見すべきか。

孔父、嘉は後遂に反對黨の手に殺され、其の子木金父、宋を出で、魯に走り、陬邑の人となれり(孔子編年)。孔氏の魯に家するに至りしはこれよりなり。

天は多くは先づ之れを困しめ、之れを試みて後擧ぐ。孔子は襁褓の中に在りて、父の喪に遇へり。

丘生れて叔梁紇死す。(孔子世家)

とあり。憐れむべき若き寡婦は、孔子を抱きて如何に世途の辛慘に遭ひたりけん。孔子は自ら

吾れ少なりしや、賤故に鄙事に多能なり。(子罕) 論語より引くもの甚だ多く、本書殆どはすべて「子曰」等の文字を省けり他書より引くもののみ之れを加ふ。

といへり。至孝なる此の貧兒は、少にして既に母を助けて、其の弱き手を生計の爲めに働かせしならん。

されど頑是なきは小兒なり、聖人必らずしも方正謹嚴なるものにあらず、況んや其の幼なるに於いてをや。たゞ、後年禮樂を以て王政を鼓吹せし素地は、はやくも既に其の嬉遊の間に現はれしと見え、

孔子兒たりしとき、嬉戯するに、常に俎豆を陳ねて禮容を設く。(孔子世家)

と傳へらる。貧に憔悴し母は、涙に濡へる其の目に、此の大人びたる寧馨兒の嬉戯を見ては、寂しき笑ひを浮かめたらんか。

孔子の幼時につきては此の以外多く知られず。長じて委吏俞庫となり、乘田鄒牧となりしこと、孟子(萬章下)及び史記の世家に記載しあるを見れば、其の貧賤の境は容易に脱する能はざりしならん。而かも此の間に於いて、元とより常師

とてはなけれど、子張、獨り苦學して怠らざりしは、

吾れ十有五にして學に志ざし、三十にして立つ。(爲政)

と云へるに徴し、其の精勵は尋常一樣ならざりしを想像すべし。

孔子が二十歳前後に於いて結婚したるは、少しく早婚なるやに見ゆれど、或は當時の習慣なりしやも知れず。又或は生計に多少の餘裕も生じ、其の母母の死は孔子

孔子略傳及其追尋

門人を有るの手に家事を委するに忍びざりしやも亦知るべからず。其の子伯魚（後にいふ如く孔子は七十四歳にて逝けり）の事先進にして、且つ顔回の死といふの死せるは孔子の存生中（後にいふ如く孔子は七十四歳にて逝けり）の事先進にして、且つ顔回の死の前にありし同上如く、而して伯魚の享年は五十歳史記世家なりしより推すに孔子が結婚せし歳時は知り難しとせず。

昭公十七年古禮に通ずる郟子なるもの魯に來り、孔子それにつきて學びしこと左傳に見ゆ、孔子此の時二十八。

三十歳前後に於いては、學既に成り、帷を下して家塾の教育に着手せしは、後に孔門の教育に於いて説く所の如し。

周に遊び齊に往く

魯の昭公二十四年、孔子年三十五、權家の子なる門人南宮敬叔（孟子傳子の子遺命して孔子に屬したるもの）孔子が兄の子を之に娶はせる南宮は皆此の南宮敬叔と同一人なりとの説あり蓋し然らの幹旋により、周に遊びて禮樂を研究したり。

魯の南宮敬叔魯君に言うて曰はく、請ふ孔子と周に適かん。魯君之れに一乗車、兩馬、一豎子を與ふ。俱に周に適き禮を問ふ。（孔子世家）

とあるは是れ也。周室既に衰へて、鼎の輕重は問はれ、禮儀三百威儀三千の舊壯

概は見るよしもなければ、さすがに郁々たる文武周公のなごりは、猶其の面影を留むるものありしなるべく、孔子は此の時頗る其の研究に資する所ありしならん。周の圖書館に長たりし老聃に會ひ、禮を問ひ（孔子世家、禮記曾子問、老莊申韓列傳）し、樂を長宏に問ひ（禮記樂記、孔叢子嘉言篇）し、亦此の時なり。周より歸りて名聲漸やく高く、弟子稍益進みたり（世家）と傳へらる。

昭公二十五年、公其の巨室季氏叔孫氏孟氏と隙あり、公敗れて齊に走り、魯國亂れしかば、孔子乃ち出で、齊に往けり、此の時年三十六。齊に在りては景公に謁し其の政を問ふに對へしことあり（顔淵、景公之れを用ゐんとせしも、晏子の爲めに沮まれて止みき。事は墨子（非儒篇）に出づ、要するに孔子の禮樂主義は、晏子の節儉主義と相容れざるに在れど、簡明平易なる管仲の法治的覇政を失はざらんとする齊の國情は、理に於いて、修文飾禮なる孔子の徳治的王政と、相容れざりしは素とより也、必ずしも晏子の之れを沮むを須たず。孔子の齊に止まりしこと幾歳なりしやは明かならず。之れより十餘年の間、その動靜殆んど知り難し。

其の官仕

魯の定公五年、孔子年四十八、此時季氏の家臣陽虎政を専らにし、威勢公室を歴

孔子の小傳

し、大夫より以下皆僭して正道に反さしより、孔子は念を政治に断ちて、一意教育に従ひしに、弟子いよ／＼多きを加へ、遠方より來りて業を受くるものあるに至れりと史記世家に見ゆ。

陽虎の專横は益々甚しく、定公八年、三桓三桓とは魯の政治の實權を握り、季桓子、叔孫氏、孟氏の三大家なりを除去して之れに代らんとし、敗れて齊に走るに及び、孔子始めて魯に用ゐられ、司寇の官に擧げらるることとなり。司寇は未だ其の抱負を十分に行ひうべき位置にはあられど、是に於いて羽翼漸やく成らんとするを致せる也。

孔子が官仕中の主要なる成迹は、其の教化的事功(一)、其の夾谷の會に於ける外交的手腕(二)、少政卯を誅せしこと(三)、三都を墮たんとせしこと(四)等にして、事は皆孔子の事業として見らるべきが故に、之れを第三篇「官仕中の孔子」章下に叙したり。

而して此の第四の政策は孔子の最も政治家的經綸を發揮せんとしたるものなりしが、不幸中道にして失敗せしが爲め、羽翼未だ成るに及ばずして、魯を去らざるべからざるに至れり。其の去れる機會は論語及び孟子に、

齊人女樂を歸る、季桓子之れを受け、三日朝せず。孔子行る。(微子)  
孔子魯の司寇となる、用ゐられず。従うて祭る、燔肉至らず。晁を税がずして行る。(告子下)

とあるもの事實ならん。史記には之れを文飾して、齊人聞いて懼る、孔子政を爲さば必ず覇たらん、覇たらば則ち吾が地近し、我れ先づ并せられん、盍ぞ地を致さると。犁鉏いはく、請ふ先づ嘗みに之れを沮まん、之れを沮みて可ならずんば、則ち地を致すも庸ぞ遅からんやと。是に於いて、齊の國中の女子好きもの八十人を選び、皆文衣を衣て康樂を舞ひ、文馬三十駟、魯君に遣り、女樂文馬を魯の城南高門外に陳ぬ。季桓子微服し、往きて觀る再三、將に受けんとす、乃ち魯君に語り、周道の游をなし、往きて終日、政治に怠る。(孔子世家)

といへり。

孔子意を決して竟に魯を出で、遅／＼として行く、父母の國を去る(孟子萬章下)の情、亦誠に憐れむべき也。是れ定公十三年、孔子時に年五十六。

孔子は魯を去りて先づ衛に行きしに、靈公大に之れを優遇して、其の魯に在りしときの如く、粟六萬の俸祿を與えたりしは、史記衛の世家、孔子世家並びに之れを言へり。されど單に禮遇を蒙むるに止まり、其の意見の用ゐられしに非ざりしは、孟子に、孔子の衛の靈公に於けるは

際可の仕也。(萬章下)

と云へるに徴せらる。

靈公は凡庸の君なりしが如く、左の一小問答は、公の孔子を知らざると、孔子の之れに望みなきと、而して衛を去れるの意とを見るに足るべきものなり。

衛の靈公、陳の戰事陳の戰事を孔子に問ふ。孔子對へていはく、俎豆の事は則ち嘗て之れを聞く矣、軍旅の事は未だ之れを學ばざる也と。明日遂に行る。(衛靈公)

孔子世家に依れば、衛を去るの年定公卒したれば、此の時定公十五年にして、衛に俺留せしこと滿二年左右。

孔子既に魯衛に意を得ず、之れより曹、宋、鄭、陳等の諸國を周遊したり。其の間二三の罷すべきものを擧ぐれば、宋に於いて司馬桓魋の爲めに殺されんとし、微

天下を遍歴す

服して宋を過ぎし(孟子萬章上)といふ。其の何の故に此の難に遇ひしかは明かならざれど、孔子が

天、徳を予れに生ず、桓魋其れ予れを如何。(述而)

と壯語せしは此の時なり。次ぎに匡人の難あり、匡とは鄭の東、宋に近き一小邑也。此の時、孔子は又、

天の未だ斯文を喪はなざる、匡人其れ予れを如何。(子罕)

と宣言したり。後に陳蔡の難あり、

孔子、南、楚に適き、陳、蔡の間に厄せられ、七日火食せず。(荀子宥坐篇)

といふものは是れ也。此の時孔子は、

君子、博學深謀、時に遇はざるもの多し矣、何ぞ獨り丘のみならんや。(同上)

と遠觀したり。

孔子が此の周遊の間に於いて、しばしば隱者を接見して相問答せること、時勢の日に非にして、道の竟に行ひ難きを嘆せしこと等、論語處々に散見せるもの、今必らずしも擧げず、後章時に臨みて之れを言ふ所あれば也。

孔子が陳に在りしとき、既に魯に歸らんと志を起せることは、後に其の教育事業の條下に述ぶる所の如し。即ち先づ陳より衛に入れり、是れ衛の出公八年にして、魯に在りては哀公十一年、孔子既に年六十九、困頓艱苦の裡に老いて、鬚髮徒らに白きを加へしのみならず。歸心既に兆せり、固より衛に仕ふるの意なかりしと雖も、其の留宿極めて短かゝりしは左の如き事情ありしなり。

冬、衛の大叔疾、宋に出奔す。中略孔文子の將に大叔を攻めんとするや、仲尼に訪ふ。仲尼曰はく、胡篋の事は則ち嘗て學べり、甲兵の事は未だ之れを聞かざる也と。退いて駕を命じて行る。曰はく、鳥は則ち木を擇ぶ、木豈能く鳥を擇ばんやと。(左傳哀公十一年)

此の時魯人亦幣を以て孔子を招きしかば、孔子此の年を以て直ちに乃ち魯に歸れり。遍歴十有四歳、今にして漸やく歸り來たる、依然たる舊山河、而して世事益非也、意を官仕に絶ちたる孔子も、亦感慨に堪へざるものありしならん。たゞ其の舊門生冉求、子貢、樊遲の諸人、魯の要路に立ちて、其の才腕を揮ひつゝありしは、幾ばくか其の心を慰むべきものありしならん。

孔子魯に歸るや、哀公、季康子は之れを國老(左傳哀公十一年)として優遇し、待つに大夫の位次(憲問、先進)を以てし、しばしば之れに問ふに政治を以てせしは、哀公及び季康子と孔子との問答が、論語、禮記及び大戴禮等最も多く之れを載せられたるにて知らる。されば孔子の晩年は、其の餘暇として、此等の顧問に應せしと舊門生の政局に在るものを間接に監督するとに當り、一意其の力を傾注せしものは、教育と述刪となりしが如し。是れ亦後に詳述すべきが故に今贅せず。壽長ければ悲哀多く、不幸に生長したる孔子は、亦其の不幸を老死の際に繰り回へせり。晩年相尋いで其の子伯魚と、又其の高門逸尼、顔子、子路の二人とを喪ひしは、如何ばかり其の不幸を嘆せしめけん。殊に顔回の死を聞きては、孔子之を哭して慟せり(先進)とまで記されたるは、孔子が一生の中に感じたる最大悲痛事なりしと思はる。

斯くて此等諸人の逝けるより一兩年を隔て、孔子亦其の蹤を追うて歿せり。時に魯の哀公の十六年、周の敬王四十一年、耶蘇紀元前四百七十九年、我が神武紀元百八十二年、陰曆二月十一日、享年七十有四。魯の城北泗水の上ほとりに葬はなる(世家)今

の山東省曲阜縣至聖林即ち是れ。

此の章、故盤江博士の『孔子研究』に負ふ所少なからず、其の歳時の如き、悉く其の考證に従ふ。但し、孔子が魯に歸りしを六十八歳となせるは、惜むべき誤謬なり。

## 第二章 歴代の追尊

死後の崇敬

孔子の卒するや、哀公之れに誄し、詞中孔子を呼びて、

嗚呼、哀しい哉、尼父。(左傳哀公十六年、禮記檀弓)

といへり、其の生時之れを崇敬思慕せしこと、而して死して益々其の甚しきとを見るべし。思ふに哀公は孔子の晩年に相知り、其の性格の最も圓滿に成就せるに接したれば、深く孔子を景仰するに至りしならん。中庸に、仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章し、上天時に律り、下水土に襲る。辟へば、天地の持載せざるなく、覆轉せざるなきが如く、辟へば四時の錯行するが如く、日月の代明なるが如く、萬物並び育して相害せず、道並び行はれて相悖らず。小徳は

川流し、大徳は教化す。此れ天地の以て大となす所以也。

とあり、假りに子思の筆とすれば、餘りに乃祖を稱賛するに過ぐるが如しと雖も、今姑らく其の離れの言たるを問はず、孔子を距る未だ甚だ遠からずして、後人の孔子を崇敬する亦甚だ至れるを知るべし。

正面より孔子の教へに反對する楊朱すら、

楊朱曰はく、天下の善は之れを舜禹周孔に歸し、天下の惡は桀紂に歸す。中庸彼の四聖は、善の歸する所なりと雖も、苦しみて以て終るに至れり。(列子楊朱篇)

といへり。楊朱且つ之れを呼びて聖といひしこと、既に此の時一般に孔子の偉大なるを認め、舜禹及び周公と並びて孔子を稱するに至りしこと、を知るに足る。

されど、墨子は一時孔子と相並びて稱せらるゝの盛を見たるが如く、先秦孔墨を并せ言ふもの頗る多し。其の一二を擧ぐれば、

孔丘墨翟は地なくして君たり、官なくして長たり。天下の丈夫女子、頸を延き

孔墨并稱及  
派の踏學



踵を擧げて、之れに安利せんこと願はざるはなし。(列子黃帝篇)  
其の大事を措あやまるに及びては、孔子墨翟の賢と雖も、未だ救ふ能はざる也。(尸子貴言篇)

仲尼墨翟は匹夫なるも、今宰相に謂うて、子は仲尼墨翟の如しと曰はば、則ち容を變じ色を易へて、足らずと稱するものは、士誠に貴き也。(莊子盜跖篇)

世の顯學は儒墨也。(韓非子顯學篇)

等の如き是れ也。思ふに墨子は、先秦諸子の人物大抵皆辟小固陋の趣あり、且つ多くは自ら爲めにする所ありしに似ず、高邁廉潔にして、所謂墨突黔くろまらずと稱せられしが如く、熱誠なる教化を布施して是れ日も足らざりしが故に、其の人格の力は、一時孔子と並び稱せらるゝまでに其の道を弘めしと見ゆ。されど其の教とする所は、道徳としては餘りに理想に逸し、宗教としては猶ほ信仰を集中する所以に乏しく、一時の勢力は遂に時と共に消散し去るに至れり。墨子すら且つ然りき、其の餘所謂諸子百家の出沒起伏するもの、之れを孔子に比すれば、其の之れを首唱するもの、人格に於いて月窟げく管ならず、其の博辯宏辭時に世を動かす

ことありと雖も、長く人の赤心を繋ぐに足らざる(一)と、奇異を衒ひ、幽遠を誇るはありと雖も、道義は必らず常識を基礎とするに非ざれば、實踐する能はざる(二)と支那上代より傳來せる正統の思想圏外に逸する(三)との爲めに、天下一統に歸し兵戈全く收まり、人心漸やく静かなるに及びて、孔子は益其の光輝を揚げ、其の教は遂に萬世不磨となるに至れり。

今、圖譜的に歷朝追尊の主要なるものを左に録す。

漢代の尊信

漢の高帝十二年、魯に過ぎりて孔子を祀り、諸侯王卿相に詔して郡國に至るときは、先づ廟に謁して後、政に従はしむ。帝王の孔子を祀るは此に始まる。

元帝、孔子の後裔なる太師褒成君孔霸に詔し、食邑八百戸を以て孔子を祀らしめ、霸に關内侯と賜ふ。後裔の侯に封せられしは此に始まる。

平帝元始元年、孔子に諡號を贈りて褒成宣尼公といふ。孔子を稱して公といひしは此に始まる。

後漢明帝永平二年、汎く天下の學校に詔して皆周公孔子を祀らしむ。學校に孔子を祀るは此に始まる。其の十五年親しく孔子闕里の舊宅に幸し、仲尼及び

七十二弟子を祀る。

聖帝元光元年、鴻都門學を置き、此れに孔子及七十二弟子の像を畫く。畫像を作りしは此に始まる。

魏の正始七年、太常をして釋奠の禮を行はしむ。孔子を釋奠するは此に始まる。又太半を以て辟雍に祀る。太學に釋奠するは此に始まる。

晋武帝太始七年、皇太子親ら太學に臨みて釋奠を行ふ。太子の釋奠するは此に始まる。

宋高祖永初中、魯郡に詔して、孔子の墳廟を修理せしむ。

北魏孝文帝太和十六年、孔子に文聖尼父と諡す。

北齊天保中、張憑の議に依り、毎月朔日、孔子を拜し、顔子を掛するの禮を行はしむ。朔日行禮は此に始まる。

隋の文帝開皇の初めより、州縣に命じて春秋仲月必らず釋奠の禮を行はしむ。唐太宗貞觀二年、別に周公を祀り、孔子を尊びて先聖となし、顔子を先師となして、これに配す。同四年各州縣に廟を立てしめ、左丘明等二十二人を配す。

魏晉六朝の  
尊信

隋唐五代の  
尊信

高宗乾封元年、孔子に太師を贈る。

元宗開元二十七年、孔子を追諡して文宣王となし、十哲に公侯爵を贈り、曾子以下六十七人に伯爵を贈る。孔子の追王は此に始まる。

後周高祖廣順二年、闕里に奠して廟墓に謁す。此時上言するものあり、天子は異代の陪臣を拜すべからずと。高祖曰はく、夫子は聖人也、百世則を取ら、安んぞ拜せざるを得んや。

宋真宗の大中祥符五年、諡號を加へて至聖文宣王といふ。

仁宗至和二年、詔して孔子の後裔を封じて衍聖公となす。衍聖の稱は此に始まる。

徽宗崇寧元年、孔鯉を封じて泗水侯となし、子思を沂水侯となす。

武宗十一年七月、孔子を追封して大成至聖文宣王となす。

文宗至順元年、顔子を復聖、曾子を宗聖、子思を述聖、孟子を亞聖と稱す。

明の太祖洪武二十四年、敕して、毎月朔望、太學には祭酒以下釋菜の禮を行ひ、郡縣の學には長吏以下學に詣りて香を行はしむ。毎月朔望孔子を拜するの禮を

行ふは、清朝となりても、今猶ほ各學校に行はる。

世宗嘉靖九年、祀典を更正して、至聖先師孔子と改稱し、四配を復聖顔子、宗聖曾子、述聖子思、亞聖孟子と稱し、十哲には皆先賢と稱し、左丘明以下を先儒と稱し、塑像を去り、木主を設く。

清朝の尊信

清の世祖順治二年、孔子の諡號を大成至聖文宣先師孔子となし、十四年又改めて至聖先師孔子となす。

康熙帝二十三年、御筆萬世師表の四字を匾額として文廟に頒つ。其の二十五年、御製の孔子の贊及び顔曾思孟四子の贊を各省に頒ちて碑を立てしむ。

雍正帝元年、内閣禮部に諭し、孔子の父祖先世五代を追封す。其の時の上諭は後世の孔子に對する尊信の益、篤きを知るべし。いはく、五倫は百行の本、天地君親師は、人の宜しく重んずべき所。而して天地君親の義は、又師教に頼りて以て明かなり。古へより、師道は孔子に過ぐるなし、誠に首出の盛なり。我が皇考、儒を崇み、道を重んずること、千古に超軼し、凡そ孔子を尊崇する、典禮備はらざるなし。朕に至り、皇考の教育を蒙り、幼より書を讀

み、心景仰に切なり、再たび尊崇を加へんと欲するも、更らに増すべきの處なし、故に禮部に勅し、孔子先世五代を追封す。以下略

光緒帝の晩年、孔子の祭典を中祀より高めて大祀に列す。歴代の帝王よりも重く、祭天と同じく天子親ら致祭する也。

我が國の尊信

我が朝に於いて孔子を尊信する、明治以前に在りては、多くは支那の例に循率せしものなるが故に、特に言ふの要なし。而して明治以降に在りては、即ち然らず。我が邦の教育の基本たる教育勅語は、孔子の教と殆んど一致するものにして、孔子の真髓は却つて我れに在るを見るや、支那が近年新教育に熱心なるものに、我が勅語に倣ひて教育の主旨を定め、忠君尊孔を以て最も其の主要なるものとし、即ち急に孔子の祀格を進めたる也。孔子は固より世界民衆の共有にして、其の國藉を問ふの要なしと雖も、強いて之れを論ずれば、今や寧ろ支那の孔子にあらずして、日本の孔子なるが如く、支那却つて我が邦に學びて其の道を尊信するを知るに至りしが如きは、亦奇なりといふべき也。即ち孔子の形骸は既に支那に死せしも、其の氣魄は今や日本に生きつゝある也。近ごろ孔子祭典會なる

ものあり、我が朝野の名士、雲集して孔子を祭り、以て謝恩の衷を表しつゝあり、亦美なりといふべし。而かも歴代孔子を追尊して殆んど至らざるなく、清の雍正帝をして亦増すべきの餘地なしと嘆せしめ、其の父祖を追封するの己むを得ざるに出でしめし程なるに、而かも其道の精髓は却つて顧みられざるが如き、亦愚ならずや。以爲へらく、孔子を尊信するは、決して祭祀の末にはあらざる也と。

各省孔子廟制

廟門	宋の徽宗大觀四年より王者の禮を用ひて二十四戟を門に立つ
大成殿	同じく徽宗の名づけし所にして親ら額を書して各省の廟に配つ
明倫堂	魏晉以後皆之れあり其の名は元の世祖のとき始めて見えしが如し
尊經閣	元の仁宗のとき始めて建つ以て書籍を儲ふ
敬一亭	明の世宗の敬一箴を石に鐫り亭を作りて之れを覆ふもの
泮池	或は門内に在り或は門外に在り其の名は詩經の魯頌に出づ
射圃	明の太祖洪武二十五年之れを置く射を習ふ處
名宦賢祠	又洪武年中より始まる地方の先賢名臣の祠を孔子廟の左右に設く

第二篇 孔子の人格

第一章 完全なる尋常人

先づ孔門の逸足に  
足せんと

後人の之れを観る、寧ろ孔門の逸足をして之れを言はしむるに如かず。彼等は日夕孔子に侍し、其の教に倣し、其の化に浴し、其の推奨と激勵とを蒙り、其の訓誨と叱責とに接し、其の怒りと笑ひと喜びと悲しみとを睹、大にして高きものをも仰ぎ、微にして細なるものをも知り、而して皆な其の所謂其の門を得るもの(子張)其の學術性行を解すること、最も詳なれば也。

孔門の第一人、孔子と相見る父子の如く(先進)最も善く薰陶を享け、若し天死するなかりしなからば、孔子の學問と事業とを繼承するもの、必らず此の人なるべかりし顔回は、喟然として嘆じていはく、

之れを仰げば彌、高く、之れを鑽れば、彌、堅し。之れを瞻れば、前に在り、忽焉として後に在り。夫子循々然、善く人を誘ふ。我れを博うするに文を以てし、我れ

完全なる尋常人

を約するに禮を以てし、罷めんと欲するも能はず。既に吾が才を竭し、立つ所卓爾たるあるが如し、之れに従はんと欲すと雖も、由末よしまきのみ。(子罕) 以て其の道德の高大堅實なる、而して人を薰化する力の最も偉大なりしを見るべし

孔子に事ふる最も長く、其の晩年に侍し、又其の歿後には、門友と共に三年の喪を治め、其の散じて歸りし後、尙ほ獨り居ること三年(孟子滕文公上)、通じて六年の久しき、悄然として先師の墓を護し、孔子に服すること最も篤かりし子貢はいはく、

其の禮を見て、其の政を知り、其の樂を聞きて、其の徳を知る。百世の後より、百世の王を等するに、之れを能く遠ふなき也。生民ありてより以來、未だ夫子あらざる也。(孟子公孫丑上)

屢、嚴責されたる(公冶長、而かも其の才氣の英發なる、孔子は之れを其の門の俊秀に列し、先進)、又之れを訓ふるに吝ならざりし宰我はいはく、予を以て夫子を觀れば、堯舜に賢ること遠し矣。(同上)

此の二人は孔子の徳澤、古聖王に優ること遠きをいふ也。

孔子の後、其の言の孔子に類する(禮記檀弓)を以て、一時孔門の塾頭に推されし(孟子滕文公上)ことある有若はいはく、

豈惟民のみならんや。麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、泰山の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類也。聖人の民に於ける、亦類也。其類を出で、其の萃を抜く、生民より以來、未だ孔子より盛んなるはあらざる也。(孟子公孫丑上)

父子共に孔子に學び、其の門の最年少を以て(史記仲尼弟子列傳)夙に教に服し、其の重厚剛毅の質、終生師説を守りて失はざる曾子はいはく、江漢以て之れを濯ひ、秋陽以て之れを暴し、罔々乎として尙ふべからざるのみ。

(孟子滕文公上)

此の二人は、共に孔子の人格の高崇雄大、昭明較著なるを贊嘆せるもの。有は其の高く人類を傑出せるをいひ、曾は其の光輝の燦然たるをいふ。

豫言者は毎に其の故郷に入れられず、時人は屢、高德を解せず、或は孔子を毀る

ものありしと見え、爲めに子貢は之れを解せしことあり。

叔孫武叔、仲尼を毀る。子貢曰はく、以て爲すなき也、仲尼は毀るべからざる也。他人の賢者は丘陵也、猶ほ踰ゆべき也。仲尼は日月也、得て踰ゆる無し。人自ら絶たんと欲すと雖も、其れ何を日月に傷まんや。多に其の量を知らざるを見るなり。(子張)

以て孔子を日月に喩ふ、衆人批判の外に超絶するをいふ也。

子貢の言語に達せるや(先進)或は子貢を以て孔子より優れりとなすものありしと見え、子貢は極力之れを辯せり。

叔孫武叔、大夫に朝に語りて曰はく、子貢は仲尼よりも賢れり。子服景伯以て子貢に告ぐ。子貢曰はく、之れを宮牆に譬ふ、賜の牆や、肩に及ぶ、室家の好きを窺ひ見るなり、夫子の牆は數仞、其の門を得て入らずんば宗廟の美、百官の富んなるを見ず、其の門を得るもの或は寡し矣、夫子の云ひ、亦宜ならずや。(子張) 陳子禽、子貢に問うて曰はく、子の恭をなすや、仲尼豈子よりも賢れるか。子貢曰はく、君子一言以て知となし、一言以て不知となす、言慎まざるべからざる也。

夫子の及ぶべからざるや、猶ほ天の階して昇るべからざるがごとき也、夫子の邦家を得ば、謂ふ所、之れを立つれば、之れを立て、之れを道びけば、斯に行き、之れを綏んずれば、斯に來り、之れを動かせば、斯に和す、其の生や榮、其の死や哀、之れを如何んぞ、其れ及ぶべけんや。(同上) 以て牆堵の高く、宮殿の美なるに喩へ、以て天の歷階すべからざるに喩ふ、其の之れを言ふ亦至れる哉。

平凡なる偉人

以上諸子の言、孔子を嘆美賛稱すること至らざるなしと雖も、皆孔子を以て人界の秀傑となし、或は神の子と稱し、若しくは佛陀の現身となすが如き、宗教的神靈的屬性を付與せず、尋常人を以て待ちしは一の注意すべきもの也。有子の如きは、明白に「亦類也」と云ひ、孔子に尊ぶべきは、其の出類拔萃に在りとなせり。孔子が其の教義に於いて訓を億兆に垂るゝのみならず、其の事業に於いて光を萬世に放つのみならず、其の人格に於いて長く範を仰がしむるものは、此に存す。其の心的生活と身的舉動とを見るに、殆んど何等の異なるものなし、寧ろ極めて平凡なり。尋常人の有するもの、孔子皆之れあり、尋常人の有せざるもの、孔子皆

之れなし、強いて其の異なる所を求めば、大小の差のみ。而して努めて其の善なるものを擇び、固く執りて性の如くならしめ、力めて其の悪なるものを去り、掃ひ盡して性の如くならしめしのみ。異行なく、奇想なし、平凡なる偉人といふべく又尋常なる英傑といふべきか。妻もあり、子もあり、家庭を有し、酒も飲みたり、葷も食へり、郷人の祭には自ら出でたり、用ゐらるれば、吏となり、臣に在れば俸祿を得、官を去れば一良民たるのみ、殆んど他の奇なし。されば

子、怪力亂神を語らず。(述而)

とて、其の言ふ所、其の考察する所、全く常識を出でず、常識を以て律する能はざるものは、其の取る所にあらざりき。又

季路、鬼神に事へんことを問ふ。子曰はく、未だ人に事ふる能はず、焉くんぞ能く鬼に事へん。敢て死を問ふ。曰はく、未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん。

(先進)

子貢曰はく、夫子の文章、得て聞くべき也、夫子の性と天道とをいふ、得て聞くべからざるのみ。(公冶長)

と云ひ、其の教ふる所、一も常識以外に涉らざりき。晩年易を喜び、少しく思ひを哲學的研究に凝り、遂に天人合一の理を論ずるに至りしと雖も、是れ亦多く空想に趨らず、歸する所は人間日常の行事のみ。故に其の死の將に臻らんとする二三年前、老來圓熟の境を自ら説明していはく、

七十、心の欲する所に従ひて矩を踰へず。(爲政)

と。是れ強いて努めずして心おのづから道に合するを自覺せるの妙境にして其の規矩準繩を失はずといへるもの、即ち人生の常道を逸せざるの謂なり、明瞭に孔子の性格を表自せるものといふべし。されば、

子の慎しむ所、齊、戰、疾。(述而)

ともあり、孔子ならずとも、何人も此の三事には心を用ゐざるはあらず、他の奇なき處に、孔子の偉大なる所以は存す。又

子曰はく、隱を索め、怪を行ふは、後世述ぶるあらん、吾れは爲さじ矣。(中庸)

とも云へり。異常の想、異常の言、異常の行、是れ皆孔子の之れを爲すを肯てせざる所、故に孔子の最も尊重する所は、尋常適宜の邊に在り。故に曰はく

中行を得て之れに與みせずんば、必らずや狂狷乎。狂者は進んで取る、狷者は爲さざる所ある也。(子路)

孟子之れを解していふ、

孔子、中道を得て之れに與みせずんば、必ずや狂狷乎。狂者は進んで取る、狷者は爲さざる所あり。孔子豈中道を欲せざらんや、必らずしも得べからず、故に其の次を思ふ也。(盡心下)

と、中行中道は斯くの如く難し、孔子故にいふ、

中庸の徳たる其れ至れるかな。民久しうする鮮すくなくし矣。(雍也) 從來「鮮」は「久し」と誤り也

中庸は其れ至れるかな。民能く久しうする鮮し矣。(中庸)

尋常を出づるは却て易く、尋常適宜の邊に在るは即ち難し。其の難きものを行ひ、而して能く大なるものは我が孔子也。

孔子の多知なりしことは、當時有名なりしと見え、列子に、兩小兒、出日と中日との遠近を争ひ、裁を孔子に仰ぎし寓話あり、其の終りに、

兩小兒笑うて曰はく、孰れか汝を多知となすか。(湯問篇)

多知多藝多能博學

とあり。元より假排の寓言なりと雖も、此くの如き語の寓言者に書かるゝは決して偶然ならず、孔子は多知なりとして、其の名一世に聞こへありしと見ゆ。其の多藝なることは、後にいふが如く、琴、瑟、笙、簫、皆之れを善くせし一事を以ても知らるべく、其の幼時の貧賤なるや、決して六藝の教育を満足に受けたりとも覺えざるに、射御の術にも長せしと見え、自ら、

吾れ何を執らんか、御を執らんか、射を執らんか、吾れは御を執らん矣。(子罕)

といへり、此文強いて文外の意義を加ふるものあるも、讀んで字の如く、平明解すべし、即ち吾れは何が得意なるべき、御にせんか、射にせんか、寧ろ御の方なるべしといへるに過ぎず。斯く孔子は自ら御を擇ぶと雖も、射も決して得意ならざるにあらざりしが如く、

孔子、州相の野に射る。觀るもの堵牆の如し。(禮記射義篇)

との逸話あれば、射禮に於ける儀容の堂々たるものありしならん。又弋するに宿を射ず。(述而)

とあり、宿鳥を射せしめざるにあらす、自ら射ざるの意なれば、其の技術に於いて



も、飛鳥を射落し得たるならん。孔子は自ら其の多藝なるを許し、其の故を語りて、

予れ試みられず、故に藝なり。(子罕)

といひしことあり。少時貧賤にして未だ人に用ゐられざりしかば、衣食の資を藝に仰ぎしなり。されば、其の射御に巧みなるは、他人の僕御たりしこともありしならん、鳥を射て之れを嚮ぎしこともありしならん、其の他、種々の藝能を覺えしならん。左の言も亦此れと同じ。

太宰、子貢に問うて曰はく、夫子は聖なるものか、何ぞ其れ多能なるや。子貢曰はく、固より天之れに將聖を縦す、又多能なる也。子之れを聞きて曰はく、太宰我れを知るか、吾れ少なるや、賤故に多く鄙事を能くす、君子多からんや、多からざる也。(同上)

多能は孔子自ら之れを許せども、其の君子たるに於いては何等の干繋あるなしとなせる也。

孔子既に多藝多能の質あり、加ふるに多知多聞にして、寸時も學業に怠らざる

や、當時の文化が有し得べき知識は、一切之れを蓄積せざるはなかりしと見え、遂に極めて博學なるに至れり。達巷の黨人は目して、

大なる哉孔子、博學にして名を成す所無し。(子罕)

と稱したるも、列子に、

博きこと孔丘の如く、術、呂尙の如し。(說符篇)

と稱したるを見れば、博學の名は後に一世に轟き渡れりしと見ゆ。

孔子の多知博學なるは、其の來り問ふもの、世間萬事一切に涉りし

教育の條参照を以

ても知らるべく、樊遲の如きは稼圃を問ひ(子路)、衛靈公の如きは軍旅を問へる(衛靈公)とすらありき。國語の魯語に記する所を見れば、孔子は季桓子の爲めに、其の井を掘りて土缶を得たるにつきて説明し、太宰の爲めに、其の會稽より得たる大さ三十尺の大人骨につきて講じ、又陳侯の爲めに、其の庭に墮ち來りし石磐につきて教へ、今より見れば、其の説笑ふべきものありと雖も、當時に於ける博物學人類學、古生物學等の最高なる知識たりしは勿論なり。

美的素養に  
富む

孔子は文藝に對して深き興趣を有せしが如し。詩は寧ろ道義及政治又は博

完全なる尋常人

物等の實用的知識其の教育より之れを推重せりと雖も詩三百一言以て之れを蔽へば曰はく思ひ邪なし爲政といへるが如きは詩の直接なる道義的效果といはんよりも寧ろ文藝が人の性情を陶冶せる間接的效果なりと見られ得べきが故に詩は亦孔子の文藝的趣味を満足せしめしものなりしならんか。而して音楽に對しては深き趣味と正しき鑑識と練達せる技能とを有せしが如し。

子齊に在り韶を聞き三月肉味を知らず。述而

子人と歌ふ善ければ必らず之れを反せしめ而して之れに和す。同上

師樂の始關雎の亂洋洋乎として耳に盈つるかな。泰伯

榮啓期一たび彈じて孔子三日樂しむ。淮南子主術訓

の如き音楽に對して深き趣味を有するものたり。又

子韶を謂ふ美を盡せり矣又善を盡せり矣武を謂ふ美を盡せり矣未だ善を

盡さざる也。八佾

子魯の大師に語りて曰はく樂は其れ知るべき也始め作るや翕如たり之れに

從ひて純如たり儼如たり繹如たり以て成る。同上

の如き、音楽に對して正しき鑑識を有するものたり。又孔子自らも亦音楽の名手たりしは後章孔門の教育に於いて述ぶるが如く其の家塾は常に洋々たる樂聲の絶えざりしにても知らるべきが更らに

瑟を取りて歌ふ。陽貨

磬を擊つ。憲問

孔子琴を鼓するを師襄に學ぶ。淮南子主術訓

既に祥す五日琴を弾じて聲を成さず十日にして笙歌を成す。禮記檀弓上

由の瑟奚を丘の門に於いてせん。先進

等によりて見れば孔子は琴をも鼓し瑟をも弾じ磬をも擊ち笙歌をも成せるものにして恐らくは當時の主要なる樂器は孔子總べて之れに熟せしならん。

孔子は動的方面に於いて甚だ猛烈にして又其向上心は少時しばしばらくも已まざりしに似ず靜的方面に於いて斯く文藝趣味に富めるが如く其の情の温にして美なる誠に欽するに勝へたるものあり。例へば其の友情の濃やかなりしは、

朋友死して歸する所なし。曰はく我れに於いて殯せん。鄉黨

完全なる尋常人

其の戀愛温情

孔子の人格

とて、友の客死せるを、其の家に殯せし入棺して存置し遣にても知らるべく、其の同情に厚かりしは、

子、喪あるもの、側に食すれば、未だ嘗て飽かざる也。子、是の日に於いて哭すれば、則ち歌はず。(述而)

子、齊衰紵の喪にするものを見れば、狎るゝと雖も、必らず變ず。(郷黨)  
子、齊衰するものと、中略替者とを見る、之れを見る、少者と雖も、必らず作たつ、之れを過ぐれば、必らず趨る。(子罕)

等の記載にて知らるべく、而して其の慈愛は禽獸にも及べり。

子は釣りて綱せず、せして宿を射ず。(述而)

されど、

鹿焚けたり。子朝より退きて曰はく、人を傷くる乎と。馬を問はざりき。(郷黨)

と記せらるゝを見れば、如何に其の愛重せし馬なりとも、而して僕婢の卑しきを以てしても、馬を思ひて人を思はざるが如きことなかりし也。是れ理に於いて

其の方正謹

固より然りと雖も、斯くの如き倉皇の際に當りては、平然として偽善を装ふものにあらざる限り、而して心より人を尊重するものにあらざれば、先づ馬を問ひて僕婢を問はざること、上流者には有りがちの事也。

温情の斯くの如く、嚮然拘すべきと共に、身を持つること方正謹嚴なりしは、孔子が最も禮を尊重せしと相待ちて、頗る著しきものあり。

其の宗廟朝廷に在る、便ととして言ふ、唯謹むのみ。(郷黨)

君在れば、跽恭敬踏敬如敬たり、與敬如敬たり。(同上)

公門に入る、鞠躬如身を曲ぐる也なり、容らざるが如し。中略齊下縫を攝して堂に升る

鞠躬如たり、氣を屏して息せざるものに似たり。(同上)

の如きは、朝廷に於ける慎重謹嚴の一斑なり。

孔子、郷黨に於ける恂と如たり、言ふ能はざるものに似たり。(同上)

郷人の飲酒飲酒禮としてには、杖するもの、長出づれば、斯に出づ。(同上)

郷人の讎讎には、朝服して阼階に立つ。(同上)

の如きは、郷黨に於ける恭敬謹嚴の一斑なり。

完全なる尋常人

削正しからざれば食せず。(同上)

府正しからざれば坐せず。(同上)

食するに語らず、寝ぬるにものいはず。(同上)

人を他邦に問ふ、再拜して之れを送る。(同上)

車に升る、必ず正立して綬を執る。車中、内顧せず、疾言せず、親指せず。(同上)

等の如きは、家庭に在りて、又は其の獨りを慎しむに於いて、方正謹嚴なりし一斑を肥録せるものなり。

孔子は般人の裔なり、宋の湣公の末也、故に般の微子啓の後也、左傳(昭七年)に孔丘を聖人の後といへるは是れ也。般はもと素朴文なきを以て國を建つと稱せらる。さればにや、其の末なる宋は、時の周に對しては、前朝敗殘の後を以て一國に俟たりしと共に、其國風民情頗る方正謹直の風あり。或は之れを貶稱すれば、庸愚拘泥、時と通ずるを知らざりしともいはる。故に左傳に宋襄の仁の如き、孟子に偃苗の痴農の如き、韓子に守株の愚夫の如き、其他春秋戰國時代に出でし痴愚の寓話は、殆んど其の例を宋人たらしめざるはなし。孔子の謹嚴なる、或は之

れを其の性にするか。

謹嚴身を持するもの、若しくは孤峭となり、若しくは狷介となり、若しくは拘直となり、若しくは狹窄となる。而かも孔子は然らざりき、寛裕通らず、頗る和舒の趣ありき。其の家にあるや、

居ること容せず。(同上)

とあり、容は客の誤まりとなすものあれど、容字亦通せざるにあらず、悠々自適、強いて儀容をなさいるをいふ也。

子の燕居する、申す如たり、天す如たり。(述而)

も、次章いふ所の如く、教育的感化に解するも、亦一説なるも、姑らく古來の説に従へば、閑居、舒暢の風、丰を形狀せる也。

酒は量りなし、亂に及ばず。(郷黨)

とあれば、酒量も甚だ少なからざりしと見ゆ。

子武城に之き、絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑うて曰はく、鷄を割くに焉くんぞ牛刀を用ゐん。子游對へて曰はく、昔しや、偃やこれを夫子に聞く、曰は

く、君子道を學べば則ち人を愛す、小人道を學べば則ち使ひ易き也と。子曰はく二三子、偃の言はなり、前言は之れを戯むるのみ。(陽貨)  
の如き、莞爾として戯謔せし也。又小人にして哂者たる佛肸の召に應じて孔子往かんとせし時、

子路曰はく、昔者、由や、これを夫子に聞く、曰はく、親ら其の身に不善をなすものは、君子入らざる也と、佛肸、中牟を以て哂く、子の往くや、之れを如何と。子曰はく、然り、是の言あり、堅を曰はずや、磨して磷せず、白を曰はずや、涅して緇まず、吾れ豈匏瓜ならんや、焉くんぞ能く繋りて食はざらんや。(同上)

の如き、飽くまでも木訥なる子路が熱誠なる諫言に對し、之れを冷嘲せざる程度に於いて、孔子も亦眞面目顔に滑稽を弄せる處、好對照、好笑話、之れを讀むもの噴飯を禁ずる能はず。謹嚴なる孔子も、一面に於いて這般の餘裕ありし也。

一日、子路、曾皙、冉有、公西華侍坐し、四方山の談話の末、話題は移りて各其の志をいふこととなりしに、子路等三人、政治を論じ、禮樂を言ひ、ひとり曾皙が、暮春には、春服既に成り、冠者五、六人、童子六、七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸

らん。(先進)

といひしとき、孔子喟然嘆じて曰はく、吾れは點に與せん也と、其の意時に遇はざるの嘆なきにあらねど、孔子が曾皙の飄逸なる志望に與せしもの、亦一面に於いて其の寛裕舒暢の趣致あるを知る也。

孔子は其の意志の力の勇猛なるに於いて、尋常道學先生の比ならず。其の修養と蓄積と、是れ日も足らざる、既に其の意志力の強大なるを知るべく、自ら實行に勇なると共に、人に教へて屢、毅然たる勇氣の尊重すべきをいへるが如き、皆是れならざるはなし。強大なる意志の力は、素より平生行事の間に現はれつゝありと雖も、一旦非常の事あるに際會すれば、猛然として人の視聽を聳動し來たる孔子に在りては、夾谷の會の如き、周遊中に遭遇せし艱難の如きは、蓋し是れ也。夾谷の會は次篇之れを序述するが故に、今の其の詳を略すと雖も、當時魯の弱小を以て、齊の強大に當りて、正義を持し、其の壓迫に抗し、遂に獨立國たる對面を失はしめざりしが如き、之を以て、單に巧妙なる外交的手腕と見るものは、未だ人事を解せざるもの也。世態百般、才術を以て一時を糊塗するものは、毎に必らず事

を敗る。其の一時を全うするが如きものは、即ち却て終局を誤まる所以ならずんばあらず。當時孔子が正を執りて下らず、竟に終局の克を奏せしが如き、決して手腕の巧にあらず、名分の正しき也、知謀の力にあらずして意志の力也。又屢次艱難に遭遇し、時に死生の境に出入して、而かも懼れず屈せず、悠然自若として、

天徳を予れに生ず、桓魋其れ予れを如何。(述而)

天の未だ斯文を喪はらざる、匡人其れ予れを如何。(子罕)

と云ひ、高く自ら標置して何等介然たるものなきが如き、其の意氣殆んど三軍を叱咤すべく、何ぞ其の形貌の偏々として喪家の狗の如く(史記孔子世家、韓子外傳)九なりしに似ざるや。

以上述べ來りし所を要約すれば、孔子は人格として殆んど完全なる境域に達したる也。其の多知博學なる、雜然として幾多の知識が、組織なく系統なく、其の頭腦の中に蓄積されつゝあるにあらざりし也。

子曰はく、賜や、女予れを以て多く學びて之れを識るものとなすか。對へて曰

完全なる達

はく、然り、非か。曰はく、非也、予れ一以て之れを貫く。(衛靈公)

とは此の消息を漏らすものにあらずや。皇侃は一貫を解して「貫は猶ほ統のごとき也。譬へば繩を以て物を穿ち、貫統あるが如き也」といへり。如何に博學なりとも、個々別々不秩序の知識は眞の知識に非ず、一切の知識を組織的に整頓して、之れが所謂一貫の條理を得るに及びて、始めて眞の博學なりといふべし。

而して、其の尋常中行の邊を守りて、敢て他の異想奇行なかりしは、孟子が之れを評して、

仲尼は、已甚はたしきを爲さざるもの。(離婁下)

といへる、一言以て孔子の大體を領すといふべし。

子貢が子禽に對へて、孔子の道徳を説明するに、

夫子は温良恭儉讓。(學而)

の一語を以てせる、孔子の風采殆んど眼前に在るが如きを覺ゆ。論語の記者は又孔子の性格を擧げて、甚だ要領を得たり。いはく、

子、温にして厲、威ありて猛からず、恭にして安し。(述而)

孔子の人格

と。温厚なれども優柔ならず、威厳あれども親しみ易く、恭儉なれども固陋ならず。又逆に嚴厲なれども温厚、近づき易けれども狎れ難く、安泰なれども恭敬。眞に理想的完全なる人格なりといふべし。更らに左の一言は、孔子の人格の心理學的説明とも見らる。

子曰はく、君子の道は三、我れ能くする無し、仁者は愛ひず、知者は惑はず、勇者は懼れずと。子貢曰はく、夫子自ら道ふ也。(憲問)

仁は孔子に在りては最高絶對の道德なりと雖も、知と勇とに對して之れをいふときは、家人朋友及び民衆を親愛するの義よりして、情の美德なりと解され得。さらば、知仁勇三達徳は之れを知情意三面に配するを得べく、子貢は孔子より君子の三道を聞きしに臨み、直ちに孔子の人格に想ひ到りて、孔子は實に知的情意的三方面に於いて、不偏完全なる發達を遂げたるものとなしたる也。

終りに一事の附言すべきは、孔子が謙讓の美德に富めりといふこと也。孔子が謙徳に富めりとのことは、古來の諸家が皆言ふ所にして、其の例を求むれば亦少なからず。聖と仁とを以て居らず、君子を以て居らざりしは屢言へる

孔子の謙徳  
につきて

所也。されど此れは果して謙徳と見らるべきや否や。孔子は自ら聖たり仁たり君子たるを知りて、而して聖たり仁たり君子たるに居らざりしにはあらず。孔子の向上心に富み、修養と蓄積とに怠らざるや、常に自ら足らざるを自覺したり、實際己れは未だ聖たり仁たり君子たる遠しと思ひ居りしに相違なし。孔子の自ら許せるは、學んで倦まざること、教へて倦まざること、及び老年に至りて『矩を踰へざる』の境に達したることのみなり。自覺せるは自覺せる通りに云ひ、自覺せざるは自覺せざる通りにいふと、果して謙徳と目すべきや。子貢が顔淵に及ばざるをいひしとき、孔子が吾れも亦汝と共に同にかかざる也といへる(公冶長)を以て、其の謙徳の一例となすものあれども、例へば蟹江博士の孔子研究の如き、師たるものが、一の子弟に對して他の子弟を評し、吾れも亦汝と共に彼れに如かずといへる場合を考察すれば、師が實際にかく思へるか又は其の及ばざる子弟を自棄せざらしむる(子貢に對するものは此第二ならんのみ、謙遜とは考へられざるが如し)。

謙讓とは今  
ぞや

謙讓は人の美德たるを失はずと雖も、本心より出でざれば偽善に陥り易し

完全なる尋常人

元來謙讓とは、自ら信じ自ら任ずる所を、敢て之れを人に發表して、自ら之れに居るを示さざるものにあらざるや。然らば孔子の謙徳なるものとは少しく其の選を異にす。孔子は自ら信じ自ら任ずる所は、自ら示して之れに居れり、たゞ其の自ら信せざる所、自ら任せざる所に居らざりしのみ。子貢は孔子の徳を評して、温良恭儉讓といへり、されど此の所謂讓とは、今の謙遜といふ意とは少しく異なるものあるが如し。何晏の解に、「人を先にし、己れを後にするを讓といふ」といへり、鄭玄の堯典註に、「賢を推し善を尙ふを讓といふ」といへり、又孔子自ら「君子争ふ所なし」(八佾)といへり。されば孔子は人と先を争ふことなく、人より問はれざれば進んでいふことなく、能く他の善と賢とを推尙し、己れを擧げて人と角することなかりしにして、此の徳を稱して此れを讓といへるものならざるか。今の、好んで人の下位に出づるを云へる、常人謙遜の意にはあらざるが如し。孔子は一の尋常人にして何等異なるものなしと雖も、孔子の如き偉大なる人格に達すれば、多少其の趣を異にするもの生ぜずんばならず。孔子は寧ろ自ら任ずること厚し、而して其の自ら任ずる所は、何等の遠慮も

孔子は自ら任ずる厚し

なく、有りのまゝに表白したり。而立、不惑、知命、耳順、不踰矩の如き、常人をして曰はしむれば、既に謙讓の美にあらず。教へて倦まずと云ひ、學びて厭はずといふが如き、之れを俗解すれば、自分は斷へず勉強する、自分は教育に熱心なりといふに外ならざれば、平語にていはゞ一の自慢なり。天徳を予れに生ずといひ、文王歿して後、斯文吾れに在りとなすに至りては、其の自信何ぞ尊大なるたゞ聖と仁と君子との如き、孔子最も之れを重んずるが故に、己れ未だ眞に之れに到達せずとなせる也。謙讓とは同列又は同列以上に對する美德にして孔子は官位及身分に在りては、同列又同列以上を有すと雖も、其本領は天下蒼生を濟ふに在りしが故に、己に自ら一等高く己れを民衆より標置せる也。されば名は王者に仕ふるに在りと雖も、實は王者をして己れの道を行はしむるに在り。子路が孔子に「衛君子を待ちて政を爲さば」と云ひ、「衛君子を用ゐて政を爲さしめば」と言はざりしは、不用意の間に此の消息を漏らし來りしものならざるか。既に自ら高く標置す、何ぞ常人的謙讓あらんや、常人に在りては謙讓ならざれば傲慢に陥ると雖も、孔子の如き偉大なる人格に在りては、常人



孔子の人格

四

的謙讓なきも、何等其の美を損する所以にあらざる也。

孔子の説く所は、常識的にして、宗教と遙に遠く、其の言行も亦教祖と途を殊にすと雖も、其の教化的熱心、自信、及び勇氣に於ては、亦共通なる所なきにあらざる。但し孔子は宗教の教祖の如く、全精神界の王を以て居らず、匡に於ける偉大なる所信の發表は、文王以後吾れ一人の氣概あり、多少精神的に王者を以て居るの傾向なきにあらねど、現に人界の一士民たるが故に、尚は人として社會に處せざるべからず、此の點に於いて常人の所謂謙讓に稍類せるものありと雖も、其の所謂謙讓とは前に云ふが如く、人と争はず、又人の美を推尙するにして、自家の所信と任する所を矯飾して、強いて人の下位に出でんとするにはあらずし也。老子が孔子に、

子が驕氣と多慾と慥色と淫志とを去れ。是れ皆子が身に益なし。(史記老子傳)

と告げたること見ゆ。孔子の自信と勇氣と熱心とは、老子者流の如き、好んで人の先とならざる、僞善的又は無氣力的謙遜よりすれば、驕氣と慥色とに見え

しならん。此の語事實なりや否やを知らず、若し事實ならずとするも、此の如き傳説の起り來る所以は一考すべき價值あり。

常人の所謂謙徳と、孔子の「讓」なる徳とは、其間差別なきにあらざるを看取するを要す。たゞ其の救世の本領を知らざれば、老子の之れを警戒するも理ならず、其の性格の偉大を解せざれば、叔孫武叔の之れを誹毀せしも、子張亦怪むを要せざる也。

## 第二章 偉大なる教育家

若し古往今來、世界に於ける偉大なる教育家を求め來らば、孔子は蓋し其の最も偉大なる一人ならん、恐らくは其の無上なるものならん。宗教的感化の偉大なる、或は孔子に勝りたるものあるべしと雖も、宗教的感化は人間以上の靈なる力を借り來りたるものなるが故に、尋常の人格としての教育的感化は、思ふに未だ孔子以上に拔んづる者あらざる也。所謂教育とは、術が之れをなすにあらざる

偉大なる教育家

四

人が之れをなす也、孔子の『人能く道を弘む、道を弘むるに非ず』衛靈公と云へるは是れ也。近來の教育多くは教育の擧ると否とは、人格の力の然らしむるに非ずして、教育學の知識の有無に關するが如く以爲へるは、一大通患たり。教育と一の全人格が他の全人格の上に作用し影響するの謂なるを知らざるべからず。故に、孔子の教育事業は即ち其の人格にして、同時に其の人格は其の教育事業也。本書別に孔子の教育事業を叙述し、又其の人格の一斑を解説するが故に、其の教育的偉人たるは更らに言ふを要せざるも、姑らく全人格の無意的感化を別にし、教育てふ有意的作用の上に現はれたる性格の動けるを見んとす。

熱心なる教育家

孔子は一生を通じて常に自己の修養に怠らず、老いて益々努めしが、人を教育するにも亦非常なる熱心を凝ぎたりき。孔子が自ら厭して之れを識り、學びて厭はず、人を誨へて倦まず。(述而)と曰へるは、遺憾なく自己を表白せるもの也。此の、人を誨へて倦まずといふことは、之れを言ふは易く、之れを行ふは難し。而して孔子が實際此くの如くなりしは、左の問答及び門人の記する所に徴して明かなり。

夫子循々然として善く人を誘ふ。(子罕)

子曰はく、聖と仁との如きは、則ち吾れ豈敢てせんや、抑も之れを學びて厭はず世を誨へて倦まず、則ちしかいふと謂ふべきのみ矣。公西華曰はく、正に唯弟子學ぶ能はざる也。(述而)

昔者、子貢孔子に問うて曰はく、夫子は聖なるか。孔子曰はく、聖は則ち吾れ能はず、我れ學びて厭はず、教へて倦まざる也。子貢曰はく、學びて厭はざるは知也、教へて倦まざるは仁也、仁且つ知ならば、夫子既に聖なるか。孟子公孫丑上

此の『學びて厭はず』『教へて倦まず』との二を以て、子貢が孔子を既に聖なりと評せし如く、此の二語は孔子一生の生活を蔽ひたるもの也。其の修養的生活は即ち學びて厭はざるに在り、其の活動的生活は教へて倦まざるにありし也。故に『教へて倦まず』の一語は、孔子の教育的性格其の性格の有意的教化に向つて活及び其の教育的事業の全體を總稱するものと見ても可なり。一語甚だ簡なりと雖も意義極めて深長古來の教育家にして、人も我れも、教へて倦まざるを許し、而して事實に於いて全然斯くの如くなりしもの果して幾人かある、輕きに看過すべか

らざる也。而して斯く教育に熱心なりしは、道を弘むるは自家の天職なりとの強き感想ありしによりて、ますます其の力を加へたりしならん。

天の斯文を張さんとするや、後れ死するものは、斯文に與かるを得ず。(子罕)と云へる如き、斯文吾れに在り、恐らくは亦吾れより後なからん、吾れ教ふる所なくんば、斯文こゝに絶えんとなせるものにして、至高の抱負、絶大の意氣、思ふに孔子が教へて倦まざりしは、勉めて然るにあらずして、教へずしては已む能はざりし也。

されば、孔子は其の教を受けんとするの誠意あるものには、何人をも之れを教化するを怠らざりき。

束脩を行ふより以上、吾れ未だ嘗て誨ふるなくんばあらず。(述而)

互郷與に言ひ難きの童子見ゆ、門人惑へり。子曰はく、其の進むに與せん也、其の退くに與せざる也。(同上)

の如き、以て見るべし。

而して孔子は、其の學藝及び道徳に對する刻々の修養と進歩と、及び之れが爲

めにいよゝ多知多藝博學なるを加へ、及び偉大なる人格を完成するに相伴ひ其の熱心なる教育の力は益々發揮されたるならん。此れ等は皆他の二章につきて言ふ所なるが故に、今復びするを要せず、たゞ其の一二の特に教育と直接なる關係あるものをこゝに述ぶるに止めん。

自己の宗教的使命の一分を擔任せしむる爲めに使徒を造るが如き、若しくは自家の懐抱する一主義宣布の爲めに人に教ふるが如き、之を稱して教育とはいひ得べからず、教育は教育するものゝ爲めに謀るにあらずして、教育さるゝもの爲めならざるべからざれば也。孔子が其の所謂道とする所は、教祖的教義にもあらず、又其の小主義小理想にもあらず、一に立國以還救世濟民の典經なりと信じたるが故に、孔子の教化は今の教育の意味と少しも擇ぶ所なし。是れ教育に於いて特に大に孔子に學ぶべきもの多き所以也とす。

教育家は深く當代の文化を理會せざるべからず、現代を知り、現代を尊重することは、被教育者に取りて最も重要なものにして、高遠なる理想家が、屢々現代を輕蔑するは、教育の爲めには害ありて益なきもの也。孔子は、

周は二代に鑑み、郁々乎として文なる哉。吾れは周に従はん。(八佾)といへり。現代に關する知識及び趣味、尊敬の情の深かりしを知るべし。されど、必らずしも俗に従はず、又強いて、俗に違はざりき。

麻冕は禮なり、今や純儉、吾れ衆に従はん。拜下は禮なり、今や上に拜す、泰なり衆に違ふと雖も、吾れは下に従はん。(子罕)

郷人儻すれば、朝服して阼階に立つ。(郷黨)

其の服や郷。(禮記儒行篇)

此くの如く敢て俗に従はず、又敢て俗に忤らざりし底の用意は、教育家の最も依據すべき所ならん。守るべき所は其の識見に従ふべきも、然らざるは敢て異を街ふの要なければ也。斯く孔子は周の一個の國民として周の制に従ひ、一郷の一個の良民として一郷の俗に従ふと雖も、儀禮の上に於ては必らずしも然らず其の信ずる所を守りき。即ち其の専門的知識の上よりしては、寧ろ現代を超越したりき。可なれば周に従ひ、不可なれば上世に従ふ、次ぎの如き例あり。

般は既に封して弔し、周は反つて哭して弔す。孔子曰はく、般は已に慙、吾れは

周に従はん。(禮記檀弓下)

般は練して禘し、周は哭を卒りて禘す。孔子般を善しとす。(同上)

孔子が教育家として過去及現代に關する用意は斯くの如く、將來に關しては亦次ぎの如く教へたることありき。

子張問ふ、十世知るべきや。子曰はく、般は夏の禮による、損益する所知るべき也。周は殷の禮による、損益する所知るべき也。其れ或は周に繼ぐもの、百世と雖も知るべき也。(爲政)

凡そ被教育者は皆後生代を組織するものなるが故に、之れを教育するには、過去及び現代の文化を理會すると共に、將來に着眼し、其の時潮を洞察して、勢の趨むく所を解せしめざるべからず。十世百世亦知るべきの説は、此の意義より、看取するを要す。

何れの國、何れの世に在りても、世俗的榮貴を享樂せざること、教育家ほどはかなきはあらず。されば教育家として其の一生を終らんが爲めには、先づ世俗的富貴より超脱せざるべからず。孔子は

偉大なる教育家

超凡、感氣、  
及び安心立  
命

孔子の人格

六

疏食を飯ひ、水を飲み、脛を曲げて之れを枕す、樂しみ亦其の中に在り矣。(述而)  
といへり。少しく隱栖者の趣致あるが如きも、其の超凡脱俗の點に、教育家たる  
生命は宿れり。

孔子が政教一致後の政教論にを主持するの深きや、  
或るひと孔子に問うて曰はく、子奚んぞ政を爲さざる。子曰はく、書に云ふ、孝  
乎惟れ孝、兄弟に友に、有政に施す、是れ亦政を爲す也、奚んぞ其れ政を爲すと爲  
さん。(爲政)

といへり。政治するとは即ち教育する也との意義よりして、爲政家に其の個人  
的操行と政治的感化を戒しめしが、又教育するは即ち政治する也との意義より  
して、教育家に其の業務の愉快にして、且つ責任あり、其の位置亦甚だ高きを示す  
ものにして、孔子實に此の意氣ありし也。世の教育家が、皆我れの兒曹を教育す  
るは、即ち是れ天下を政治する也、との意氣を有せば、其の奉養の薄く、其の分位の  
低きを嘆ずるを要せざる也。

又、迷信的又は宿命的ならざる程度に於いて、人力以上のものあるを信じ、以て

安心立命の域に入ること、世俗の浮華に迷はず、又人生意の如くならざるの不  
平を緩和するに極めて必要なり。孔子は深く天命天道を信じたりき。

罪を天に獲れば禱る所なき也。(八佾)  
の如き是れにして、孔子は斯くの如く天を信するによりて、非常の勇氣を得たり  
き。

天徳を予れに生ず、桓魁其れ予れを如何。(述而)

此の凜烈なる氣魄と壯大なる自信とは、即ち是れ教化を自家の天職なりと覺知  
せしめて、終生教へて倦まざりし熱誠の出づる所ならずんばあらず。

孔子の温厚なりしは既に之れを述べたり。子貢は

夫子温良恭儉讓。(學而)

と云ひ、斯かるが故に到る處人皆其の政を問へりとなせり。温厚なる者には人  
必らず之れに問ふを樂しむ。人が之れに問ふを樂しむが如き性格の發動あり  
て、教育家たる資格は充實せりといふべし。其温情能く人を愛せしが、其の弟子  
を愛する最も至れり。

偉大なる教育家

七

伯牛疾ひあり。子之れを問ひ、牖より其の手を執りて曰はく、之れ亡きに、命なり、夫れ斯の人や、而して斯の疾あり、斯の人や、而して斯の疾あり。(雍也)

顔淵死す、門人厚く之れを葬らんと欲す。子曰く不可なり。門人厚く之れを葬る。子曰はく、回や、予を視ること猶ほ父の如し、予れ視て子の如くなるを得ず、我れに非ざる也、夫の二三子也。(先進)

顔淵死す。子曰はく、噫、天子れを喪ふ、天子れを喪ふ。(同上)

顔淵死す。子曰はく、噫、天子れを喪ふ。子路死す。子曰はく、噫、天子れを祝つ。

麻は斯(公羊傳哀公十四年)と同じ

孔子、子路を中庭に哭す。人の弔するものあり、而して夫子之れを拜す。既に哭し、使者を進めて故を問ふ。使者曰はく、之れを臨にせりと。遂に命じて臨を覆へす。(禮記檀弓上)

斯くの如き恩愛慈悲は、總ての弟子が日夕之れに浴する所にして、此の至情即ち是れ感化の出づる所ならずんばあらず。

温厚の一面、又甚だ謹嚴なりしは、既に述べつ。而して子弟の非違に對して之

れを叱斥するや、凜として懼るべきものありしは、又後章孔門の訓育に述ぶる所の如し。唯温厚なる孔子も、人の容儀の無禮を責むるや、頗ぶる嚴なるものありき。

原壤夷して俟つ。子曰く、幼にして孫弟ならず、長じて述ぶるなし、老いて死せず、是れを賊となすと。杖を以て其の膝を叩く。(憲問)

原壤とは孔門の弟子にあらず、既に老いたる舊相識にて、世を輕侮せる老子流の人なりしと見ゆ。夷とは蹲踞することにて、支那の此頃は漢の末までも今日の本の如く室内にては坐せしも、蹲踞接客は禮ならざりしならん。此の時孔子杖を以て其の膝を叩き、以て其の無禮を責めたる也。温厚なる孔子も、此の時は幾分の怒氣ありしと見え、『老いて死せず』とは少しく甚し、之れを今の市井の語に譯すれば、『死にそこない奴』と云ふが如ければ也。叩くとは微擊するにて之れを打撃する程には苛ならざりし也。元來支那の教育にては、教へに順はざるものを鞭つ、の制あり、書經には教刑として之れを撻し、易には擊蒙として之れを擊ち、學記には夏楚二物として、教刑擊蒙の具を學校に備ふることあり。孔門の教育

には、此の慣例を用ゐしや否やは明かならず、寧ろ然らずして所謂『循々然人を誘ひし』を推察せしむと雖も、舊相識の無禮を責めて其の膝を叩きしことは、孔子が一面甚だ嚴正なりしを想像せしむ。

子弟の信じて  
其の進歩を  
喜ぶ高弟を  
教す

孔子の眞率にして赤誠なる、決して人を邪猜するが如きことなかりし。然れども之れを宰予に於いて失敗せることを表白したり。

始め吾れ人に於けるや、其の言を聽き、而して其の行を信ず。今吾れ人に於けるや、其の言を聽き、其の行を觀る。予に於いてか是れを改む。(公冶長)

といへるものは是れ也。孔門の訓育に於いて述ぶるが如く、孔子は一と其の子弟の個性を察し、以て之れに適應すべき教育を施したり。此の邪猜せざるの美德を以て、而して人の個性を觀るは、教育家の要道ならずんばあらず。

孔子は又子弟の進歩を見て、衷心の愉悅を感じたり。

子、漆雕開をして仕へしむ。對へて曰はく、吾れ斯れ之れを未だ信する能はずと。子説ふ。(公冶長)

閔子、側に侍す、閔々如たり。子路は、行々如たり。冉有、子貢は、侃々如たり。子

樂しむ。(先進)

子弟の向上心、容易に消磨せざるを聞きては、之れを悦び、又其の日に進境あるものと共に在るを見ては、之れを樂しみし也。之れを愛し、之れを信じ、之れを悅樂すると共に、高弟に對しては異常なる尊敬を拂ひしが如し。尙書大傳に、

孔子曰はく、文王は四臣を得、丘も亦四友を得たり、吾れ回やを得てより、門人親しきを加ふ、是れ胥附するに非ざるか、吾れ賜やを得てより、遠方の士日に至る是れ奔輦するに非ざるか、吾れ師やを得てより、前に輝あり、後に光あり、是れ先後するに非ざるか、吾れ由やを得てより、惡言門に入らず、是れ侮を禦ぐに非ざるか。(般傳)

とあり。此の語は毛詩正義(經)世說新語(卷五)太平御覽(卷三百六十六)等にも引けるものにして、伏生は蓋し依る所ありて記せしならん。高弟を呼びて友といひ其の之れを吾が門に得たるを喜び、賞揚已ます。此の四人のもの、之れを聞かば益、服し且つ勵みしなるべく、子弟之れを聞かば、皆此の四人たらんことを願ひしならん。但し、教育に従ふもの、能く其の人となりて察せずして、愛する所を激賞

孔子の人格

三

すれば却て怨みと笑ひとを招くことあり。孔子は決して然らざりしならん。孔子の圓滿なる人格は、前章既に之れを述べたり。教育とは、知識技能を授くるに非ずして、人格の成就を目的とするものなるが故に、孔子の如くにして始めて完全なる教育的性格なりと稱するを得べし。儀の封人は微賤に隠れし賢者ならん、孔子を見、出で、いはく、

二三子、喪ふことを患へんや。天下の道なきや久し矣、天將さし夫子を以て木鐸と爲さんとす。(八佾)

と。古へ金鐸、木鐸あり、周禮夏官に、『大司馬、振旅を教ふるるとき、兩司馬金鐸を執る』といひ、又天官小宰に、『正歲、治官の屬を帥ひ、治象の法を觀るに、徇ふるに木鐸を以てす』といへり、されば武事には金鐸を用ゐ、文教には木鐸を用ゐたり。即ち封人は孔子を一見して、其の一大教育家たることを觀破したる也。中庸が孔子の徳を述ぶるもの、其後半なる

萬物竝び育して相害せず、道竝び行はれて相悖らず。小徳は川のごとく流れ大徳は敦く化す。此れ天地の大を爲す所以也。

といへるの語は、孔子の偉大なる教化力を贊美して、天地の萬物を育成するに喩へし也。孔子の如き性格を以て、而して誨へて倦まずとせば、其の教化の力は想ふに餘りあり。

子の燕居、申と如たり、天と如たり。(述而)

といへり、其の閑居の和舒なるをいふが如しと雖も、別に一説あり、劉逢祿の如きは、其の文字の意義を考證して、之れを教育的に解釋せり。いはく、

燕居とは、仕へざるの時をいふ。申とは、猶ほ教を施すが如き也。天とは、弟子嚙を發き、時雨の之れを化するが如きものある也。禮の仲尼燕居篇の如き、其の一端なり矣。(論語述何)

此の解或は當れるが如し。漢安世房中歌の中に、『教を施すこと申と』の語あり、申とは教化を行ふの形容なり。又天とは詩經の、『桃の天と』の如く、盛んなる貌を形容する語なれば、申と天とは、孔子施教の効果の甚だ盛んなるを言へるものらしく見ゆ。

孔子の教化力の偉大なりしは、顔子の言に聞くに如くはなし、英雄は英雄を知



る、最も善く教化されたるものは、最も善く教化したるものを知れば也。  
顔淵明然として嘆じて曰はく、之れを仰げば彌高く、之れを鑽れば彌と堅く、之を瞻れば前に在り、忽然後に在り、夫子循と然として善く人を誘ひ、我れを博うするに文を以てし、我れを約する禮を以てす、罷めんと欲して能はず、既に我が才を竭し、立つ所卓爾たるあるが如し、従はんと欲すと雖も、由なきのみ。(子罕) 此の語簡にして要を得、孔子の教化を知るに於いて、顔子の此の語のみにて既に十分なり。殊に『罷めんと欲して能はず』一語に至りては、循とたる教育の力、人を牽くこと甚だ強きを示すものならずや。顔子が孔子の感化を説くものの、實に世の茫然たる教育學の大冊に勝ること蓋し萬と。  
下の如き説話は、其の事實なるや否やを知らずと雖も、假令以事實ならずとするも、孔子の教化力の偉大なりしは、世に斯くの如き取沙汰をなさしめたるものと見らる。

子路は卞の野人なり、子貢は衛の賈人なり、顔涿は聚の盜なり、顓孫は師の駟なり。孔子之れを教へ、皆顯士となれり。(戸子勸學篇)

子路は卞の野人なり、子貢は衛の賈人なり。皆孔子に學問し、遂に天下の顯士となれり。(韓詩外傳卷八)

子貢季路は故と鄙人なりしも、文學を被むり、禮義に服し、天下の列士となれり。(荀子大略篇)

子張は魯の鄙家なり、顔涿は聚梁父の大盜なり。孔子に學び、天下の名士顯人となれり。(呂氏春秋尊師篇)

斯くの如く偉大なる教化力を有せる孔子は、之れに加ふるに熾烈なる教育家的勇氣と自信とありき。

子匡に畏る。曰はく、文王既に歿し、文茲に在らざるか、天の將に斯文を喪さんとするや、後れ死するものは、斯文に與かるを得ざる也、天の未だ斯文を喪さんるや、匡人其れ予れを如何。(子罕)

自ら文王以還の第一人を以て居る、豈千古の一大教育家ならずや。

### 第三章 修養と蓄積

決して生知の聖ならず

孔子の人格

六

孔子は平凡なる偉人のみ、完全なる尋常人のみ、生れたる神の子にもあらず、突如として天啓を得たるにもあらず、又神佛の宣示を得て、卒然として心眼を開けるにもあらず。貧賤に生れ、艱難に長じ、修養蓄積して以て此の偉大なる人格に到達したるのみ。井上博士の既に唱道せし孔子祭典會講演如く、努力は何人もこゝに至らしむべきを範示したるものにして、是れ、古今を通じ、東西に亘り、今に生きたる教化の理想として、赫たる光輝を放つもの、我が孔子に過ぐるなき所以也。

孔子は人の資質の階級を分ちて四となし、

生れて之れを知るものは上也、學びて之れを知るものは次也、困して之れを學ぶ、又其の次也、困して學びざる、民斯れを下となす矣。(季氏)

と云ひ、中庸之れに和し、知に行を配していはく、

或は生れながらにして之れを知り、或は學びて之れを知り、或は困して之れを知る、其の知るに及びては一也。或は安んじて之れを行ひ、或は利して之れを行ひ、或は勉強して之れを行ふ、其の功を成すに及びては一也。

と云へり。而して聖人は人の最上なりとなすが故に、而して孔子は聖人の列に入れられたるが故に、後世遂に孔子を以て生知安行となすに至れり、誤まれるも亦太甚しからずや。孔子が後世の爲めに模範を示さんとして、一生を通じて孜々努力せし所以を没却するもの、寧ろ孔子の罪人たり。而して孔子が、

吾れ生れて知るものに非ず、古を好み敏、以て之れを求むるもの也。(述而)といへるを知らざる也。

孔子兒たりしとき、嬉戯するに、常に俎豆を陳ね、禮容を設く。(史記孔子世家)と傳へられ、禮に對する傾向の夙に現はれし外、何等の異なるものあらず。其の能く孔子たるに至りしもの、一に修養の深さと蓄積の大なるとの爲め也。

艱難汝を玉にすとの古言の如く、孔子が貧賤に生れたるは孔子を玉成せしめたる一原由ならん。多能は必らずしも君子の事にあらずといふと雖も、

吾れ少なるや賤故に多く鄙事を能くす。(子罕)

吾れ試みられず故に藝。(同上)

といへるが如く、其の貧賤なりしは、其の多知博學の素地を作りしならん。且つ

孔子の人格

種々の藝を修めんが爲めには、頗る人事に注意深き慣習を養ひしならん。又、  
下學にして上達す。(憲問)

といへる所謂下學なるもの、下、人事を學ぶの意なりとすれば、貧賤に人となりしは、下學の大半を與えしならん。孔子が最も下情に通じ、人心の微妙を解せしは、貧賤の恩恵なりしは略想察せらる。何となれば、如何に才識あるものと雖も、肉食温袍は下學と甚だ遠ければ也。

又、委吏となり、乘田となり、孟子に出づ 大章に解す職務に忠實なるの快感を覺えしも亦此の時にして、亦是れ貧賤の一恩恵といふべきか。

孔子は君子の道を知仁勇三者に在りとなせる前章引が如く、人格の完全なる發達を期せり。故に其の修養する所の大綱を擧げて

徳の修まらざる、學の講せざる、義を聞いて従らざる、不善改むる能はざる、是れ吾が憂ひ也。(述而)

といへり、智識的に、及び實行的に、及び道德の消極的積極的修養に努力しつゝ、ありしを見るべし。而して斯くの如き修養は、孔子が終生怠らざりし所にして、刻

完全なる修養

刻の進歩は一と効果を擧げ來りし也。晩年其の一生を顧み、十年を一期として其の成功を示して曰はく、

吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十、心の欲する所に従ひて矩を踰へず。(爲政)と。是れ實に孔子が自著せる小傳にして、後人をして、其の不斷の努力を欽仰せしむるものあり。

而して孔子は其の努力に於いて、最も心を知識的蓄積に致せり。何となれば知的蓄積の外は、獨り自ら之れを修養するを得べしと雖も、知識は之れを外物より蒐收し來らざるべからず、而して、之れを收むれば收むるに隨ひて、益、收めざるべからざるの多きを感じしむれば也。

孔子の勉學は、古今絶へて無くして僅に有るものなり。大戴禮に、  
丘が如きは綴學の徒。(小辨)

と自ら言へる語見ゆ。孔子は屢次學びて厭はずと言へる如く、勉學を以て自ら任じたり。

知識的蓄積

修養と蓄積

十室の邑、忠信、丘が如きものあらん。丘の學を好むに如かざる也。(公冶長)  
といへるが如き是れ也。

吾れ伴て終日食はず、終夜寝ねず、以て思ふ、益なし、學ぶに如かざる也。(衛靈公)  
と云へる、如何に知識慾の旺盛にして、學業に勉勵せしかを知るべく、  
學ぶこと及ばざるが如くす、猶ほ之れを失せんことを恐る。(泰伯)

君子、食飽くことを求むるなく、居安なきことを求むるなく、事に敏にして、言に  
慎しみ、有道に就きて正す。學を好むといふべき也。(學而)

の如き、蓋し夫子自ら道ふ也。

中年四十五六歳の時と覺ゆ易を修めてより、其の勉むべきもの又一を加へ來たる。

我れに數年を加へ、五十、以て易を學ば、以て大過なかるべし矣。(述而)

易を讀みて韋編三たび絶つ。(孔子世家)

是れ也。絲にて綴ぢたる書冊すら容易に敝れざるに、韋編三たび絶つに至りて  
は、其の精力驚くべき也。

此の精力は老來いよく熾んにして、而かも勉めて然るにあらすして、之れを

樂しみて然りしと見え、

葉公、孔子を子路に問ふ。子路答へず。曰はく、女奚ぞ曰はざる、其の人となり  
や、憤を發して食を忘れ、樂しみて以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知ら  
ず云爾。(述而)

孔子は終生斯くの如く勉學して少時も怠らざりしが、特に常師とてはこれな  
く、何人も我れより多く知れるものは、就きて之れを問ふを耻ぢざりし。

衛の公孫朝、子貢に問うて曰はく、仲尼焉くんか學べる。子貢曰はく、文武の道  
未だ地に墜ちず、人に在り、賢者は其の大なるものを識り、不賢者は其の小なる  
ものを識る、文武の道あらざるなし、夫子焉くんか學びざらん、而して亦何の常  
師か之れ有らん。(子張)

されば、上古の官制を郊子に問ひ、既にして人に告げて曰はく、

吾れ之れを聞く、天子官を失し、學四夷に在りと、猶ほ信なり。(左傳昭十七年)

と。又禮を老聃に問ひ、禮記曾子問、樂を長宏に學べり(同樂記)。司馬遷は、

孔子の嚴事する所、周に於いては老聃、衛に於いては蘧伯玉、齊に於いては晏平

仲楚に於いては老萊子、鄭に於いては子産。(史記仲尼弟子列傳)といへり。『嚴事する所』聊か語弊あれど、此等の諸人、孔子皆時に之れに問ひて益する所ありしは疑ふべきなし。

實行的修養

學ぶは行ふが爲め也、故に孔子は知識的蓄積に於いて收斂至らざるなきと共に、實行的修養に於いても決して怠らざりき。元來既に實行的の人にして、之れに加ふるに實行的修養を以てす、其の徳器の益成就し來るは、怪むなき也。

君子其の言うて其の行に過ぐるを耻づ。(憲問)

君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。(里仁)

古者、言の出でざる、身の逮ばざるを耻ぢて也。(同上)

といふが如き、一に實行に努力したるを見るべく、

丘や幸ひ、苟くも過あれば、人必らず之れを知る。(述而)

と云ひ、其の過ちを聞くを喜び、

三人行けば必らず吾が師あり、其の善なるものを選びて之れに従ひ、其の不善なるものを選びて之れを改む。(同上)

といへる、如何に過を改たむるに銳意したりけん。

而して、其の一路向上に直進するや、其の弟子に對してすらも、以て自家修養の標的となしたるが如し。

仲尼、志立たざれば、則ち子路侍す。儀服、修まらざれば、則ち公西華侍す。禮習はざれば、則ち子貢侍す。辭、辯せざれば、則ち宰我侍す。古今を亡忽すれば、顔回侍し、節物ならざれば、冉伯牛侍す。吾れ夫の六子を以て自ら勵む也。(尸子佚文、注、繼培が集賢群輔錄上、廣博物志二十より拾收せるもの)

仲尼、居處惰倦し、廉隅正しからざれば、則ち季次原憲侍す。氣鬱して疾み、志意通せざれば、則ち仲由ト商侍す。徳盛んならず、行厚からざれば、則ち顔回、雍雍侍す。(晏子内篇問上)

此等の書は信すべからずと雖も、此等の事は寧ろ有り得べくして、書を以て言を察つべからざる也。

困頓と感觸

孔子の如き修養と蓄積とに盡瘁焦慮し、何人をも何物をも何事をも、一切自家の腹中に收めて消化し盡さんとするものに在りて、日常の事、皆其の料ならざる

はなかりしなるべしと雖も、而立以前の貧賤と、知命以降の艱難とは、殊に其の人物完成に資する所ありしを疑はず。孔子は天下を周遊せし間、具さに世事の意の如くならざるを感じたりけん、其の官仕に急なりし心を棄て、亂世に處しては草莽に隠れ、而かも悠々自適の境遇を開拓し來れり。

位なきを思ひず、立つ所なきを憂ふ、己れを知るなきを思ひず、知らるべきを爲すを求むる也。(里仁)

君子能なきを病む、人の己れを知らざるを病まず。(衛靈公)

子曰はく、我れを知るなき也。子貢曰はく、何すれぞ其れ子を知るなからんや子曰はく、天を怨みず、人を尤めず、下學にして上達す、我れを知るものは其れ天乎。(憲問)

等の言は、斯くの如くにして發せられたりと見ゆ。

又其の周遊の間、桓魋の難に會ひ、(孟子萬章上)匡人の難に畏れ、(子罕)又陳蔡の間に困厄して、七日火食せざることありき、(荀子宥坐篇)。此等の危難は、殊に孔子の心志を困しめて、之れを磨厲烹鍊したるべきは勿論にして、匡に於いて、絶大の抱

負を表白せしも、其の直接の効果なりしなるべし。陳蔡困厄の間に於ける子路との問答は、亦以て孔子が流離困頓より得たる修養の一端を窺ふに足る。今左に其の略を擧ぐ。

弟子皆飢色あり。子路進みて之れに問うて曰はく、由之れを聞く、善を爲すものは、天之れに報ふるに福を以てし、不善を爲すものは、天之れに報ふるに禍を以てす、今夫子徳を累ね、義を積み、美行を懐くの日久し、奚ぞ居ることの隠るゝや。孔子曰はく、由、識らず、吾れ汝に語らん、汝知者を以て必らず用ゐらるゝとなすか、中略汝忠者を以て必らず用ゐらるゝとなすか、中略汝諫者を以て必らず用ゐらるゝとなすか、中略夫れ遇不遇は時也、賢不肖は材也、君子博學深謀、時に遇はざるもの多し、是れに由りて之れを觀れば、世に遇はざるもの衆し矣、何ぞ獨り丘のみならんや。夫れ芷蘭、深林に生ず、人なきを以て芳ならざるに非ざる也。君子の學は通するが爲めに非ざる也。(下略荀子宥坐篇)

遇不遇を以て其の心を動かさず、深林の中に生ずる幽蘭の如く、人なきもあるも獨り其の芳香を擧ぐるが如く、孔子は只其の命に安んじて其の行を善くすれば

足るとなせるものにして、這般の安心立命は之れを流離困頓の間に養ひし來りしを知る也。

康熙帝の二十五年、御製孔子贊を各省に頒ちて、碑を立てしめたり、是れ一種の教育勸諭也。其の序に曰はく、

有行道之聖。得位以綏猷。有明道之聖。立言以垂憲。此正學所以常明。而人心所以不混也。(中略)行道者。勳業灼於一朝。明道者。教思周於百世。(中略)道不遠。克念作聖。其の贊中の一節に曰はく、

日月無輪 義精可昭 孔子之道 惟中與庸 此心此理 千聖所同  
孔子之德 仁義中正 秉彝之好 根本天性 庶幾夙夜 毋哉令圖  
淵源洙泗 扶國唐虞。

### 第三篇 孔子の事業

#### 第一章 孔子の集大成

##### 第一節 政教原理の展開

孔子の學風を説明し、随つて支那の學術史上及び思想史上に於ける孔子の事業を明かにするものは「集大成」の一語に若くはなし。元と孟子の造語也、孟子にいはく、

孔子は之れを集大成といふ。集大成やは金聲して之れを玉振する也。金聲やは條理を始むる也。之れを玉振するやは、條理を終る也。條理を始むるは知の事也。條理を終るは聖の事也。(萬章下)

と。是れ音樂を成すに喩へて、孔子の性格及び一生の行動をいふものにして、亦

集大成とは何ぞや

其の事功の大端を蔽ふもの也。之れにつきて先輩服部博士は、集大成を以て單に古來の學術又は思想とのみ見ずして、人事百般の現象を蒐積研究するものとなし、條理を始むるは分解にして、條理を終るは綜合なり、人事を分解して人性に本づけ、自我の情と同情とを其の本具のものとなし、其の則を立て、忠恕とし、而して之れを仁に歸結し、六經を以て之れを教ふるの料となし、之れを綜合し統一するに、實行的方面には禮を以てし、理論的方面には天人合一の理を以てすとせり（雜誌『漢學』第一、第三、第四號）。孔子立教の大旨を説明するに於いて、善く條理を始め條理を終れるものか。但し孟子が果して斯くの如き意義を以て斯くの如く説けるかは、博士亦固より然りといはざるべし。本章題する所の集大成の意は少しく之れに異なる、上代以來の學術及び思想、即ち主として古聖王の遺訓又は遺制につきて、孔子が之れを集成して開展したるをいふ也。

儒教と稱する一教義の教祖として見れば、儒教を構成せることが既に孔子の一個の大事業なれば、孔子の基本的儒教を敍説することは、亦此の事業志に於いて爲さざるべからざる所なるが如しと雖も、是れ一部小冊子の能く成し得べき

所にあらざるが故に、只此の開展せる主要の點につきてのみ記述するに止む。而して易を推して教化の典經となせしは孔子よりなるが故に、此れに付與せる新意義の昭明なるものは次節に録す。若し夫れ六經を述刪し、其の所謂道を載せて後世に遺りしに至りては、別章特に其の詳を擧げたり。

述と憲章

孔子自ら其の本領を發表して、

述べて作らず、信じて古を好み、竊かに我が老彭に比す。（述而）

といへり。老彭は殷時の一大教育家（教育事業の條参照）なれば、孔子は人生に寄與すべき事業としては、教育を以て終始せんことを期し、而して陋巷の一學究としては、自家何等獨創の見なく、古人の學を學び、古人の心を心とし、古人の事を事とし、古人の言を言ふに止まるものとなすなり。子思は（始らく今の中府は子思著其の聖祖の言を言ふに止まるものとなすなり。子思は述の殘缺せる一部として）其の聖祖の業を述べて、

仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章し、上天時に律り、下、水土に襲る。（中庸）

といへり。堯舜は支那に於ける萬世政教の淵源なるが故に、之れを祖述し、文武は二代の文物を滙會して、禮儀三百威儀三千（中府の言を借り用ひ禮なりを制定し、現に）



孔子の生存せる周の天下を創設したるものなるが故に、之れを憲章之れを法とし守るを憲章といふする也。孔子が匡の難に會へるとき、

・ 文王歿して、文斯に在るにわらずや。(子罕)

といへるも、亦自ら斯文の紹繼者を以て居るを示すものにして、孔子は我れより古をなすにわらず、古を信じ、古を好み、又古を守り、少しも自ら發明する所なしとする也。されば、或は『大なる哉、堯の君たるや』(秦伯)といひ、或は『巍々乎たり舜禹の天下を有するや』(同上)と云ひ、或は『禹は吾れ間然するなし』(同上)といひ、堯舜禹を尊崇すること至らざるなかりき。而して周公も、亦孔子の理想とする所なれども、其の意義は文武以上の古聖王に對するものと少しく異なれり。

本編第二章參照

然らば、孔子は單に集成し、祖述し、憲章するのみにして止まりしか。之れを蒐收し、之れを蓄積し、之れを彙類し、之れを組織し、之れを分解し、之れを綜合し、之れを統一し、之れを構成し、之れを敘述するに於て、既に非凡なる聰明と絶倫なる精力とを要すべき一生の大事業たり。而して孔子は更に時勢の進歩に應じ、其の

研究の結果、大に之れを開展せしめたる也。

孔子は毎に『道』を稱せり、其の説く所は道にして、其の理想は道を行ふに在り。斯の道は何人も履まざるべからざる極めて尊重すべきものなるを説きては、

誰れか能く出づるに戸に山らざる、何ぞ斯の道に由るなきや。(雍也)

と云ひ、其の所期の竟に達せられざるを嘆じては、

道行はれず、桴に乗じて海に浮ばん。(公冶長)

と云へり。斯の所謂道なるものは何ぞや。前の言にても既に明かなるが如く更らに

君子は中略有道に就きて正す、學を好むといふべき也。(學而)

齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん。(雍也)

等の言に於ける道なる意義を釋ぬれば、或は倫理の原理とし、或は政治の原理となせることを知るべし。即ち道とは政治及倫理の原理にして、換言すれば政教の原理なり。而るに支那にては、堯舜以來、倫理即ち己れを修むること即ち教と

政治即ち人を安んずること即ち政とは、一事の両面の如く解され、同時に行はるべきものとなされたり、之れを政教一致、若しくは修己安人修己治人又は修己安民ともいふの一致といふ。此の政教一致の思想は、政治するとは身を修むることとなり、而して同時に教化する也との思想を生ずるに至れり。左傳に

政以て民を正しくす。(桓公二年)

の語あり、易の象傳には、

能く衆を以て正し、以て王たるべし矣。(師卦)

と云ひ、孔子も哀公に對へて、

政は正也。(顔淵及び禮記哀公問篇)

といへり。されば説文には『政は正也』と解し、釋名には、『政は正也、下、正を取る所也』と釋するに至れり。而して堯舜が能く此の政教一致の理想を實現せしことは、尙書に記載されたり。堯の治世を述べて、

克く俊徳を明かにし、以て九族を親しうす。九族既に睦ましく、百姓を平章す、百姓昭明、萬邦を協和す。黎民於變かり時これ雍あく。(堯典)

といへり、冒頭一句は己れを修むること也、先づ己れを修めて人を安んじ、人を安んずるは、家族より百官に及び、百官より庶民に及びたる也。又皐陶の舜に告げし語に、

都か慎しめば厥の身修まり、思ひ永し。惇あく九族を叙し、庶あ明らかに勵み翼あむ。

邇あうして遠かるべきは茲こに在り。(皐陶謨)

とあるも亦是れ也。されば孔子は明かに堯舜の努力せし所は修己安人にありしことをいへり。

子路、君子を問ふ。子曰はく、己れを修めて以て人を敬す。曰はく、斯くの如きのみか、曰はく、己れを修めて以て人を安んず。曰はく、斯くの如きのみか。曰はく、己れを修めて以て百姓を安んず。己れを修めて以て百姓を安んずるは堯舜あだも其れ猶ほ諸れを病めり。(憲問)

是れ也。『病めり』とは能はざるの意にあらず、畢生の目的の茲こに在るをいふ也、子路の問ひの餘りに容易なるらしく思へるを抑へて、強めて之れを言ひしに過ぎざる也。

されば孔子の毎に言ふ所の道とは、堯舜既に之れを行へりとなせる所謂先王の道にして、先王の道とは、政治と倫理とを蔽ふべき、修己安人なる政教一致の道なることは明か也。而して孔子は博く學修して之れを集積し、深く考察して之れを條理し、遂に其の中に一貫の原理あることを發見するに至れり。皇侃の解する如く、貫は猶ほ統の如きの意にして、一貫とは貫統なり、統一の義也。左の言是れ也。

子曰はく、參乎、吾が道一以て之れを貫く。曾子曰はく、唯。子出づ。門人問うて曰はく、何の謂ぞや。曾子曰はく、夫子の道は忠恕のみ矣。(里仁)

子曰はく、賜や、女予れを以て多く學びて之れを識るものとなすか。曰はく、然り、非か。曰はく、非也、予れ一以て之れを貫ぬく。(衛靈公)

一貫に達したるは、確かに思想上に於ける孔子の一大事業たり、尋常學究の能く成し得る所にあらず。然らば此の所謂一貫の道とは何ぞや。

曾子は一貫の道を直ちに會得して、『忠恕のみ』といへり、姑らく之れに従はん。孔子も亦恕は一言にして修身行ふべきものとなせり。

忠恕につき

子貢問ふて曰はく、一言にして以て終身之れを行ふべきものありや。子曰はく、是れ恕か。(衛靈公)

一言終身といへるは稍、一貫の義に近し、又

夫れ仁者は、己れ立てんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す。(雍也)

如き、亦恕を以て仁の術となせり。而して忠恕とは、之れを消極的に解すれば、己れの欲せざる所、人に施すなかれ。(衛靈公)

にして、之れを積極的に解すれば、今言ふ所の己れ立てんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す。(雍也)

是れ也。自我の情を推して對他の同情に及ぼすものにして、能く忠恕ならば、社會を構成するものは、相親愛して、個人間に於ける生存競争の慘狀を緩和して、安靜に社會を維持すべきが故に、之れを倫理の根本と爲し得ると共に、又之れを政治の原則となし得べく、政教一致に於いて、忠恕は之れを一貫する一原理たるを失はず。然るに孔子は、

孔子の事業

忠恕道を違ふ遠からず。(中庸)

といへり。さらば忠恕は既に甚だ一貫の道に接すと雖も、忠恕直ちに是れ一貫の道にはあらずとなすにあらざるか。

孔子は盛んに中庸の至徳なるを唱導せり。然るに論語に中庸を言ふは、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民久しきこと鮮なし矣。(雍也)

といふの外又見えず、過不及を戒しむもの(先進)中行に與せんといふもの(子路)及び堯舜の中をいふもの(堯曰)の二三章に過ぎず、而して中庸の書には孔子が中庸の徳を賛美せるもの累々相接す。思ふに、假りに今の中庸の書が子思著作の殘缺ならずとするも、子思に中庸論の大著ありて、漢までは現存せること、史記(列傳)漢書(藝文志)によりて明白にして、論語編輯の年代は子思自著の時と相前後したるべければ、中庸に關する孔子の言は多く之れを子思の取り去るに任じたるならん。若しくは既に論語に在りしも、子思の採録と重複せるによりて、次第に削去又は消散せしならん。而して禮記の一篇なる今の中庸は、子思の中庸論の面影を存するものなるべければ、其の中に在る孔子の言は疑ふを須ひざるべし。

されば孔子が堯舜を崇拜せると共に、又中庸の至徳たるを絶唱せるは、亦明かなり。何となれば、堯舜が政教の原則とせし所、一の中に外ならざりしを以て也。

中は堯舜禹相傳の心法なりき。

堯曰はく、咨爾舜、天の歴數、爾の躬に在り、允に其の中を執れ、四海困窮せば、天祿永く終らんと。舜亦以て禹に命ず。(堯曰)

是れ堯が舜に、舜が禹に命ぜし言として、上古以還傳へ來りし語なりしことは、措辭頗る古色あり、且つ口づから相傳へて記憶し來りし上古の名言として、各國必ず其の例を同じうするものは、押韻せること也、此の語亦躬、中、窮、終と毎句一東の韻を踏みたるにて知らる。有名なる大禹、諡中の名言なる、人心道心、精一執中の語は古文尙書(後章其の偽書なるを解せり)なるが故に執らず。但し、其の出處は荀子解蔽篇にあれど、『道經に曰はく』とありて、何人の言なるや明かならず。

子曰はく、舜は其れ大知なるか、舜問ひを好み、好みて過言を察す。惡を隠し、善を揚げ、其の兩端を執り、其の中を民に用う。其れ斯れ以て舜となすか。(中庸)孔子之れを言ふのみならず、尙書を讀みて其の然りしを知るべし。有名なる皋陶の九徳の目にいはく、

寛にして栗、柔にして立、威にして恭、亂にして敬、擾にして毅、直にして温、簡にして廉、剛にして塞、疆にして義。(皐陶謨)

是れ二徳相折衷し、相制して、適宜の中に居らしむる也。而して是れ必ずしも皐陶の創見にあらず、之れより先き、舜が教育の官たる夔に對し、樂徳當時の教材は音を以て其最も主要なるもを述べ、

直にして寛、温にして栗、剛にして虐、吝なく、簡にして傲るなし。(堯典)

といへると、其の義に於いて全く同じく、語に於いて殆んど同じく、直、温、寛、栗、剛、簡の六字は兩者共に之れを用う。知るべし、中は是れ當年道德の理想にして、政教の原理となされしものなるを。洪範の剛克柔克亦是れ也。されば管子が、

政は正なり、正やは萬物の命を正定する所以也。是の故に、聖人、徳を精しくし中を立て、以て正を生じ正を明かにし、以て國を治む。故に正は過ぎたるを止め、及ばざるを越ぼす所以也。過と不及とは、皆正に非ざる也。(法法篇)

といへるは、夙に政教一致と中との關係を明瞭に説明せり假りに管仲自身の言といふべく、老子の後を紹ぎし博學なる文子が、

聖人の道、寛にして栗、柔にして直、猛にして仁、太だ剛なれば則ち折り、太だ柔なれば則ち卷く。道は剛柔の間に在り。(上仁篇)

といへるもの、善く古意を解すといふべし。

堯舜の爲めに斯くの如く重んぜられたる中は、亦孔子の爲めに最も尊重せらるゝは當然なり。中庸を以て倫理的要諦としては、

君子は中庸、小人は中庸に反す。(中庸)

と云ひ、政治的原則としては

舜、其の兩端を取りて、其中を民に用ふ。(同上)

といへり。然るに堯舜には之れを中といひ、孔子は一字を加へて中庸といふ。而して中庸と中と中行とを區別したるが如し。

君子の中庸なるや、時に總べての時中す。(中庸)

中行を得て之れに與せずんば、必らずや狂狷乎。(子路)

中庸の徳たるや、其れ至れるか。(雍也)

何晏集解に庸字を解して、『庸は常なり、中和常に行ふべきの徳』といへり。孔

子も既に中庸の徳といへり、即ち中を守りて常に變せざる内面的道德の言にし  
て、單に中とは事につきていひ、中行とは之れを行事にいひ、未だ心につきて云は  
ず、堯舜禹相命するも、中を執れといひ、亦事につきて云ひ、樂の四徳、皇陶の九徳も  
亦適宜折衷の間に中行を求むるに過ぎず。孔子が一庸字を加へて内面化した  
るは明かに祖述的開展に外ならず。而して中庸は既に斯くの如く政教の原理  
なりとすれば、是れ其の所謂一貫の道にはあらざるべきや。

孔子の幼時に於ける嗜好は禮なりき(孔子世家)、而して壯歲既に學者として有  
名なりしものは禮に達するを以てなりき(左傳昭七年)、而して老聃に問ひ(禮記曾  
子問)、鄒子に問ふ(左傳昭十七年)も皆禮なりしを以て見るも、禮につきては最も研  
究を怠らざりしならん、其の家塾に於いて教へし所も禮を主要なるものとなせ  
りき。教育事業 大廟に於いては『誰れか、鄆人の子、禮を知るといふか』と云はれ  
(八佾)、齊の策士に『孔丘禮を知りて勇なし』と云はれ(左傳定十年)、曾て晏子に『孔  
某中略絃歌鼓舞して以て徒を聚め、登降の禮を繁くして以て儀を示す』と云は  
れし(墨子非儒篇)が如き、如何に孔子が禮に深かりしかを知るべし。されば治國

禮につきて

の要道としては、

人を治むる所以は、禮を大となす。禮記哀公問篇 大戴禮哀公問於孔子篇

と云ひ、修身の要道としては、

君子、博く文に學び、之れを約するに禮を以てす、亦以て畔かざるべきか。(雍也)  
と云へり。禮も亦其の所謂一貫の道にあらざるか。

孔子は斯くの如く、其の學業及行動に於いて禮と終始し、又禮を以て治國修身  
の要道となせるが、其の禮なるものは多くは周初に於いて、湊合制定せられたる  
也。尙書を見るに堯舜のとき既に五禮なるものありし(堯典)は明かなれど、其の  
他禮につきては言ふ所殆んど無く、禮と政教との關係は左まで著しからず、夏  
ときは寧ろ簡古の政なりしより見るも、其の禮は多く見るに足らざるべく、殷  
より少しく起り、周に於いて最も備はりしが如し。假りに今の周禮及び儀禮は周  
公の述にあらずとするも、政治的禮制なり、社會的儀禮なり、多くは、周初に制定せ  
られしは事實なり。孔子が、

周は二代に鑑み、郁々乎として文なるかな。(八佾)

と云へる是れ也。されば孔子は、多少之れを是正せんとの意なきに非ざりしも大體に於いては周初制作の禮を守るものにして、

夏の禮は吾れ能く之れを言ふも、杞、微するに足らざる也。殷の禮は吾れ能く之れを言ふも、宋、微するに足らざる也。(同上)

と云へる如く、文武を憲章するものは、即ち其の禮たりしこと知るべし。

禮の政治的要道たる所以は、社會の調和に在り。

之れを道びくに政を以てし、之れを齊しうするに刑を以てすれば、民免れて耻なし。之れを道びくに徳を以てし、之れを齊しうするに禮を以てすれば、耻あり且つ格る。(爲政)

と云へる、其の所謂齊しくするとは、均一するの意ありと雖も、亦齊整するの義なからず、整齊とは即ち調和なり。此の點に於いては、後年荀子の大に祖述せし所なりとす。

而して、禮に尙ふべきものは、其の外部に現はれたるものにあらずして、之れに應ずべき内部の情に在り。内部に其の情なくして、只外部の形式のみを得るも

禮と禮讓

のは、偽善にあらざれば即ち無意味なり。此のことにつきては孔門訓育法の條に詳細是れ孔子以後の學者が、禮を以て一の内面的道德の名とするに至れる所以也。孔子亦既に此の點に著眼したり。

禮と云ひ禮と云ふ、鐘鼓をしも云はんや。(陽貨)

と云へるは、禮は決して儀容器具等形式の末にあらずとなせるものにして、又能く禮讓を以て國を爲めんか、何かあらん。能く禮讓を以て國を爲めざる、禮を如何ん。(里仁)

といひ、禮に加ふるに讓を以てせしは、禮の實、即ち禮をして偽善又は虚儀たらしめざる内面的徳操の重んずべきを示すものにあらずや。孔子が此の點に注意するを怠らざりしは、中に於ける其の祖述的開展と共に、亦禮に於ける憲章的開展ともいふべきか。

堯舜を祖述せしは主として中につきて也、文武を憲章せしは主として禮につきて也。而るに中庸の書に、孔子、堯舜を祖述し文武を憲章することを云ひ、盛んに中庸の至徳たる論すると共に、又禮儀三百威儀三千の曲禮儀禮の燦然たるを

中と禮との關係

推稱するは、中と禮とが何等か相關係する所あるを想像せしむ。孔子の左の言は此の點に於いて注意すべきものなり。

恭にして禮なければ則ち勞、愼みて禮なければ則ち意、勇にして禮なければ即ち亂、直にして禮なければ則ち絞。(泰伯)

といへる是れ也。有子が、

恭、禮に近ければ、耻辱に遠ざかる。(學而)

といへるも亦之れと同じ。恭、愼、勇、直、亦一の美德たるを失はざれど、之れを適宜の邊に制せざれば、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如く(先進)、其の美なる所以を失ふをいふものにして、是の語に於いて、禮といふ文字を除きて、之れに代ふるに中といふ文字を以てするも全然同じく、中てふ抽象的なるを、禮てふ具體的のものとなせしとも見らるべく、又、中とは適宜といふに過ぎざる度量的形式的の意義に對し、其の所謂適宜とは、果して如何なるものが宜しきやといふ内容的質料的の意義を與えたりと見らる。凡そ禮なるものは、其の制作の本意、一の儀式制度及作法を定めて、萬人を律するものにして、情の過ぎたるものは之れを制し、及びさ

るものは之れを推し、總ての人をして其の宜しきに適せしむる所以ならずんばならず。子思の所謂

先王の禮を制するや、之れに過ぎたるものは、俯して之れに就き、至らざるものは、跛して之れに及ぼす。(禮記檀弓上)

とは是なり。

林放、禮の本を問ふ。子曰はく、大なるかな、問ひや、禮は其の奢ならんよりは、寧ろ儉せよ、其の易ならんよりは、寧ろ戚めよ。(八佾)

と云ひ、別に奢と儉とを解して、

奢なれば則ち不遜、儉なれば則ち固。其不遜ならんよりは寧ろ固なれ。(述而)といへり、是れ奢も儉も共に道ならざれど、奢よりは寧ろ儉なるに如かずとなせるにて、禮は奢と儉と及び易と戚との間、即ち適宜の邊にあれども、若し之れを失せば寧ろ儉なれ戚めよといへるものなり。されば、中行を得ずんば寧ろ狂狷に與せん(子路)と云へると同じく、禮は中に在るを知るべし。有子いはく、

禮の和をもつてするを貴しとなす。先王の道斯れを美となすは、小大之れに

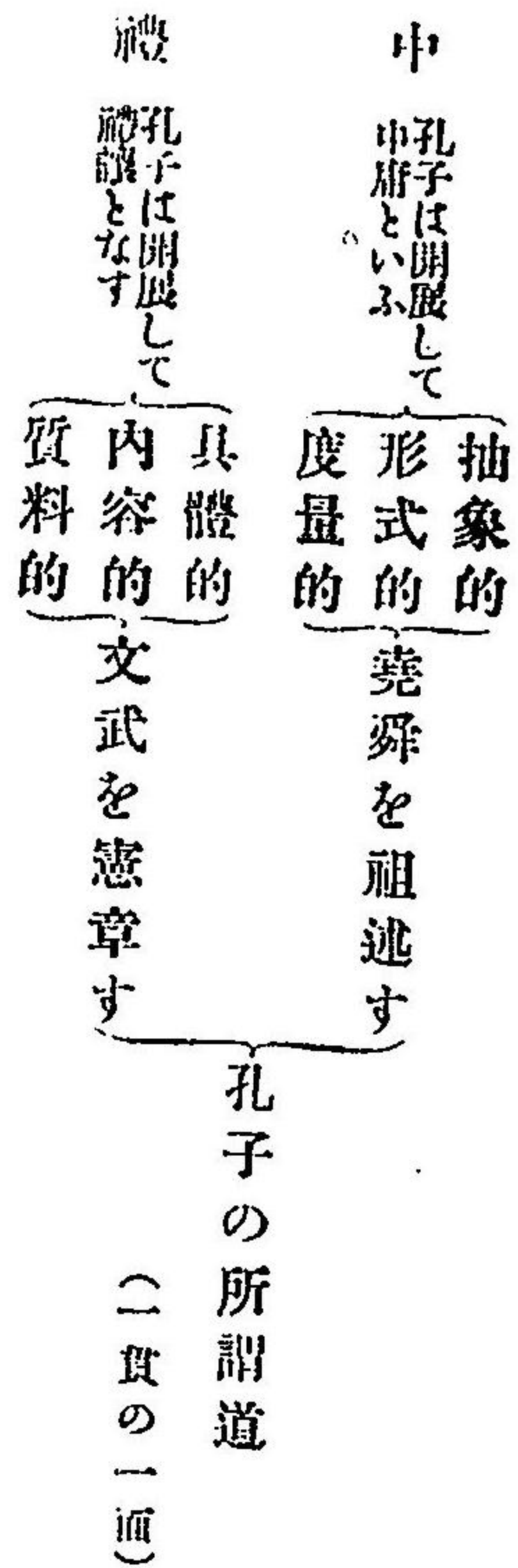


由りて行はれざる所あれば也。和を知りて和する、禮を以て之れを節せざれば、亦行はるべからざる也。(學而)

と。禮は和を貴び、小大之れに由らしむるものにして、禮が民人を調和すると共に、其の制作の本意が中和に在るをいふものならずや。孔子が、

質、文に勝てば則ち野、文、質に勝てば則ち史。文質彬々、然して後に君子。(雍也)といへるも、禮は文と質と相析中して、其の宜しきを得せしむべきものなるを訓ふるにあらずや。

されば、以上述べ来る所を要約し、之れを圖解すれば左の如し。



仁につきて

仁は孔子が所謂一貫の道なることは、孔子自ら之れを言はずと雖も、其の仁を尊重すること最も至れると、其の教は殆ど仁の一語を以て蔽ひ得べきとを以て断定せらる。孔子が曾子と子貢とに告げたる所謂一貫の義は、忠恕に近く、中と禮とを含み、仁を以て總括するものなること、果して自ら意識せりや否やに論なく、其の説ける所を究め來れば、自ら茲に歸着せざるべからざるは、蟹江博士の既に着眼(孔子研究第二編第六章)せるが如し。

元と孔子以前にありては、仁は未だ左まで重んずべき徳にはあらざりし、知と勇とに並びて一徳たりしに過ぎず。例へば、

吾れ之れを聞く、仁は君を惡まず、知は困しみを重ねず、勇は死を逃れずと。(國語晉語二、申生周の惡王の言)

とあり、又同書にも武、仁、知と並び擧げしもの二處に見ゆ。知仁勇並稱は頗る古きよりのことにして、既に人の常想常語たりしと見え、孔子の言にも亦之れあるを見(憲問)中庸にも亦之れを言へり。されば、相對的の道德たる狭き意義の仁あるを許さざるべからざるも、孔子は多くは毎に之れを絶對的なる汎き意義に於

いて之れを用ゐたり。仁を斯くの如く推擴して、社稷民人の爲めに一大典則を立てたるは、孔子が集成的開展の一大事業なりとす。而して仁の解釋に至りては、古來頗る紛々、殆んど適從する所に迷ふ、蓋し孔子は仁を言ふこと多けれど、竟に之れが定義を與えず、或は其の動作効益を以て言ひ、或は其の形貌態度を以て言ひ、或は仁に到達すべき所以の法より言ひ、或は其の施用する一面より言ふ。蟹江博士が仁を解して、利澤、重厚、慈愛、忠恕、克己となせる、其の功没すべからずと雖も、孔子が多く言へるを少しく縮小したるに過ぎずして、猶ほ未だ明晰なる仁の概念を得ざるの憾みあり。仁に就きては、先輩市村博士が、仁とは孔子が社會維持の爲めに立てたる大原則にして、親愛と調和との義なりとなせる(雜誌『日本人』第五百三十一號)は、孔子をして今の世に生れしめば、必らず若く説明すべきを覺えしむるものあり、最も進歩的解釋なりとす。蟹江博士の利澤と言へるは其の公的効果にして、重厚と云へるは其の私的結果なるべく、慈愛といひ、忠恕といへるは其の一面にして、克己といへるは其の方法なるべし。古來、仁を解して博愛又は愛の理、韓退之、朱子の如きといへるは、親愛の一面に執し、安民の德、祖

袞、仁齋の如きと云へるは、調和の一面に執したるが如し。

孔子が、門人の仁を問へるに對して、人を愛す。(顔淵)

と答へ、又、中庸に

仁は人也、親に親しむを大なりとす。

といへるは親愛の義にして、又、仁を問へるに答へて、

居處恭、事を執る敬、人と忠、夷狄に之くと雖も、棄つべからざる也。(子路)

といへるは調和の義なるが如し。其の

君子親に篤ければ、則ち民、仁に興る。(泰伯)

といへるは、親愛と調和とが、並びに民人に行はるるに至るを言ふもの、如し。

仁に到る所以の修養としては、恩師三島先生が内修外修の方法として『克己復禮』の一語を擇み教へられしは、最も適切なりとす。

顔淵仁を問ふ。子曰はく、己れに克ち、禮を復む、復は服とを仁と爲す、一日己れ

に克ち禮を復めば、天下仁に歸す。中略、顔淵曰はく、請ふ其の目を問はん。子曰

はく、禮に非ざれば視る勿れ、禮に非ざれば聽くなかれ、禮に非ざれば言ふ勿れ、禮に非ざれば動く勿れ。(顔淵)

さすがに、其の及門第一人たる顔子に教ふるものなればにや、孔子は茲に於いて仁に到るべき所以の秘奥を皆傳したるが如し。但し是れ元と孔子獨創の見にあらざるは、左傳に、

子曰はく、古や志あり、己れに克ち禮を復むは仁也。(昭公十二年)

とあれば舊志既に之れを云へるものありし也。之れを『己れに克ちて禮を復む』と訓して一意となし、克己勉勵して禮を行ふと解するは非なり。後の擧ぐる所の目は禮のみなれど、克己と復禮とは分ちて二事となさざるべからず、一は内修、一は外修是れ也。而して克己とは、成るべく自我の情を制して、同情を汎くするものなるが故に、之れを慈愛と見るべく、禮は社會の衆庶を均齊するものなるが故に、復禮は之れを調和と見るべく、仁は即ち慈愛と調和との完全圓滿なるをいふと解され得。

忠恕、中庸、  
禮仁、及び  
一貫の道

仁の概念は略之れを得たり。然るに、忠恕、中庸及び禮も亦孔子の所謂一貫の

道の一面なるに似たれば、此れ等相互の關係につき一言せざるべからず。先づ忠恕は仁の親愛的方面なるは、

仁者は、中庸己れ立てんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す。(雍也)

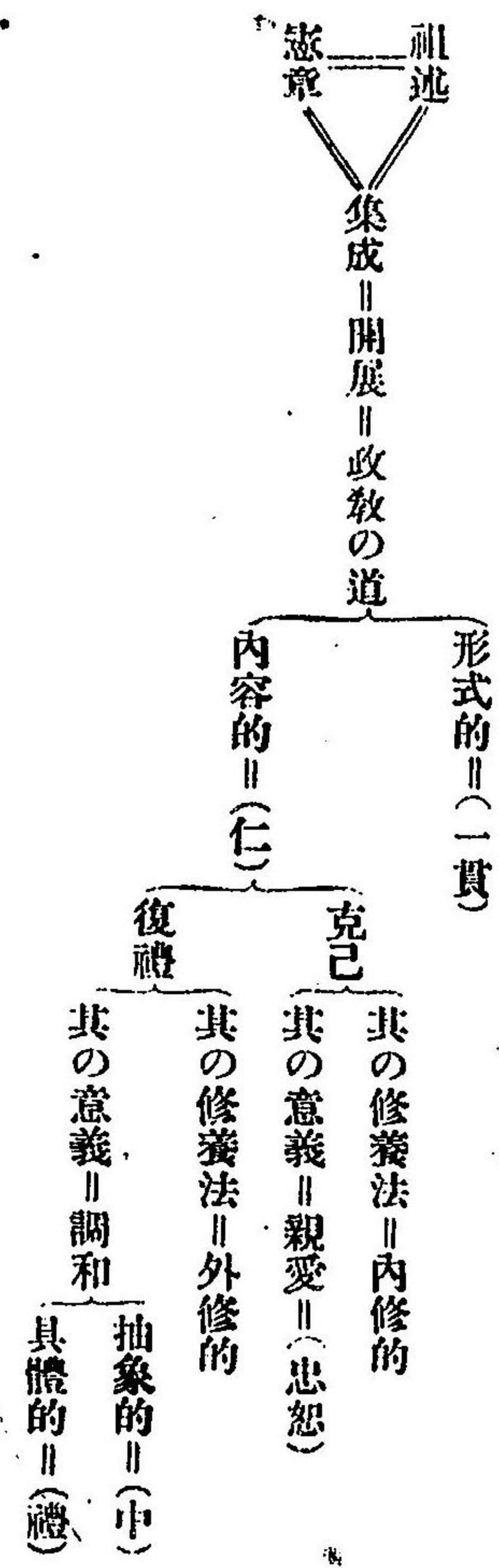
仲弓、仁を問ふ。子曰はく、己れの欲せざる所、人に施すなかれ。(顔淵)

の一言にて知らるべし。而して中と禮とは形式と内容との關係なることは、前に詳述したる所にして、仁と中との關係は、一に中道に依りて行へりなせる堯舜を稱して、

子貢曰はく、如し博く民に施し、而して能く衆を濟は、如何仁と謂ふべきか。

子曰はく、何ぞ仁を事とせん、必らずや聖乎、堯舜其れ猶ほ諸れを病めり。(雍也)と云ひ、堯舜の仁たるは言ふを待たずとなせるにて、中を能く行ふもの即ち仁なりとなすを知るべし。而して仁と禮との關係は、上來述べし如く、社會を構成する各分子をして、善く調和を保たしむるもの、是れ仁の徳にして、其の効果にして兼ねて仁を修養する所以なりとす。されば、之れを要するに、孔子の所謂道とは形式的には之れを一貫の道と云ひ、之れを内容的には仁と稱し、仁の一意義なる

親愛につきては之れを克己と云ひ、之れを内修的方法とし、其の徳を忠恕を云ひ他の一面たる調和の意義につきては、之れを復禮と云ひ、之れを外修的方法とし禮には中と禮と二義あるを知るべし。而して是れ孔子の祖述し憲章し之れを集成し開展したるもの也。之れを圖解すれば左の如し。



孔子が學說の上に於ける事業の大端は、以上を以て既に盡きたり。されど一事の見逸すべからざるものあるは、君臣の關係を規定せしこと也。舜が司徒をして布かしめし所謂五典なるものは、左傳に謂ふ所の、父は飢、母は慈、兄は友、弟は共、子は孝。(文公十八年)

君臣關係の規定

是れ也。孔子は哀公に説きて、

父慈、子孝、兄愛、弟敬。是れ先王の先づ民に施せし所也。(大戴禮四代篇)と云へり、易の彖傳には、

父、父たり、子、子たり、兄、兄たり、弟、弟たり、夫、夫たり、婦、婦たり。(家人卦)

とあり。すべて家庭間に於ける義務の規定たるに過ぎざりし。而して、君臣間の道德の次第に發展し來るべきは勿論なれば、晋の渤海の言に、

君、君たり、臣、臣たり。是れを明訓といふ。(國語晉語四)

とあるが如く、斯くの如き教訓も成立せりと見ゆ。而して之れを合一して並稱するに至りしは孔子よりなり。

齊の景公政を孔子に問ふ。孔子對へて曰はく、君、君たり、臣、臣たり、父、父たり、子、子たり。(顔淵)

公曰はく、敢て問ふ、政を爲すこと之れを如何ん。孔子對へて曰はく、夫婦別あり、父子親あり、君臣義あり、三者正しければ則ち庶民之れに従ふ矣。(大戴禮、哀

公問於孔子篇)

孔子の集大成

の如きは是れ也。されば有子の如きは、

其の人となりや孝弟にして、而して上を犯すことを好むものは鮮なし矣。(學而)

と云ひ、家庭間の義務は、君臣間の義務と根本に於いて同じきを主張せり。孔子歿後、孔門に於いて最も孔子の言に類すと稱せられし有子は、善く孔子の旨を得たるものならん。

### 第二節 易理の新意義

易と孔子

易に關する孔子の事業は、從來一の卜筮の書たるに過ぎざりしを推し上せて後世をして之れを六經の中に列せしむるまでに、教化上依據すべき經典たらしめしこと其の一也。而して不惑孔子が易の研究を始めし四十五六歳よりならん以還、深く之れを研究して大に得る所あり、假りに今の繫辭傳は孔子の思想を發表せるもの後人の竄入あるは明かなれども判然之れを區別し能はざるが故に一見明瞭なるものとして、孔子が政教の原理とする所の外假りに其の全部を孔子の思想なりと認定せんか

に更らに天人合一てふ理論的根據を與えたることは其の二にして、卜筮を教化的に説明せるは其の三なり。其の一は更らに言ふを要せず、其の二は其の哲學的解説に入るの深からざる程度に於いて、今其の略を述べ、其三は未だ之れを人に聞かざる著者独自の私見なるが故に、少しく其の詳を叙す。

天人合一説

本章に於いて、支那上代の天に關する思想を詳説せんは、其の煩なるに過ぐるが故に今之れを略す。たゞ、論語堯曰篇に見えし堯舜相傳の語に、天の歷數と云ひ、又天祿と云ひ、尙書には、

天、有典を叙し、我が五典を勅たす。(皋陶謨)

舜じゆん倫じゆん敷ふる所、鯀則ち殛死し、禹乃ち嗣いで起る。天乃ち禹に洪範九疇を錫たまふ。

舜倫叙する所。(洪範)

とあるを見れば、天は意志と知識とを有し、政教道德の根源にして、又賞罰の權を行ふ一大人格となせるは明白也。孔子も亦斯くの如く信せしは、天、徳を予れに生ず(述而)と云ひ、罪を天に獲れば禱る所なし(八佾)と云ひ、天道を信じ(公冶長)、天命を畏れ(季氏)しにて知るべし。而して繫辭傳に、

易の書たるや、廣大悉く備はる。天道あり、人道あり、地道あり。(下傳)

天の道を明かにして、而して民の故に察す。(上傳)

等の言あり、以て人道の根本は天道に在りとなし、又

天地の大徳を生と曰ふ。(下傳)

一陰一陽、之れを道といふ。之れを繼ぐものは善なり、之れを成すものは性なり。(上傳)

と云ひ、積極的原理と消極的原理と消長交替し、變化活動する所以のものを以て其の根本の原理となせる也。

上の語に於いて、『之れを繼ぐものは善也、之れを成すものは性也』といへる之れによりて、善といひ、性といふの何なるかを窺ひ知るべし。『之れ』なる代名詞は、文法上『道』を指すことは明か也、されば道を繼ぐものは善にして、道を成すものは性たる也。孔穎達の正義は、王弼によりていふ、

之れを繼ぐものは善なりとは、道是れ物を生じて開通し、善是れ理に順ひて物を養ふ故に道を繼ぐの功は、唯善行也。之れを成すものは性なりとは、能く此

天人合一と  
性善及び  
仁

の道を成就するものは是れ人の本性。

と、朱子は解して、

繼ぐとは其の發するをいひ、善とは化育の功をいひ、中興成るとは其の具はるをいひ、性とは物の受くる所をいふ。言ふは、物生すれば則ち性あり、而して各此の道を具ふる也。

といへり。二者多少の相違あり、且つ朱子は之れを其の性善論に傳會したる所あるも、兩説相一致する所を取れば、宇宙には道なるものありて、萬物を化育するもの也、所謂善とは、此の化育を遂げしむべく天道に合する人の行事をいふものにして、而して人及び一切のもの、此の天道により、此の化育を受け、善的に發育すべき性を本來固有するものなりとする是れ也。即ち人に於いて善といふものは何ぞやとの根據を天道に求め、又人は何故に善を行ひ得るやの由縁をも天道より演繹せんとしたるもの也。又他の語を以て、

性を成し存存、道義の門。(上傳)

生生之れを易と謂ふ。(同上)

といへるも、亦此の意あり。即ち未だ必らずしも純然たる性善論に達せずと雖も、何物も善に向つて發育すべき傾向を有せりとなさる。されば、政治、倫理、教育等、之れを合して、所謂政教とは、宇宙化育の大道を繼紹して、人の此の傾向を發展せしむるもの是れ也。

繫辭が果して孔子の思想ならば、既に善と性とを天人合一の理より説明し來りて、而して其の最も完全なる上善とする所の仁につき言ふ所あるを豫期すべし。即ち以上の言を總括して立言せるにいはく、

これを仁に顯はし、これを用に藏し、萬物を鼓し、聖人と憂を同じくせず、盛徳大業至れるかな。(上傳)

と。竟に之れを仁に歸結し、贊して盛徳大業至れるかなといふに至り、仁の根據を天人合一に求め畢れりとなす、果して期待に背かずといふべし。茲に聖人と憂を同じくせずとは、孔子が「天何を言はんや、四時行はれ、百物生ず」(陽貨)といへると、全然同一意義也。

次ぎに繫辭の卜筮觀と、其の政教との關係を研究せん。

普通の思想に於いて、卜筮は宿命を豫想せざれば信せられず、人間以外の意志が命令せる、而して人は自ら知らざる、定められたる、命運ありとすること也。而して政治修身、教育等を否認するものは宿命論也、何となれば、人の禍福吉凶は既に定められて、其行事の善惡と何等の關係なしとするに至れば也。然るに繫辭は一面に於いて盛んに卜筮を説き、他面に於いて教化修身を論ず。此の二者が相異なる二人の思想より出でたりとすれば已む、若し然らずんば、何等か調和すべき所あらざるか。而して此の調和が、經典として易を尊重するに至らしめし所以ならざるか。

繫辭は卜筮の信すべきを述べ、其の原理を説明せんと試む。易は哲學、倫理、政治、教育等を含むと雖も、畢竟卜筮の書たるは否定し難し、古來殆んど卜筮のみの爲めに存したる也。朱子の如きは全然之れを卜筮に解し、冒頭第一乾卦の註に「此れ聖人易を作る所以、人に卜筮を教へて、以て物を開き務を成すべきの聖意なり、餘卦此れに倣ふ。」

と云ひ、各卦各爻を註するに、皆占者が占して此れに會へるときの用意を以て解

釋したり。されど是れ決して孔子の意にあらず、繫辭に、

君子居りて安んずる所のものは、易の序也。樂しみて玩する所のものは爻辭也。君子居りては則ち象を觀、而して其の辭を玩し、動いては則ち其の變を觀、其の占を玩す。是を以て天より之れ祐く、吉にして利ならざることなし。(上傳)

といへる如く、動作すべき時に卜筮に問ふの外、平生其の文に含蓄する教理を心とすべきをいへり。又、

夫れ、易は徳を崇たかうし業を廣くする所以也。知は崇く、禮は卑し、崇きは天に効たひ、卑きは地に効ふ。(上傳)

易に聖人の道四あり。以て言ふものは其の辭を尙び、以て動くものは其の變を尙び、以て器を制するものは其の象を尙び、以て卜筮するものは其の占を尙ぶ。(同上)

の如きは、雖る卜筮は易の副貳的作用たるに過ぎず。斯く易は卜筮のみの書にはあらずといふと雖も、同時に、卜筮の必らず當るべきを信ずるもの也。

卜筮を信ずるべしとする明繫辭の四說

數を極め來を知る、之を占と謂ふ。(上傳)

圓を探り、隱を索め、深きを鉤し、遠きを致し、以て天下の吉凶を定め、天下の聲とを成すもの、蒼龜より大なるはなし。(同上)

など以て見るべし。然らば何故に卜筮は信すべきか、繫辭の見る所に依れば、次ぎの如き四個の理由あり。

第一、真理は時間空間に貫通す、事物の進動には必らず一定の真理あり、故に真理を體認すれば、一事に次いで起るべき他事を豫知し得べしとす。

仰いで以て天文を觀俯して以て地理を察す。是の故に幽明の故を知る。始を原ね終りに反る、故に死生の説を知る。精氣物を爲し、游魂、變を爲す、是の故に鬼神の情狀を知る。(上傳)

而して易は此の天地の真理を示すものなりとす。いはく、

天下の順を極むるものは卦に存し、天下の動を鼓するものは辭に存す。化して之れを裁するは變に存し、推して之れを行ふは通に存す。(上傳)

と。換言すれば、宇宙の現象は一變化に過ぎず、變化には一定不易の理法あり、此



の理法を知れば未來を知るべしとす。

變化の道を知るものは、其れ神のなす所を知るか。(上傳)  
といへる是れ也。

第二、人能く至誠にして邪念なければ、自ら真理に感通す、易は即ち然りとなすものゝ如し。

易は思ふなき也、爲すなき也、寂然として動かす、感じて遂に天下の故に通ず。天下の至神に非ざれば、其れ孰れか能く此れに與からん。(上傳)  
といへる、此の意を見るべし。

第三、聖人は信を取り宗となすべきもの也、易は聖人が天地の理を觀取して發明せるものなるが故に、信すべしとなす。曰はく、

聖人以て天下の頤を見るありて、而してこれを其の形容に擬し、其の物の宜しきに象どる、是の故に之れを象といふ。(上傳)

夫れ、易は聖人の深きを極め幾を研むる所以也。(同上)

聖人象を立て、以て意を盡くし、卦を設けて以て情偽を盡くし、辭を繫けて以て

其の言を盡くす。變じて之れに通じ、以て利を盡くし、之れを鼓し、之れを舞し以て神を盡くす。(同上)

第四、天地は數を以て表はし得べく、著策は之れに象れるものなりとす。五十本の著策を以て占筮を行ふ方法と其の理由とを述べて、

天地の數、五十有五、此れ變化を成して而して鬼神を行ふ所以也。大衍の數五十、其の用四十九、分ちて二となし、以て兩に象どり、一を掛けて以て三に象る。

兩とは陰陽二儀を云ひ、三とは天地人三才なり之れを撰するに四を以てし、以て四時に象る。奇を扨に歸し、以て閏に象る。五歳再閏、故に再扨して後掛く。乾の策、二百一十六、坤の策百四十、凡そ三百六十、期の日に當る。二篇の策、萬有一千五百二十、萬物の數に當る也。(上傳)

といへるもの是れ也。

以上四個の理由を検するに、第四の數字表現説は、何等の證明もなき幼稚なる理論なり。假りに數を以て表はし得べしとするも、單に其の數のみ合はせたる著策が、直ちに天地の真理を語るとは、更らに説明なしには首肯し難し。第三の

聖人作易説も、研究的思想あるもの、容認すべき所ならず。宗教的に見て、聖人を神の子又は天啓ある者となさば兎に角然らざる以上、斯かる科學的證明を要するものまでも、聖人のオーソリティーは擴侵し得べからず。第二の至誠感通説は多少の理あり、人能く至誠にして邪念なく、公平無私に思慮するときは、或は次いで起る所の結果を豫知し得られざるにあらずと雖も、之れを普汎的に、如何なる場合も然りとは斷言し難し。且つ易其のものが、寂然不動なり、至誠なりとは其の意義解し難く、恐らくは無意味なり。第一の眞理體認説も亦取るべき所なきにあらず。良匠の計劃の如く、名將の知謀の如く、事物の性質、現象、變化の理に通ずれば、必然起るべき將來の結果を豫料しうべしと雖も、易が果して宇宙一切の現象を總括すべき理法なりや否やは別に證明されざるべからず。以上論ずる所に依れば、如何なる特殊の場合にも、易は未來を語るものなりとの繫辭の説明は、全然失敗せりと斷じ得、即ち卜筮を信ずるは何等の根據もなきもの也。但しこゝに注意すべきは、世間の愚夫愚婦に於いて見るが如き卜筮の信念と、繫辭の其れとは、明かに左の如き二個の點に於いて劃然たる差異あること也。

俗人の卜筮  
觀と繫辭の  
其れとの差

第一には理論的見地を以て卜筮を信すること也。其の理由とする所は、上に述ぶる如く誤まれりと雖も、市井の俗人の如く、全く迷信的に之れを信ずるにはあらず。且つ繫辭の文字中、時に有神論なるが如きものあり、又孔子の思想に、天は意志あり、誠知あり、命令賞罰するものとなすと雖も、仔細に玩味すれば、繫辭は人間の一事一行、人間以上の大意志が、悉く之れを命令し、又は其の未來を暗示するものとはなさない也。

第二には、人に豫定され運命ありて、卜筮は之を語るものとなすに非ると也、即ち宿命論ならざる也。是普通の卜筮思想と甚しく異れる所なりとす。其の天を樂み命を知る、故に愛ひず。土に安んじ仁を教うす、故に能く愛す。(上傳)といへる、多少宿命の信念あるが如しと雖も、一切自己の努力を棄て、宿命のまゝに動くものにあらざるは、『仁を教うす』の語にても知らるべし。命又は天命といふは、宿命の意にあらずして、擇る人の分といへる意義に近し。人力の到底如何ともする能はざるを煩悶せざるが即ち知命にして、所謂人事を盡して天命を待つもの、始めより努力を擲ち、一切を他の大意志より賦せられたる命運な

るものに委するにはあらず。されば繫辭の卜筮觀は、如何なる運命の己れに備はれるかを占せん(是れ俗人の卜筮觀也)とするにあらずして、己れが如何に行動すれば理法に合すべきかを問ふもの也。

君子將に爲すあらんとするや、將に行ふあらんとするや、問うて以て言ふ。其の命を受くるや、擲ふが如く、遠近幽深あるなく、遂に來物を知る。天下の至精にあらざれば、其れ孰れか能く之れに與からん。(上傳)

といへるもの、此の意を見るべし。

されば、宿命を信じて迷信妄動する匹夫匹婦の如きに至りては、修身及教育と兩立せざる思想を有すと雖も、易に於いては必ずしも然らざる也。且つ卜筮なるものは、其の取扱方によりては、決して教へと矛盾することなく、寧ろ之れを助くることありとせん、繫辭の卜筮觀の如きは之れに屬するもの也。凡そ感情と知識とは屢、相併行せずと雖も、必らずしも相矛盾せず、猶ほ宗教と教育との如きか。二者は屢、相併行せずと雖も、亦必ずしも相矛盾せず、寧ろ相助く、宗教が倫理の法則に權威を與ふるとに於いて、大に教育を助くるが如き然り。易の卜筮も

卜筮と修身  
及教育

亦前に云へる如く、宇宙一切萬象を總轄する大理法の命する所なりとするの點に於いて、倫理の法則にも亦權威を加ふるの觀あり。宗教を信するものには之れを教育に利用せらるべきが如く、卜筮を信するものには、之れを教育に利用せられざるにあらず。且、或る見地よりして、卜筮は頗る便利を與ふることあり。例へば、人が疑惑を生じて何れを擇ぶべきかに苦しむるとき、之れを卜筮に決せんは、六十四卦を以て一切を攝理せんとする易の文は、極めて朦朧にして、特殊の事實的判斷には甚だ明確ならざるが故に、之れにつきて或る決定を與ふるとき、知らず識らずの間に、自家の知識意志が之れに加はりて、解釋と執意とを決定するに至る、既に自家の知識と意志との加はるあり、更らに之れを易の命する所なり理法の定むる所なりと信じて、其の方針に行動すれば、他の方針を取りたるよりも、寧ろ成功を期し得べき筈なり。市井の卜筮は一切の未來を問ふものなれども、易の占筮にありては、如何になすべきや、何れを擇ぶべきやの外、之れを問ふことなし。宿命的卜筮觀は、他の大意志に順ふが爲めに、全く自家の知識意志を没却するが故に、一に有害無益なりと雖も、繫辭の如き理論的卜筮觀は、之れを信す

吉凶と善惡

る普通人に對しては、必らずしも一概に之れを排斥すべきにあらざる也。且つ易は高德大知の古聖が、宇宙の自然に行はるゝ法則によりて發明したりとなさるゝが故に、易其のものが、既に人に對して一種の教化也。

師保あるなきも、父母に臨むが如く、初め其の辭に率したがひ、而して其の方を揆はかる。既に典常あり、苟くも其の人に非ざれば、道虛しく行はれず。(上傳)

といへる、明かに其の意を示めせり。此の結末二句は、左傳襄九年、穆姜筮して艮の隨に之くに遇へるとき、史の言に、『隨は其れ出也、君必らず速かに出でよ』とありしに、穆姜對へて、

なかれ。是れ周易に於いて曰はく、隨は元亨利貞咎なしと。中器四徳あるもの隨ふと雖も咎なし、我れ皆之れなし、豈隨はんや。我れは則ち惡を取る、能く咎なからんや。

といへると對照すれば、卜筮に對する上代識者の思想を窺ひ知るべし。凶人惡を行ひて吉占を得るも、決して吉にはあらずとなす也。繫辭が、神にして明かなるは、其の人に存す。默しも之れ成し、言はずして信、徳行に存

說 顧炎武の約

す。(上傳)

といへる、亦此の意なり。即ち知るべし、決して宿命的信念に出づるにあらずして、人若し道徳なければ、換言すれば易が豫想する所の其の人にあらざれば、易が告ぐる所の典常は行はれざるべしとせることを。是れ易の經文中にも毎に明言せるものに屬す。顧炎武が、古人の卜筮に關する思想を論ずる、簡にして要を得、今其の二三節目、知餘卷二を抄録して參照に供す。

洪範に曰はく、謀、乃たまたの心の及び謀、卿士に及び謀、庶人に及び謀、卜筮に及ぶと。孔子の易を贊する、亦曰はく、人謀り龜謀ると。夫れ庶人は至賤也、而かも猶ほ著龜の前に在り。故に人の明を盡くして、而して決する能はず、然して後之れを鬼に謀るなり。(二)

子の必らず孝、臣の必らず臣、此れトを待たずして知るべき也。其の當に爲すべき所は、凶と雖も而かも避くべからざる也。故に曰はく、靈氣の吉占に従はんと欲するも、心猶豫して狐疑すと。又曰はく、君の心を用ゐ、君の意を行ふ、龜策は誠まことに此の事を知る能はずと。善い哉、屈子の言、其れ聖人の徒か。(三)

禮記少儀に、卜筮を問ふ、曰はく、義か志か、義なれば則ち問ふべし、志なれば則ち否と。子の孝、臣の忠、義也、害を違り利に就く、志也、卜筮は先王、人に利を去り仁義を懷ふを教ふる所以也。(三)

君子將に爲すあらんとするや、將に行ふあらんとするや、問ふて以て言ひ、其の命を受くるや、嚮ふが如しと。以上は繫辭傳中の語也其の爲すを告ぐる也、其の行ふを告ぐる也。

死生命あり、富貴天に在り、是の如くならば則ち爲すべきなき也、行ふべき也、常に問ふべからず、問ふも亦告げざる也。易は以て民の用に先だつ也、以て人の爲めに前に知るに非ざる也。

前に知ることを求むるは、聖人の道に非ざる也。是を以て少儀の訓に曰はく、未だ至らざるを測るなかれ。(四)

金史方伎傳の序に曰はく、古の術をなすもの、吉凶を以て人を道びさて善を爲す、後世の術者は、或は休咎を以て人を道びき不善な爲す。(五)

尙ほ一二あれど略す、皆頗る背緊を得たりとす、其の四、殊に見るべし。

されば、以上序述し來りし所、幸ひに大なる誤謬なしとなれば、繫辭は、易の卜筮の信すべきことを主持すると共に、同時に、之れを政教に利用すべく、相矛盾せず

寧ろ相助くるものとなせる也。市井の卜筮觀と遙かに其の選を異にするものあるを注意するを要す。

## 第二章 孔子の經世濟民

### 第一節 官仕中の孔子

周公と孔子

孔子が壯歲常に周公を夢想しつつありしは、後年に至り、吾れ衰へたり復夢に周公を見ずとの嘆述ありしにて知らる。孔子は實に周公を欽慕し、以て自家の理想となしたる也。蓋し(一)周公は孔子の當代なる周の天下の禮制文物を創設したるものなるも、(二)時代最も近く、事蹟人物の知り易くして、表準を取るに頗る的確なると、及び(三)周公以前の聖人は皆王者の位に在るものなるが故に、おのづから其の分と其の事を異にすれども、周公に至りては、位、人臣の列に在りて、而して道を施すと十分なりしが故に、臣子の分、文武以上を望むべからざるも周公

孔子の經世濟民

には能く到るを得べきとの爲めならん。且つ孔子が其の子弟に教へしものを見るに、皆天下有用の器たらしめ、禮樂を施し政教を用うる所以ならずんばあらず。而して自らは善買を待ちて之れを沽らんことを望み子罕、吾れを用うるの明君を得て、其の蘊蓄を瀝注せんことを欲したりき。要するに孔子の理想は經世濟民に在りし也。而かも人生意の如くならざるもの十に八九、美玉終に善買に會はず、一たび魯に司寇となりしも久しからずして去り、周遊の後、歸りて大夫の後に從ひて國老たりしに過ぎざりき。故に孔子の事功として經世濟民は竟に遂げざりしと雖も、聖人は居るとして可ならざるはなし、官仕の間亦傳ふべきもの固より揚しとなさず。

微官として  
の孔子

孔子は陬邑の一村長に生れ、貧賤に人となりしが故に、少時鄙事多かりし(子罕)といへり。されば嘗て微官に就きしことわりと見え、孟子、史記之れを云へり。

孔子嘗て委吏となる矣。曰はく、會計常るのみ矣。嘗て乘田となる矣。曰はく、牛羊蓄として壯長するのみ矣。(孟子萬章下)

孔子、貧且つ賤長するに及び、嘗て委吏本文には「季氏史」とあれど「委吏」の誤なるは既に明白なりとなり、料量平

かなり。嘗て司職の吏となり、而して蓄蕃息す。(孔子世家)

委吏とは委積倉庫を主どるの吏にして、乘田とは苑囿芻牧を司るものなり、孟子の所謂『仕ふるは貧の爲めに非ざるも、而かも時ありてか貧の爲めにす』(萬章下)なるもの是れ也。孟子は又評して『位卑くして言高きは、罪也』(同上)といへり。孔子が忠實に此の微職賤官を守り、料量の公平と、六畜の蕃息とに一意なりしを知るに足る。蓋し此の心、王政の料量を公平にし、天下の民衆を蕃息せしむべきものたる也。

魯の司寇と  
なる

魯の定公八年、陪臣を以て權を専らにせし陽虎敗れてより、孔子漸やく魯に用ゐられて司寇となれり、孔子時に年正に五十。史記孔子世家には、定公孔子を以て中都の宰となす、一年にして、四方皆之れに則とる。中都の宰より司寇となり、司寇より大司寇となる。

とあれども、中都の宰及び司寇となりしことは明かならず。司寇となりしことは、孟子、左傳にも是れあり、司寇とは周禮に所謂秋官にして、直接に民政又は文政と關係なしと雖も、司法と行政との區別明劃ならざる當時のことなれば、一個の

大臣として國務に與かること尠少ならざりしなるべし。荀子に、仲尼將に司寇とならんとするや、沈猶氏敢て朝に其羊に飲はず、公慎氏其の妻を出し、慎潰氏境を踰へて徙り、魯の牛馬を粥ぐもの、豫め買せず、必蚤正して以て之れを待つもの也。闕黨に居る、闕黨の子弟分ならざるなし、親あるものは取ること多し、孝悌以て之れを化する也。儒効篇

とあり、名望國中に聞へ、奸惡のもの、孔子未だ出でざるに既に閉息せしを知るべし。

司寇中の教化的事功

司寇となりて後數年、其の政蹟と徳化と、大に見るべきものありしが如く、諸書之れを言ふもの多し、其の古きものを舉ぐれば、

孔子始めて魯に用ゐらる。中冓之れを用うる三年。男は塗右を行き、女は塗左を之き、財物の遺ちたるもの、民之れを舉ぐるなし。大智の用、固より喩へ難き也。(呂氏春秋先識覽樂成)

仲尼政を魯に爲し、道遺ちたる拾はず。(韓非子内儲説下)

孔子魯の司寇となる。道遺ちたるを拾はず、市買豫買せず、田漁皆長に讓る、而

して斑白負戴せず。法の能く致す所にあらざる也。(淮南子泰俗訓)

等の如き、多少潤飾又は夸大の筆あるべしと雖も、其の個人的感化及び行政的徳化が、斯くの如き教化的効果ありしは、必らずしも架空の傳説のみにはあらざるべきを信ず。

又其の徳政主義、教先法後主義法を用ひて刑するの開始づ、教化あらざるべからず、教えて後の政教論には、政弊に對して次第に現はれ出でんとせしは、荀子に出づる左の記之れを言へり

事の如きものあり。

孔子魯の司寇となる、父子訟ふるものあり、孔子之れを拘へ、三月別たす、其の父止めんと乞ふ、孔子之れを舍す。季孫之れを聞き、悦びずして曰はく、是の老や孔子を子を欺けり、予に語りて曰はく、國家を爲むは必らず孝を以てせんといふ也、今一人を殺し、以て不孝を戮せんとせしに、又之れを舍せりと。冉子以て告ぐ、孔子慨然嘆じて曰はく、嗚呼、上之れを失し、下之れを殺す、可ならんや、其の民を教へずして、而して、其の獄を聽く、不辜を殺す也、中冓教へずして成功を責むる、虐也、中冓其の教を亂り、其の刑を繁くし、其の民迷惑して陷る、則ち從うて之れ

を制す、是を以て刑彌繁にして、而して邪勝へず。下 豈宥坐篇

孔子をして長く其の職にあらしめ、若しくは司徒文政長官たり、若しくは大宰又は冢宰也たりしめば、其の政教の跡大に見るべかりしならん。

其の外交的  
手腕

孔子が閭臣たりしは其間甚だ長からずと雖も、天は大事を興へて其の才を用ゐしめ、以て後世の仰ぎ見るものをして、所謂儒者てふ道學先生の祖にはあらずして、經國の大業何か有らんと感嘆せしむるものあり。夾谷の會に於ける孔子が外交的、大手腕の發揮是れなり、定公十年のこと也。

夾谷の會は、齊魯二侯の會盟なり、此の時晋の衰弱に際し、齊の景公漸やく桓公の覇業を復せんとし、諸國と聯盟しつゝありき。魯は晋の同盟國なり、則ち一たび齊と戦ひしも直ちに敗れ、今や晋に反きて齊と和を構せんとす、構和と言ふも實は賄和なり、若し此の會、此の膝一たび屈せば、魯は長く齊の屬たらんとす、國權を全うすると否とは係りて此の一日に在り、而して孔子今定公を相けて危機を一髮に引けり。左傳にいふ、

夏、公、齊侯に祝其に會す、實は夾谷なり、孔丘相たり。鞌彌齊侯に言うて曰はく

孔丘禮を知れども、而かも勇なし、若し萊人をして、兵を以て魯侯を劫さしめば、必らず志を得んと、齊侯之れに従ふ。孔丘公を以て退いて曰はく、士之れを兵せよ、兩君好を合す、而して裔夷の俘、兵を以て之れを亂る、齊君の諸侯に命ずる所以にあらざる也、裔は夏を謀らず、夷は華を亂らず、俘は盟を干さず、兵は好に偏らず、神に於いては不祥となし、德に於いては愆義となし、人に於いて失禮となす、君必らず然らざらんと。齊侯之れを聞き、遽かに之れを辟く。將さに盟せんとす、齊人戰書に加へて曰はく、齊師境を出で、而して甲車三百乘を以て我に従はざるものは、此の盟の如きあらんと。孔丘、茲無還をして揖して對へしめて曰はく、而して我れに汝陽の田を反さずんば、吾れの以て命を共するもの亦之の如けん。齊侯公を享せんとす、孔丘、梁丘據に謂うて曰はく、齊魯の故吾子何ぞ聞かざる、事既に成れり、而して又之れを享す、是れ執事を勤むる也、且つ犧象門を出でず、嘉樂野合せず、饗して既に具すれば、是れ禮を棄つる也、若し其れ具せずんば、秕稗を用うる也、秕稗を用うれば、君辱しめられ、禮を棄つれば名惡し、子盍ぞ之れを圖らざる、夫れ享は德を昭かにする所以也、昭かにせず



んば其の已むるに如かざる也と。乃ち享を果さず。齊人來りて鄆譴龜陰の田を歸へす。(定公十年の條)

左傳の記事は、後の史家一二の疑議を狭めとも、大體に於いて異論なし。たゞ其の文甚だ力あれども、質實に過ぎて文彩なく、左氏平日の華麗なるに似ざるのみ。光景は齊魯二侯の會なり、其のヒーローは孔子なり、恰好なる一場の戯曲なるがゆえに、左傳の記事は甚だ物足らず、されば穀梁傳の如き、史記の如き、大に潤色して、奕々たる彩色を加へ來れる也。此の會に於いて、孔子は其の耿然たる赤誠と毅然たる意志と、周到なる智能とを以て、全然齊國に乗せられず、先づ其の兵を擁して我れを劫かし、其の命に惟れ從はしめんとするを退け、次ぎに不對等なる條約の締結を拒み、終りに饗宴に應せずして事端の滋からんとするを避け、皆成功して此の會盟を全うしたる也。偉人は國の實なるかな、富強の度に於いて、魯は遙に齊の下に在り、而して相對して能く兩國たるを得しもの、孔子一人の力ならずや。則ち孔子一人の力は、實に萬鎰の富と千乗の兵なりといふべし。而して孔子が外交に於いて其の功を成せしもの、權謀を以て勝を一時に俸せしにあら

ず、其の人格を發揮し、正義を一貫せるのみ。青年有爲の士は深く之れを牢記せよ、手腕とは即ち正義也、事功とは即ち人格也。

夾谷の會、左傳は『孔丘相たり』といへり、史記之れによりて『相事を攝す』といひ、又別に『攝相の事を行ふ』といふ、荀子にも『孔子攝相となる』(宥坐篇)と見ゆるも、會盟のとき、孔子を以て禮を相せしめしのみにして、相とは宰相の相にあらず、當時所謂攝相を以て官に名くるなし、且つ三傳及び孟子、皆孔子の攝相たるを言はざるを見れば、未だ信すべからず。たゞ、少政卯を誅したることは、其の司寇の職分としては或は有りうべきことなり。荀子に、

孔子攝相となり、七日にして少政卯を誅す。(宥坐篇)

とあり、而して孔子自ら門人に對へて其故を説明するにいふ、  
人、惡者五あり、而して盜竊は與からず。一、曰はく、心、達にして險。二、曰はく、行、辟にして堅。三、曰はく、言、僞にして辯。四、曰はく、記、醜にして博。五、曰はく、非、に順うて澤。此の五者は、人に一ある、則ち君子の誅を免れ得ず、而して少政卯兼ねて之れを有す。故に居處徒を聚め、群を成し、言談以て邪を飾り、衆を營す

少政卯を誅す

るに足り、彊は以て是に反して獨立するに足る、此れ小人の桀雄也、誅せざるべからざる也。(同上)

是れ或は事實なりしならん、孔子は國家統一、思想統一、及び國語統一を主張する政教論の條下參照のものなれば、少政卯の如き、一派の頭目にして、此の政策に反對するものは、國家の爲め或は之れを誅殺したらん也。是れ今の國家が、社會の維持を破壊せんと試みるが如き危険なる社會主義的思想に對し、嚴重に之れを監制せざるべからざるが如きもの也。

孔子が魯の公室の爲めに其の尊嚴を確持し、又國政統一を鞏固にせんことを希圖するや、三桓を歴し、三都を墮たんと期せり。當時政權次第に下に遷りしは孔子が

挂冠して魯を去る

祿の公室を去ること五世なり矣、政、大夫に逮ふ、四世なり矣。(季氏)

と嘆せるにて分明なり。三桓とは季孫、叔孫及び孟孫の三氏にして、三都とは費、郕、及び成是れ也。爲めに冉有と子路とを季氏の宰に推薦し、冉有の知謀と子路の勇敢とを助けとなし、以て之れが實行に著手せしも、不幸にして障礙從つて起

り、竟に之れを完成する能はざりき。是に於いて、孔子は挂冠して魯を去らざるべからざるに至れり、實に定公十三年なりとす。但し其の機會は「齊人女樂を歸り、季桓子之れを受く。三日朝せず、孔子行る」(微子)に在りしならん。即ち孔子が司寇の官に在りしもの、僅かに五歳に満たざりし也。其の年、遂に天下遍歴の行を啓けり。

國老たりし晩年

哀公十一年、孔子の魯に歸るや、其の國老として優待せられ(左傳哀公十一年冉有の語)、又大夫の後に從ひ(論語先進及び憲問篇孔子の語)しも、此の時孔子は既に一意家門の教育に専らにして、又國務に與かるを欲せざりき。只時に哀公及季康子の下間に對へて政務を論じ、又其の弟子の能事あるものを推薦し、其の既に用ゐられたるもの、言動を監督せしに過ぎざりしかば、孔子の官任的事功としては殆んど言ふべきものなし。

## 第二節 遍歴中の孔子

定公十三年魯を去り、哀公十一年魯に歸るまで、十四年の久しき、孔子は天下を周遊したり。其の通歴せる意義を測度するに、吾れを用ゐるの明君を求むると倫常の廢頽を救済するとの、二個の大旨意ありしが如し。孔子は尙くも我れを用ゐるものあらば、期月のみにして可也、三年成すあらん。(子路)といひ、自ら成算ありとなせり。又孟子に、

傳に曰はく、孔子、三月君なければ皇々如たり、疆を出づる必らず質を載す。(滕文公下)

とあり、仕を求むるに急に、又何時にても仕に應ずる準備をなせりと見ゆ。されば其の天下を周遊せるは、其の由りて以て經世濟民の術を施すに足るべき明主を求めんとしたるが如し。

而るに、單に己れを用ゐるものを求めんとしたるのみならば、十四年の歳時は長きに失せざるか、即ち多少斯文と斯道とを天下民衆に宣示するの意ありし也固より宗教の教祖の如く、民衆をして強いて己れの教義に化せしめんが爲めに奔走周旋するとは、大に其の趣むきを異にすと雖も、文王歿して後、斯文吾れに在

り、吾れにあらずんば、以て民衆をして斯文を觀せしむるに足らずのと抱負ありしと、又

孔子、聖人の心を抱き、道德の域に彷徨す。中略時に周室微にして、王道絶へ、諸侯力政し、強は弱を劫し、衆は寡を暴し、百姓安きことなく、之れが紀綱なし、禮義廢壞し、人倫理まらず。孔子、東より、西より、南より、北より、匍匐して之れを救ふ。

(韓詩外傳五)

といへる如く、當時斯道廢頽し、人倫地に墜ちたるを見、孔子は之れを坐視傍觀するに堪へず、周遊通歴して幾ばくか之れを救済せんとしたるが如し。儀の封人が孔子を以て、天斯の民の爲めに下せる木鐸なりとなせる(八佾)は、蓋し此の意義なりと見らる。

孔子は其の始めに在りては、寧ろ第一の目的の爲めに焦慮せし傾向ありしが如きも、後に在りては、全然第二の意義に於いてせしが如し。古來孔の席温かならずと稱せられ、一刻も一處に安靜ならざりしと傳説さるゝは、教化の爲めに多忙なりしの意なること勿論なりとす。

世道人心の爲めにす

されど、後に及びても、或は猶ほ第一の目的の爲めに、勿皇として周遊しつゝありやと疑ひしものありしと見え、

微生畝、孔子に謂うて曰はく、丘、何すれぞ是れ栖ゝたるものか、乃ち佞を爲すなからんか。(憲問)

と問へるが如きは、時人が孔子に對する這般の疑惑を代表するもの也、栖ゝとは皇とと同じく、一時も靜處することなきの意なり。微生畝の如き、世道人心に意なき隱栖者流より見れば、孔子が皇ととして天下を遍歴するは、世に諂らひて用ゐられんことを思ふものならずやと猜せしと見ゆ。孔子此の時之れに對へて敢て佞を爲すに非ざる也、固を疾む也。(同上)

といへり、『固を疾む也』一語、以て孔子が民衆教化の本志を窺ふに足るべし。固とは固陋なり、頑固なり、孔子は民心の固なるを開通し、道義の絶えたるを紹ぎ倫常の廢れたるを興し、世道人心を救濟すべく周流したりし也。固より前に云ふ如く、宗教的教祖と其の義を異にするが故に、進んで其の道を宣布するとは少しく其の途を同じくせざれど、到る處來りて其の政を問はるゝに答へ(學而)又如

何なる人にも接見して之れに教えたること屢見えたるが如き、亦其の救世濟民的活動の一端ならずとせず。

熱誠なる救濟

當時、世の澆季なるを見、其の濁濁を避けたる隱遯者流の如きは、微生畝の如く孔子を誤解せるものもあり、又或は孔子を以て、到底能はざるものを強いて爲さんとするものなりと以爲ひしものもありしと見えしか、

子路石門に宿る。石門の晨門門番と云ふ意曰はく、いづれよりする。子路曰はく、孔氏よりす。曰はく、是れ其の不可なるを知りて而して之れを爲す者か。(憲問)と評し去るものもありき。若しくは、莊子に出でし子貢と爲圃者との問答の如き、

圃を爲るものいはく、子は奚するものぞや。曰はく、孔丘の徒也と。圃を爲るものいはく、子は夫れ博學以て聖に擬し、こゝに以て衆を蓋ひ、獨り哀歌を絃して、以て名聲を天下に賣るものか。(天地篇)

とて名を賣るに過ぎずとなせるものもありき。晨門者、爲圃者莊子の言若しは事實とすればは蓋し當時の一哲人、世を避けて賤職を守る者か。凡そ隱遯者流は、其知多くは人

より秀で、其の情亦憐れむべきものありと雖も、意志の強からざるが爲めに然るものなるが、前の微生畝の如き、此の晨門者の如き、亦然らざるはなし。孔子の周遊に對して這般の疑問を狭むもの多く、亦當時隱者少なからざりしを見れば、孔子の時、世道人心の澆季甚しかりしと、孔子が之れを救濟せんとせる活動の、甚だ目ざましく、識者の耳目を聳動せしものあるを見るに足る也。下の如き一話も亦之れを證す。

子磬を衛に撃つ。糞を荷ひて孔氏の門を過ぐるものあり、曰はく、心ある哉、磬を撃つや。既にして曰はく、鄙なるかな、磬と乎、己れを知るなき也、斯れ已まんのみ矣、深<sup>世</sup>を<sup>水</sup>に<sup>云</sup>ふ<sup>に</sup>ければ<sup>則</sup>ち<sup>厲</sup>む<sup>石</sup>を<sup>積</sup>し、<sup>淺</sup>ければ<sup>則</sup>ち<sup>掲</sup>て<sup>衣</sup>を<sup>掲</sup>げ<sup>ん</sup>也と。子曰はく、果なるかな、之れ難きことなき也。(憲問)

是れ亦一の隱栖者、既に孔子の志を知り、磬を撃つのを聞くに託し、世を救ひ時を教ふる志の熾烈なるを傷み、世と浮沈して之れに處するを上策とせんと評したる也。而して孔子は之れに答へて、いかにも思ひ切りよき説にして、亦甚だ容易なることなれど、吾れは能はざるなりといへる也。孔子が斯道の爲めに盡瘁

絶つ  
仕途に

せしの如何に熱誠なりしやを知るべし。

遍歴中の孔子につきては、其の遭遇せし種々の事實の記すべきもの少なからずと雖も、其の事業と相渉るものを索むれば、上來略之れを盡くしたり。尙ほ一事のいふべきは、孔子が官仕に對するの念也。

一再いふが如く、其の經世濟民の理想は、政教を施すの任に當りて始めて實現さるべきが故に、魯に失敗せる後も、何れの處にか擧げて我れに任ずるの明主を得んと求めたりき。されど出處進退の正しからんことは其の本領なるが故に、

衛に於いて顔雝由に主る。彌子の妻は子路の妻と兄弟なり、彌子、子路に謂うて曰はく、孔子我れに主らば、衛の卿得べき也と、子路以て告ぐ。孔子曰はく、命也。(孟子萬章上)

とて、勢家によりて利達を求めんとはせざりし。佛肸の召に應せんとせしが如きは、素より其の心にあらす。子路曰はく、昔者、由やこれを夫子に聞く、曰はく、親

ら其の身に於いて不善を爲すものは、君子入らざる也と、佛胼、中牟を以て畔く子の往くや之れを如何。子曰はく、然り、是の言あり、堅を曰はずや、磨して礪せず、白を曰はずや、涅して緇ます、吾れ豈匏瓜ならんや、焉んぞ能く繫りて食はざらんや。(陽貨)

正面より解すれば、吾れ豈に不善者に仕ふるも不善に浸漸せんや、吾れ衣食に窮せり、出で、仕へんといへるが如くなるも、其の竟に仕へざりしと、匏瓜を以て喩となすが如きとより見る、一時の戯言なりしは極めて明か也。

されば孔子は孟子(萬章下)が言へる如く、其の道の行はるべき所謂見行可の仕は魯にありしときのみにて、衛に在りて、始めて靈公に際可の仕禮を以て接遇をなし、後に孝公に奉養の仕賢を養をなせしのみ、何れに於いても竟に仕ふることなく、亦用ゐらるゝことなかりし也。

孔子は竟に全く意を仕途に絶てり。

子、川上に在り、曰はく、逝くものは斯くの如きかな、晝夜を舍てず。(子罕)とて歲月流るゝが如きを悲しみ、又

鳳凰至らず、河圖を出さず、吾れ已みぬるかな。(同上)として明君なきを嘆じたり。而して竟に其の心を教育事業に専らにするに至れる也。孔子の面目は此に於いて却て張り、其の事功は此に於いて寧ろ擧れり。

### 第三章 孔子の教育的事業

#### 第一節 孔門の教育概説

一黨の師

孔子の事業は其の教育に於いて最も見るべし。其の教育的感化は其の門に及べるものを通じて以て今に及べり、恐らく永劫猶ほ其の力あらん。

孔門の教育は、孔子が陳より魯に歸りて大に振へり。孔子が經世濟民の志を擲ちて、天下の心を絶ち、自ら一黨の師を以て居らんと決意せるは、陳に在りてなりき。

子、陳に在り、曰はく、歸らんか、歸らんか、吾が黨の小子、狂簡斐然として章を成す

孔子の教育的事業

も、之れを裁する所以を知らず。(公冶長)

といへる、是れ也。孟子(盡心下)にも亦此の語見ゆ。こゝに『黨』とは郷黨の意なり、周の制、『五家を比となし、五比を閭となし、四閭を族となし、五族を黨となす』(周禮大司徒)ものなれば、黨とは僅に五百家の一小村なり。周禮にいへる此の制度が果して行はれしや、家戸の區別は斯くまで密なりしや、縦ひ行はれ又密なりしとするも、世降りて制度も緩み、人口並びに戸別の増殖は、周初と迢かに徑庭あるべければ、一黨の戸數の幾許なりしやを想像せんは、愚に近ければ措くとして要するに、孔子は自ら大教育家を以て居るに非ずして、一黨の師、一小部落の先生を以て甘んせんとせしに似たり。是れ固より必らずしも孔子の眞意にはあらず。天下民衆の救済に失敗して、一黨小子の師範たるに歸安せんといふ所、孔子無量の感慨味ふべきものあるを看取し得。

されど、舊夢に戀ふとして、め、しくも之れを繰りかへさんものにはあらず。斷然此くの如く決心したる後は、新生命の拓かれ、新境遇に入りたるが如く、寧ろ心地のすがくしきを覺えたりけん。況んや、孔子此の時、年已に六十九、斯の非

教育家たる  
決心

常なる偉人は、其の心身の康健、亦凡に超ゆるものありしとはいへ、最早や經世濟民の業を以て、其の養ふ所の兒曹に付與せしならん。

篤く信じて學を好み、死を守りて道を善くす。危邦には入らじ、亂邦には居ら

じ。(泰伯)

と表白せしも亦此の時ならんか。斯くて、

(子罕)

吾れ其の臣の手に死せんよりは、寧ろ二三子の手に死せんか。とて位高く家富み、數多の執事や家臣を置きて、其の煩はしき擁護を受けんよりは、門人二三子の周到懇篤なる介抱の下に死なんのみといへる(但し此に臣といへるは、孔子の病の爲めに、其の官位なきを患ひて、子路が家臣を假設せんとせるに對しての事なれど)全然意を仕途に絶ちて、身を終はるまで育英の事に従はんとの半平たる決心を窺ふべき也。

又曾ては、『活らん哉、活らん哉』(子罕)といひ、官仕を求むるに是れ急に、周公を

以て私かに自ら期せしが、其の後に及びては、

甚しいかな、吾が衰へたるや。久し矣、吾れ復夢に周公を見ざることを。(述而)

の嘆あるに至れり。蓋し衰へたるに非ず、王道の政治家たるを以て居れる曩日の孔子は、常に周公を夢想せしも、純粹なる教育家たるに安んせる今の孔子は、既に周公を去りて、竊かに我が老彭に比せし也。

述べて作らず、信じて古を好む。竊かに我が老彭に比す。(述而)

といへる是れ也。老彭とは如何なる人なりしやといふに、大戴禮に、

子曰はく、昔し商の老彭、及び仲傀、政は之れを大夫に教へ、官は之れを士に教へ、技は之れを庶人に教へ、揚ぐれば則ち抑へ、抑ふれば則ち揚げ、綴るに徳行を以てし、任ずるに言を以せず。(虞戴徳篇)

と見ゆれば、老彭は殷の時代の一大教育家なりしなるべし。斯くて孔子は、教育を以て自家の終生を寄與すべき天職なり、生命なりと信じたる也。

されど教育に終始せんと念は、陳に在りて突如として浮び出でたるにはあらず、寧ろ宿昔の志なりしといふも可。老彭に比する言も、其の頽齡に及びて後のものにはあらずらん。荀子に、

孔子曰はく、幼にして學を疆むる能はず、老いて以て之れを教ふるなき、吾れ之

教育に對する  
年來の志

れを耻づ。(天略篇)

と見ゆ。何時の頃の言なるやは明かならねど、學者が人に教ふるは、其の當然なる義務なりとの感想は、或は夙に之れを抱き居りしならん。又顔淵季路の侍して各、其の志を言へるに對して、孔子は自己の所懐を述べて、

老者は之れに安んじ、朋友は之れを信じ、少者は之れに懐かん。(公治長)

といへる、活動せる政治家的抱負にあらずして、誠實なる教育家的志望たり。此の時の子路の言を味ふに、彼れ猶ほ雄心勃々、壯志滿々たる孔門の一書生にして、未だ官途に就かざりしときなるらしければ、孔子が天下周遊の行を啓かざりし以前、其の魯に在りし頃と思はる。孔子が子路を推薦して季氏の宰たらしめしは、孔子が政策を實行せんが爲めの準備なりし不幸にして、此の政策の實行を見ざれば、孔子は孔子挂冠の一因にして、此れより魯を去りて天下周遊の行に就けるなり。教育家たらんとする希圖が、頗る早くより兆し居りしは、想像されざるにあらず。而して、實際に於いても、其の家門に教鞭を執りしは、壯歳の頃よりなりき。

天下を周遊すること十四年、此の間孔子が常に子弟を伴ひしは、行路の上、驛旅の中、屢、其の子弟と問答せるもの、論語に少なからず之れを載せたるにても明か



なり。而かも、孔子が門人を有せしは、之れより夙やきく以前なりき。史記にいはく、

孔子年十七、魯の大夫孟釐子、病みて且に死せんとするとき、其の嗣懿子に誠しめて曰はく、孔丘は聖人の後、中略今孔丘、年少にして禮を好む、其れ達するものか。吾れ即歿せば、若必らず之れを師とせよと。釐子卒するに及び、孟懿子魯人南宮敬叔と、往きて禮を學ぶ。(孔子世家)

此の文に従へば、孔子は生年纔に十七にして、名當世に聞へ、既に人の師となりし也。若し之れを事實とすれば、孔子傳中の一有趣事たるを失はず。されど、是れ司馬遷が左氏の文を読み謬まりたるものなるを如何にせん。左傳の本文に、孟僖子禮を相する能はざるを病む。病不能相禮。乃ち之れを講學し、苟くも禮を能くする者は之れに従ふ。其の將に死せんとするに及び、其の大夫を召して曰はく、中略吾れ聞く、將に達者あらんとす、孔丘といふ、聖人の後也、中略我れ若し歿するを獲ば、必らず説と何忌とを夫子に屬し、之れに事へて禮を學ばしめ、以て其の位を定めよと。故に孟懿子、南宮敬叔と、仲尼に師事す。(昭公七

年の條

とあり、茲に「病不能相禮」の「病」は、疾病の意に非ずして、困病の義なり、「病みて禮を相する能はず」と遷は解したるも、病字に句すべからざるは、文意最も明白。孟僖子の死は昭公二十四年、即ちこれより十七年の後なり、左氏の此の文は、左傳の中に毎に見る所の例の如く、茲に禮を知らざりしことに因みて、後年の事を先づ叙したる也。此の事は、司馬貞既に之れを看破して、

昭七年、左傳に云ふ、孟僖子禮を相する能はざるを病み、乃ち之れを講學す、其の將に死せんとするに及び、大夫を召し云々と。按ずるに、病と謂ふは、禮を能くせざるを病となすなり、疾に非ざる也、困の謂ひ也。二十四年に至り、僖子卒す、賈逵云ふ、仲尼時に年三十五と、是れ此の文誤れる也。(史記索隱)

といへる、當れり。されば、孟懿子等が入門したるは、孔子が十七歳の時にあらずして、三十五歳のときなること明か也。

然るに、孔子の門人は此の孟懿子等を以て首となすにはあらず、此の以前既に子弟の教育に當り居れりしは確實也。禮記檀弓の文に、孔子が其の父母を防に

合葬せしとき、門人ありしことを記せども、其の何年なるやは、明確にあらず。左傳昭公二十年の條に、衛の齊豹亂を作し、靈公の兄公孟を殺し、宗魯之れに殉せしとき、琴張往きて宗魯を弔せんとせしに、孔子之れを制止せるの言見ゆ。

仲尼曰はく、齊豹の盜にして、孟縶子の賊なる、女何ぞ弔せん、君子は姦に食せず、亂を受けず、利の爲めに回を疚しくせず、回を以て人を待たず、不義を蓋はず、非禮を犯さず。

嚴として師の弟子に教ふる也。琴張此の時既に孔子に師事せし也。是れ傳文に見ゆる孔子最初の門弟子也。史記に、

孔子周より魯に反り、弟子稍益進む。是のときや、中略魯の昭公の二十年、而して孔子蓋し年三十なり矣。(孔子世家)

とあり、史記は孔子が襄公二十二年に生れたるの説を探れると、公二十一年は喪るが如し、且つ其の周に之きし年は、學者異論あると、孔子が周に之きは昭公の故に、三十歳のとき、弟子漸やく多きを加へたりとの此の文は、其のまゝに信憑するを得ざれども、琴張既に師事せしこと明白なる昭公二十年は、孔子三十一歳なる

と、孔子自ら三十にして自立の成境に達せしを明言せるとより見れば、此の前後に於いて子弟の入門を許せしならん。而して其の三十五歳のとき、孟縶子の如き高官者が、遺命して其の二子を入門せしめたるは、孔子の名聲既に稍やく高かりしを知ると共に、之れによりて又いよ／＼高きを加へしめたるならん。

後、一たび齊に行き、用ゐられんとして成らず、幾ばくもなくして魯に歸れり、陽虎陪臣を以て國政を專にする(定公六年)に及び、孔子は意を時務に斷ちて、心を其の家塾に濺げり、弟子益多かりき。史記に、

是を以て、魯は大夫より以下、皆偕して正道を離る。故に孔子仕へず、退いて詩書禮樂を修め、弟子彌多し。遠方より至りて、業を受けざるなし。(孔子世家)といふもの、蓋し事實ならん。

其後陽虎敗れてより、孔子一たび用ゐられて司寇となれり。定公八年より同じく十三年までとすれば、通じて六年に涉れり。此の仕官の間、家塾の教育を如何にせしやは、記傳の徴すべきなし。たゞ、荀子に、

孔子魯の攝政となり、七日にして少正卯を誅す。門人進み問うて曰はく、夫の

少正卯は魯の聞人也、夫子政を爲して、始めて之れを誅す、失なきを得るか。孔子曰はく、居れ、吾れ汝に其の故を語らん。以下略(宥坐篇)

とあり、孔子が攝政たりしことは信じ易からざるも、此の説話は、一面に於いて、孔子が官任の間亦門人ありて、公餘猶ほ其の徒に授けしを語るもの也。

一たび魯に用ゐられしも、未だ多く材力を試み、實蹟を擧ぐるを得るに及びずして、定公十三年、魯を出で、衛に行き、宋を過ぎ、更らに天下を周遊する十四歳、哀公十一年復び魯に歸りしまで、常に門弟を率ゐ、機に臨み事に應じ時に觸れて、少しも教育を怠らざりき。其の困苦に處して、師弟常に篤よの情ありしは、授受の語録具さに之れを語る。師弟の道地に墜ち、教を賣り學を買ひ、行路相見て相知らざる當今の教育界より見れば、誠に驚嘆に勝へざるものあり。陳より魯に歸り専心教育に従事し、以て死に及べり。

孔子の門に入りて教育を受けしもの、前後其の數甚だ多し、而して成業のもの亦少なからず。史記には、

孔子詩書禮樂を以て教ふ、弟子蓋し三千。身六藝に通ずるもの、七十有二人。

三千の弟子  
と其の異論

(孔子世家)

といへり。崔述は此の三千の數につきて異論を狹み、弟子は七十人に止まれりとなせり。其の説にいはく、

世家にいふ、孔子詩書禮樂を以て教ふ、弟子蓋し三千、身六藝に通ずるもの七十有二人と。余案するに、孟子はたゞ七十子といふ、則ち是れ孔子の門人、七十子に止まる也、孔子の弟子、安くんぞ能く三千の多きあらん、必らず後人の之れを奢言せる也。且つ漢人稱する所の六藝は、即ち今の六經、周官の禮樂射御書數の六藝に非ざる也。孔子晩年始めて春秋を作る、而して易道深遠、聖人亦輕しく以て人に示さず、其の言未だ信するに足らず。(溼潤考信錄卷四)

三千人の多き、或は少しく奢言せるの嫌なからずと雖も、孟子の言のみを以て之れを否定せんは、其證餘りに薄弱也。孟子の所謂七十子は、孔門の全書生を指したるに非ざるや、極めて明白也。現に種々の説話は、其の頗る多數なりしを示せり。

南郭惠子、子貢に問うて曰はく、夫子の門、何ぞ其れ雜なるや。子貢曰はく、君子

門人の頗る  
多數なりし  
説話

身を正しうして以て俟つ、來らんと欲するもの距てず、去らんと欲するものは止めず、且つ夫れ良醫の門、病人多く、藥活の側、柱木多し、是れを以て雜なるなりと。(荀子法行篇)

の如きは、去來出入せる門人の甚だ少なからざりしを想像せしむ。尙書大傳の中に、之れと大同小異の文あり。又後世に残存せる左の傳説の如き、家營の中、樹百を以て數ふ、皆種を異にす、魯人世に能く其の樹に名づくるものなし。傳へ言ふ、孔子の弟子、國を異にする人、各其の方樹を持して、來りて之を種ふ、其の樹、柞、粉、雄雌、女貞、五味、錢榿の樹。(孫奭疏の孟子正義、滕文公上、弟子服喪三年の條)

多數の門人が、四方の異郷より來集せし狀を想見せしむるものあり。且つ大戴禮に、文子子貢に問ふの語中、

蓋し室に入り、堂に昇る、七十餘人。(衛將軍文子篇)

とあるは、七十子以外多數の門人あり、其の秀拔なりしもの七十餘人なるを證するに足る。假りに孔子が三十歳始めて人に教へしとし、其の死の七十四歳に至

るまで、帷を下せしこと四十五年、此の長き教育の日子を以て、受教僅に七十餘人にして足るべけんや。

大成せる七十餘人

而して斯かる多數の門人の中、其の成績によりて、大略三階級に分ち得べし。子貢の言に

夫子の門、蓋し三就。(同上)

とあり、廬辨の註に、三就とは大成、次成、小成なりとあるは從ふべし。此の大成せるもの、即ち七十餘人なり。而るに其の數につきては三説あり、其の一は七十人とするものにて、孟子是れ也。

七十子の孔子に服するが如き也。(孟子公孫丑上)

其の二は七十二人とするものにて、前に擧げたる史記孔子世家中の文なり。其の三は七十七人説にして、同じく史記に見ゆ。

孔子曰はく、業を受け、身通するもの、七十有七人。(仲尼弟子列傳)

思ふに、孟子の所謂七十子は、必らずしも正に七十人と限れるにあらずして、單に大數を擧げたるものなるべく、而して七十七人につきては、史記列傳、其の三十五

人は事蹟を記し、其の四十二人は其の名を擧げ、且つ列傳の終りに、弟子籍は孔氏の古文に出づ、是なるに近し。(太史公贊)

と云ひ、其の史料の依據すべきを明かにしたれば、確實なる反證なき限り、此の説を取るべしとせん。たゞ怪しむべきは、斯程までに信據せる司馬遷が、孔子世家の中には、七十二人となせること是れなりとす。如何にても宜しき様の事なれども、孔門最も大切なる畢業生とも見らるべき人となれば、確かなる其の員數なりとも、定め置きなければとて。

以上は、孔子が教育と終始せる事蹟の敘述なり。次ぎに孔門教育の狀態を觀察せん。

孔門教育の綱領

孔門の塾則とも見るべきもの、史記頗る要を掲ぐ。いはく、詩書禮樂を以て弟子を教ふ、中略業を受くるもの甚だ多し。孔子四を以て教ふ、文、行、忠、信。四を絶つ、意なかれ、固なかれ、我なかれ。中略憤せずんば啓かず、一隅を擧げて、三隅を以て反せずんば、則ち復せざる也。(孔子世家) 即ち之れを條擧すれば左の如し。

(一)詩書禮樂は孔門の教科なること

(二)文行忠信は知育徳育の宗旨なること

(三)絶四は訓育の方針なること

(四)憤啓は教授の原則なること

第一と第四とは別に説く所あるが故に、今たゞ四教と絶四とを解釋せんに、これを以て孔門教育の二大綱領として掲げたるは、實に司馬遷の活眼にして、敬服に堪へたり。如何にも論語中の此の二語は、孔門教育の綱領なりしと見ゆ。

四教の教育

子、四を以て教ふ、文行忠信。(述而)

此の解古來一定せず、仁齋の論語古義により、故蟹江博士が、曾子三省の語を参照し、以て孔氏家塾の學則となせるは、少しく巧に過ぎたり。況んや曾子の『傳不習乎』は、朱解の『傳へて習はざる乎』よりも、寧ろ古義の『習はざるを傳ふるか』となすを可なりとなすに於いてをや。此の語後章に又且つ之れを孔門の學則と云はんよりも、寧ろ孔子の教育を總括したりと見るの當れるに如かず。

此の解、著者別に一説あり、試みに耻を冒して大方の教を請はん。思ふに古來の

解釋は悉く『四を教ふ』にして、『四を以て教ふ』にあらず。孔子は四を以て教へし也、四を教へしにはあらず。文を教へ、行を教へ、忠を教へ、信を教ふるにあらずして、文を以て教へ、行を以て教へ、忠を以て教へ、信を以て教へたる也。例へば、道義を教ふるも、道義を以て教ふとは、大に其の義を異にするが如し。道義を教ふとは、讀んで其の言の如く道義のみを教ふる也。道義を以て教ふとは、一切の教育、皆道義を宗とする也。是れ最も見易く、自ら平易穩當なりと信する所に於て、古來殆んど一人の、此の『以』字に思ひ及ばざりしは大に怪むべき也。文行忠信とは、邢昺の解せる、

文は先王の遺文を謂ふ。行は徳行を謂ふ。心に在るを徳となし、之れを施すを行となす。中心隠なき、之れを忠と謂ふ。人言欺かざる、之れを信と謂ふ。

を可とせん。されば、文を以て教ふとは、今の所謂教科にあらずして教材の意に近し。詩書其他の經典を取り、之れを教ふるにあらずして、之れを以て教へ、文化道徳及びあらゆる教ふべきもの、皆之れを材とし教ふることも也。更らに一例を擧ぐれば、『教育勅語を教ふ』といふこと、『教育勅語を以て教ふ』といふこ

とは、教育上峻厳に區別されざるべからざるが如し。行を以て教ふとは、自ら示すことも、門生を率ゐるに行事を以てする也、現示的教授と示範的訓練と是れ也。若し『行を教ふ』となさば、殆んど何等の意義なし。忠を以て教へ、信を以て教ふとは、孔子が門人に對して、教授し、訓練し、及び總べての教育的動作を行ふに當り、必然現はれ來る所にして、熱實、眞率、親切、懇篤、周到、誠惻なりしを云ふものにあらずや。

此の四を以てせる教化は、之れを顔子と對照して更らに妙なるを覺ゆ。顔子が孔子より受けたる教育を回想して、

我れを博うするに文を以てし、我を約するに禮を以てす。(子罕)  
といへる、又此の最も孔門教育の精髓を得たる顔子を評して子貢のいへる、  
夙に興き夜はに寢ね、諷誦、禮を崇うし、行、過ちを貳びせず、言を稱して苟くもせざる、是れ顔淵の行也。(大戴禮衛將軍文子篇)

の如き、文行忠信的教育の、人に入ること甚だ深きを想はしめずんばあらず。  
次に絶四の意義は何如。

子四を絶つ、意する毋かれ、必ずる毋かれ、固する毋かれ、我する毋かれ。(子罕)  
従来諸家の註疏、多くは之れを孔子の性格に解したり。即ち我が邦文にては、意するなく、必ずるなく、固するなく、我するなしとやうに訓讀する也。されど余は之れを孔門の塾則と見んと欲す。『絶』は自ら絶つ、の意に非ずして、禁絶の義也。他をして然らしめざる也。門人に對して、禁止し警戒したる也。『毋』字、古へ『無』字と通用せざるにあらざるも、寧ろ『勿』と同じく、單に否定辭たることあると共に、多くは命令禁止の意を含む。説文に『毋は止むるの詞』とあり、亦禁止するの意なり。孔子の完全なる性格として、自ら之れを絶ちしは勿論なりと雖も、孔門之れを掲げて之れを禁絶せしものと見るを當れりとす。儀禮郷射禮賈公彦の疏に、

孔子云ふ、必ずるなかれ、固するなかれ、我するなかれ。

とあり、又同じく士昏禮の疏にも、『義は孔子の必ずるなかれ、固するなかれ、の言に取る』とあり、共に孔子の言となせるも、其の出處明かならざるが故に、容易に首肯し難き也。但し既に孔子の言とすれば、性格的、説明的、言辭にあらす即ち意するなく、云々にあらすして、禁止的、警戒的、即ち意するなかれ云々の義なるは明白

なり。孔門の條規として、孔子の定めたるものなることは想像せらる。而して意とす。必、固、我の意義につきては、諸家各、解説ありと雖も、要するに、『意』は任意放縱の義ならん、『必』は熟せざるの意志を保持することならん、固は正しからざるの意志を固執することならん、我は我執の意ならん。皆完全ならざる意志の發動を禁止するものにして、孔門訓育の主旨を窺ふに足る。著者の大學に在りしとき、遂に根本先生の論語に參するを得ざりしも、頃日其の某氏の爲にせられたる筆記の公刊されたるを見るに、絶四は孔子自ら絶つにあらすして、他を禁絶するの義に解せらる、先師の是認を得たるの感なくんばあらず。

孔子は何人をも教化するの熱心と誠意とありき。されど其の門に入るを許して教育せんが爲めには、入門の禮なかるべからざりき。

束脩を行ふより以上、吾れ未だ嘗て誨ふるなくんばあらず。(述而)  
蓋し如何に教育者に誠意と熱心とありとも、被教育者に於いても自ら教育を受くるの誠意と熱心となければ、教育者の努力は徒勞に歸すべければ也。而して束脩の禮は、即ち被教育者が請教の誠意と熱心とを表示するものなればなり。

一旦師弟となれば、其の關係は宛も主僕の如きものあり、子、衛に適きしとき、冉有僕たりき(子路)、又孔子出でしとき、樊遲御たりしことあり(爲政)。又父子の關係の如きあり、下の一例は之れを證す。

孔子の喪、門人服す所を疑ふ。子貢曰はく、昔者夫子の顔淵に喪する、子に喪するが如くにして服なかりし。子路に喪するも亦然りし。諸子、夫子に喪する父に喪するが如くにして服なからんと。(禮記檀弓上)

又既に業を率へて門を出でたる後も、師弟の關係は猶ほ永續したり。顔淵は其の一生孔子に近接したれば、毎に教を請ひしなるべけれど、子路は遠く出で、官にありき、而かも其の戰死するや、孔子は之れが爲めに子弟の喪に服せり。又子游は武城の宰となり、猶ほ孔子の教を受け(雍也)、冉子は朝より退きて、時に孔門に入れり(子路)。官任にあるもの、猶ほ毎に孔門に出入せしこと知らる。斯くの如く、師弟の關係は單に家塾に在りし間のみに限られざるが故に、既に其の門を出でたるものに對しても、其の失行に當りては、破門に類する教罰を以て之れを律せんとせることもありき。

季氏周公より富む。而して求や之れが爲めに聚斂して之れを附益す。子曰はく、吾が徒に非ざる也、小子、鼓を鳴らして之れを攻めて可也。(先進)の如き是れ也。

師弟の禮甚だ嚴なると共に、師弟相愛するの至情は、頗る掬すべきものあり。子、匡に畏れしとき、顔淵後る。子曰はく、吾れ女を以て死せりと爲せり矣。曰はく、子いませり、何ぞ敢て死せん。(先進)

子、南子を見る、子路説ひず。夫子之れに矢かひて曰はく、子が否む所は、天之れを厭ふ、天之れを厭ふ。(雍也)

の如き、師弟相愛の赤心は、長く惻々として人の心を動かすものあるを覺ゆ。顔淵子路の二人は、孔子の最も愛する高弟なりしが故に、其の然るべきは固よりなりとするも、

昔者、孔子の歿する、三年の外門人任を治めて、將に歸らんとせしとき、入りて子貢に揖し、相嚮ひて哭き、皆聲を失す。然らして後に歸る。子貢反りて屋を場に築き、獨り居ること三年、然らして後に歸る。(孟子滕文公上)



の如き、衆子弟の孔子に心服せしこと、殆んど驚くべきものあり。偉大なる人格より出づる熱誠なる教化が、人を歸服せしむること、嗚呼亦何を深きや。孟子が徳を以て人を服するものは、中心悦びて誠に服する也。七十子の孔子に服するが如き也。(公孫丑上)

四科の後秀

といへる、大に當れり。孔門は大體に於いて一樣の教育を施すと雖も、各、其の所長により、専門的發達を成すに任せたるが如し。嘗て陳蔡の間に隨ひたるものを追懐し、其の所長を評していはく、

德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には宰我、子貢。政事には冉有、季路。

文學には子游、子夏。(先進)

殊に此の顔淵、冉の德行と、宰我、子貢の言語とは、有名なりしものと見え、孟子にも公孫丑の言に、

宰我、子貢、善く説辭を爲し、冉牛、閔子、顔淵、善く徳行を言ふ。(公孫丑上)

と見ゆ。孔子が茲に四つに分ちて云へるより、後世或は誤まりて、德行言語政事

孔門の教材  
詩書禮樂

文學を以て、孔門の四専門學科と爲すものあるに至れり。されどこは唯嘗て艱難を共にせる弟子中に、つきて、其の所長の傾向を擧げたるに過ぎざるのみ。孔門の教材は詩書禮樂なりしことは、既に言ふ所の如し。其の教育的意義は後篇史記に『身六藝に通ずる者七十有二人』とありて、六藝が孔門の教科なりしが如く見ゆるも、周禮に謂ふ所の禮樂射御書數の六藝は總べて孔門の教科なりしとは見え、又、漢の六藝即ち六經とすれば、前に擧げたる崔述の非難は至當なり但し孔子のとき六藝又は六經とは云はざるも六經は孔子の述刪に成りたるものなれば、孔門の諸弟の中悉く六經の一切に通ずるものはなかりしも一藝一科に秀拔なるものはあり、後世の經說專門家の孔門の教材及び教科につきては、左の一文の如きは最も参考すべし。

衛將軍文子、子貢に問うて曰はく、吾れ聞く、夫子の教を施すや、先づ詩世を以てす。世とは歴史のことなり、次ぎに引く所の國語の文中に見ゆ道は孝悌、之れに説くに義を以てし、諸體を觀、禮也。禮とは之れを成すに文徳を以てす。(大戴禮、衛將軍文子篇)

こゝに樂といはざるも、詩と樂とは相離れざりしが故に、併せ見らるべく、詩書禮

樂が孔門の教材及び教科たりしこと知らる。尙ほ此の事は當時の高等教育の例制にも参照されうべし。禮記に

詩書禮樂、以て士を造す。(王制)

とあり、又國語に楚の莊王の太子箴の傅、士亶の間に答へて、當時の賢大夫申叔時が、教材と其の教育的價值を述べし條に、

之れに春秋を教へ、而して之れが爲めに善を聳たかうして惡を抑へ、以て其の心を戒勸す。之れに世を教へ、而して之れが爲めに明德を昭かにし、而して幽昏を廢し、以て其の動を休懼す。之れに詩を教へ、而して之れが爲めに顯徳を道廣し、以て其の志を耀明す。之れに禮を教へ、上下の則を知らしめ、之れに樂を教へ、以て其の穢を疏し、而して其の浮を鎮む。之れに令を教へて物官を訪はしめ、之れに語を教へて、其の徳を明にし、而して先王の務めを知り、明德を民に用ゐしむ。之れに故志を教へ、廢興するものを知りて戒懼せしめ、之れに訓典を教へ、族類を知り、比義を行はしむ。(楚語上)

とあり、此れには精細に、春秋孔子の春秋にはあらず孔子以前に解、詩、禮、樂、令現行の法律、類の類とあり、

語古聖賢の格言を、故志土地や制度等の舊志、訓典尙書の典謨等のの九を挙げたるも、略して詩書禮樂といふも亦妨げなし。孔子の博學なる、教ふる所、詩書禮樂の四のみに止まるべくもあらず、是れ只大目を挙げたりとなさば可也。又列子に孔子が顔回に告ぐる語として、

魯の君臣、日に其の序を失し、仁義益衰へ、情性益薄く、此の道、一國と當年とに行はれず、其れ天下と來生とを如何ん。吾れ始めて詩書禮樂の治亂に救ふなきを知り、而して未だ之れを革たむる所以の方を知らず、此れ天を樂しみ、命を知るもの、憂ふる所。然りと雖も、吾れ之れを得たり矣。夫れ樂しみて知るものは、古人の所謂樂知に非ざる也。樂しむなく知るなき、是れ眞の樂、眞の知。故に樂しまざる所なく、知らざる所なく、憂ひざる所なく、爲さざる所なし。詩書禮樂、何の樂つることか之れあらん、之れを革たむる何をか爲さん。(仲尼篇)とあり、其の説頗る列子の臭味ありと雖も、孔門、詩書禮樂を尙びしことは知り得らる。

詩書禮樂、更らに約すれば文と禮と也。禮樂を稱して『文』といふことなき

にあらねど、文と禮とを分ち言ふときは、文とは所謂先王の遺文にして、詩書是れ也。樂は詩と共に一なることあり、禮と共に合することあり、若し文と禮とに分てば、禮とは禮樂の總稱とも見らる。文は寧ろ知育にして、禮は主として訓育也。顔子が『我れを博うするに文を以てし、我れを約するに禮を以てす』(子罕)といへる、又孔子自ら、

君子、文に博うし、之れを約するに禮を以てす。亦以て畔かざるべきかな。(雍也)

といへる、又孔子が其の子鯉に對して、『詩を學びたりや』といひ、後又『禮を學びたりや』といひ、詩と禮とを學ぶべきを教へたるが如き(季氏)以て其の意を見らるべし。されど最も重きを措けるは、いふまでもなく禮也。

孔子は幼時より最も禮を好めり、其の兒たりしときに、嬉戯常に俎豆を具へて禮容を設けたりとぞ(孔子世家)。又、壯歲既に禮に詳しきものとして名ありき、是れ前に引ける左傳昭七年の條、孟僖子が孔子につきて云へる所にて知らる。又此の條、孟僖子が其子孟懿子等をして、孔子に就きて學ばしめし目的も、禮を習ふ

最も禮を重んず

に在りし也、孔子自らも亦禮の専門家を以て居れり。其の孔文子に對して、

胡簋の事は、則ち嘗て之れを學べり矣、用兵の事は、未だ之れを聞かざる也。(左傳襄公十一年)

といひ、忽を命じて行りしが如き、又衛靈公に對して、

俎豆の事は、則ち嘗て之れを聞く、軍旅の事は、未だ之れを學ばざる也。(衛靈公)といひ、明日直ちに去りしが如き、潰武の不可なるに念ひ至らしめんとての事ながら、其の一言、其の一舉、如何にも見識あり、孔子の抱負の那邊に在るかを知るに足るべし。

孔子には春秋の如き自信深き大著作ありながら、又此の著作の完成は晩年の事なれば、其の未だ或は之れに著手せざりし時の言なるべしとはいひながら、其の本領の所謂『述べて作らず』にあるは、主として禮に在ること知るべし。何となれば、禮は古來社會上に自然に發生せるものにして、人は之れに依らざれば社會に在る能はず、又社會も之れなければ秩序を保ち安寧を維持する能はず、頗る威嚴あるものなるが故に、之れを以て古聖王の作る所とし、敢て自ら新に作り

出だすべきものにあらざとなす。禮記に、  
 禮やは、本に反り古を脩め、其の初を忘れざるもの也。中畧是の故に、先王の禮を  
 制するや、必らず主ある也。中畧故に述べて多く學ぶべき也。(禮器篇)  
 といへる併せ考ふべし。

孔子と時を同じくし、且つ共に相識りたる晏子が、景王の之れを用ゐんとする  
 に反對し、孔子及び孔門の教育を評して、

孔某、容を盛んにして脩飾し、以て世を蠱し、絃歌鼓舞、以て徒を聚め、登降を繁く  
 して、以て儀を示し、趨翔の節を務めて、以て衆に勸む。(墨子非儒篇)

といふ、『禮の以て國を爲むべきや久し矣』在傳昭公二十六年の條といひ、曾子は「  
晏子禮を知ると謂ふべきのみ」(禮記檀弓下)といひ、禮の尊むべきを解せる晏子  
も、一狐裘三年なりし其の儉素の質よりして、孔門餘りに禮を講ずるの繁瑣なる  
を厭ひしならん。予も亦禮記を讀み、特に曾子問篇に至り、曾子が爬羅剔抉、絶へ  
て無くして僅に有りうべき事態までも想像し、例へば、嫁入りの未だ家に至らざ  
るに、婿の父母死せば、縁女の喪服を如何せんとか、葬式の途中に口蝕に會はゞ如

講禮に過ぎ  
し弊

何にとか、彼れは如何、此れは如何と、眞率に極言すれば、頻りに愚問駄問を續發し  
 孔子は『善いかな問ひや』など、眞面目に之れに對ふる有様は、近時の法學書  
 生が、盛んに奇怪異常なる事件を想像して、其の擬律を研究するを得意とするよ  
 りも太甚しきを見て、孔門禮の討究の甚だ重んぜられしを知ると共に、晏子の批  
 評に同情し、過ぎたるは猶ほ及びざるが如きの感懐を懐かしむることあり。宜な  
 り、墨子が、孔門末流の禮に拘泥し、禮に藉口せし、痴態愚狀を描き出して餘蘊なき  
 や。其の一二を左に録す。

妻を取るとき身迎へ儒家の所謂祇禱して僕となり、轡を乗り綬を授け、嚴親を仰  
 ぐが如し。(非儒篇)

禮を繁飾し、以て人を淫し、久喪僞哀、以て親を謾す。命を立て貧を緩うし、本に  
 倍倍き末を棄て、而して怠傲に安んじ、飲食を貪り、作務を惰たり、飢寒に陥り、凍餒  
 に危うするも、以て之れには禮也之れと違ふなし。中畧君子之れを笑へば、怒りて曰  
 はく、散人焉くんぞ良儒を知らんと。(同上)

富人喪あれば、乃ち大に喜びて曰はく、此れ衣食の端なりと。(同上)

又孔子歿後孔門の教育を代表せし子張子夏子游の、其の又末輩が、形式的なる小禮末儀に拘泥せしことの如何に見苦しかりけん。同じく儒流を汲み、禮を尊重すること最も至れる荀子をして、左の言をなさしむるに至れり。

禹の如く行き、舜の如く趨る、是れ子張氏の賤儒也。其の衣冠を正しくし、其の顔色を齊へ、嗛然として終日言はず、是れ子夏氏の賤儒也。偷懦事を憚り、廉耻なく、飲食を嗜み、必らず君子と曰ひ、固より力を用ゐず、是れ子游氏の賤儒なり。(非十二子篇)

禮とは必らずしも威儀形容の末にあらず、而かも過ぎたるは竟に之れに趨る、畏るべきかな。

禮に次ぎては樂也、是れ晏子の評言中にも見る所の如し。詩と樂とは當時未だ離れざりしが故に、詩は其の字句を教ふると共に、之れを樂に上せしなり。いはゆる、

三百五篇、孔子皆之れを絃歌し、以て韶武雅頌の音に合せんことを求む。(史記孔子世家)

孔門洋たる樂聲

是れ也。樂は孔子頗る之れが趣味を解せしのみならず、自らも亦名手なりしと見え、樂に關する批評鑑識の言も論語中に散見す。されば、孔門には音樂の實習も亦之れありしと見え、樂に達せざるものは、孔門にては一の耻辱なりしが如し。武骨一偏なる子路の如き、相應には習熟する所ありしも、未だ名手の境には達せざりしと見え、

子曰はく、由の瑟、奚んぞ丘の門に於いてせん。門人子路を敬せず。子曰はく、由や堂に升る、未だ室に入らずと。(先進)

の逸話あり。子路、曾皙、冉有、公西華等が、孔子に侍して各其の志を言へるとき、孔子が、點、爾は何如と願みしに、哲が、

瑟を鼓する希、樂聲の有るか無きか、無聲爾として琴を捨て、作つ。作は(先進)

とあり、其の狀睹るが如し。想像す、孔門常に樂聲の洋とたるものありしを。列子に、

丘の門、絃歌誦書、終日輟まず。(仲尼篇)

と見ゆ、是れ當時、或るものは冷笑し、或るものは慳慳し、或るものは驚異し、或るも

多端なる教育

のは感嘆せし、樂聲常に絶えざる孔門教育の實狀なりしならん。

孔子の多藝多能博學なる、其教ふる所百般の事に亘りしは知らる。孔門の教孔子自らは軍旅の事は學ばざるなりと云へりしも、是れ衛靈孔文に對して禮を先きにすべきを諷したるにて、軍旅の事は知らざるにはあらず。

子の慎しむ所、齊戰疾。(述而)

といへり、戰事は慎しむ所にして、退くる所にあらず。現に冉有は孔子に軍旅の事をも學びたる也。冉有、齊と戰ふや、

季康子曰はく、子の軍旅に於ける、之れを學びたるか、之れを性にするかと。冉

有曰はく、之れを孔子に學べり。(史記孔子世家)

といふことあり。されば孔子は其門に、戰陣のことをも教へたりと見ゆ。

孔子が平生教ふる所は、多くは常識的なりしならん。

子罕れに利と命と仁とを言ふ。(子罕)

と見ゆ、利は動もすれば誤解を招き、命は出世間に涉り、仁は高遠なればならん。

論語に仁を言ふこと多きも、是れ皆高弟に告げし所にして、而して其の高弟も、罕

れに聞くを得しものを輯録したるものなるべく、四十年以上亘れる孔門教育の音動が一部の論語に集約されつゝあるを注意せざるべからず孔子は平生多く仁を言はざりしならん。又教化に益なきことは言はざりしならん。

子は怪力亂神を語らず。(述而)

通例、威儀禮制等、文彩あり形質あり、解し易く、行ひ易きものを先とし、哲學的純理的のことは少なかりしならん。

子貢曰はく、夫子の文章得て聞くべき也、夫子の性と天道とを言ふ、得て聞くべからざる也。(公冶長)

されど高等なる教育に至りては、所謂

下學にして上達す。(憲問)

にして、孔安國の説に、下學とは下、人事を學ぶことにて、上達とは上、天命を知るとあれば、姑らく之れに従ひ、上、天命を知るの境までも至りしならん。

高弟に對しては、主として天下を治むる所以を教へたり。是れ支那上古より思想たる、君師一職政教一致の觀念よりせると、孔子自家の本志が天下を治む

天下を治むる學術

るに在りしが爲めならん。是れ論語各篇屢見る所にして、一と擧ぐるまでもなし。一例を言へば、樊遲の如きは、孔門の逸足にはあらず、されど天下の政を以て之れに教へしことあり。

樊遲仁を問ふ。曰はく、人を愛す。曰はく、知を問ふ。曰はく、人を知る。樊遲未だ達せず。子曰はく、直きを擧げて、諸の枉れるを錯けば、能く枉れるものをして直からしむと。樊遲退き、子夏を見ていはく、郷也、吾れ夫子に見へて知を問ふ、子曰はく、直きを擧げて諸の枉れるを錯けば、能く枉れるものをして直からしむと、何の謂ぞや。子夏曰はく、富なる讒言や、舜天下を有ち、衆に選びて臯陶を擧げ、不仁者遠ざかる、湯天下を有ち、衆に選びて伊尹を擧げ、不仁者遠ざかる。(顔淵)

孔門に於ける這般の教育につき、顧炎武は學記の師やは、君たるを學ぶ也。

の語を結論とし、説をなして曰はく、

三代の世、凡そ民の俊秀なるもの、皆大學に入れ、而して之れに教ふるに國を治

め天下を平かにするの事を以てす。孔子の弟子に於けるや、四代の禮樂、以て顔淵に告げ、五至三無以て子夏に告ぐ。而して又曰はく、雍也南面せしむべしと。然らば則ち内にして聖、外にして王、異道なき也。中略故に曰はく、師やは君たるを學ぶ所以也。(日知錄卷六)

古へは教字學字と相通ず、學記は古語を引きたるものなるべければ、『君たるを學ぶ』とは、『君たるを教ふ』の意ならん。孔子が『南面せしむべし』といへる、即ち王たらしむべしとの意なれば、餘りに強き語にして、必らずしも君たるを教ふるにもあらざるべけれど、少なくとも、仕へて政治を施すの術なりしは明か也。元來、君たるを教ふといへるは、頗る不臣なる教育の如くなれども、聖人中心主義なる支那傳來の國家思想に在りては、君なるものは、責任を負はざるべからざる行政長官の類なれば、此の點亦參酌する所あるを要す。

孔子が成業者を當局に推薦して、

季康子問ふ、仲由政に従はしむべきや。子曰はく、由や果、政に従ふに於いて何かあらん。曰はく、賜や政に従はしむべきや。曰はく、賜や達、政に従ふに於いて

て何かあらん。曰はく、求や政に従はしむべきや、曰はく、求や藝、政に従ふに於いて何かあらん。(雍也)

といへる、又子夏が、

仕へて優なれば則ち學ぶ。學びて優なれば則ち仕ふ。(子張)

といへる、學ぶとは政治を學ぶ也、教學は官仕の準備なりとせんとしたるは、縦し孔子の教育は人格の完成に重きを措きたりしも、其の皮相の誤解は、遂に後世の支那教育をして、非常に弊竇に苦しましむるに至れるもの也。

後世孔廟の講堂を杏壇と稱す、是れ莊子に出づる所にして、其の外何等依る所ならず。莊子にいふ、

孔子淄帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子は書を読み、孔子は絃歌して鼓舞す。(漁父篇)

杏壇の稱、何に因るやを知らず、又孔門當時講堂ありて、之れを斯く稱せしやも亦明かならず。たゞ今より孔門の教授を推想するに、多人數を一處に集めて講話するが如きことなく、寧ろ子弟自身の研究と、而して其れより來る應問とに重き

個別的なる  
問答的教式

を措けること、我が古昔聖堂に於いてせし如きものなりと思はる。教室に類するものも亦之れありしとは思はるれど、必らずしも教室に於いて教ふるにはあらざりしが如し。周遊中には、禮を樹下に講せしことあり(孔子世家)、又時に臨みて教ふること、樊遲は御となりて車中に於いてし(爲政)、又舞雩の遊に於いてし(顔淵)、又曾哲は孔子幽居に侍坐せしときに於いてせし(先進)が如し。又多くは個人個人につきて別々に教授したるが如し、是れ其の問答的教式を探れる所以也。參か、吾が道一以て之れを貫ぬく。曾子曰はく、唯。子出づ。問人問うて曰はく、何の謂ぞや。(里仁)

樊遲稼を學ばんと請ふ。子曰はく、吾れは老農に如かず。圃を學ばんと請ふ。曰はく、吾れは老圃に如かず。樊遲出づ。子曰はく、小人なる哉。(子路)

以上二事例の場合に於ける狀景を想察するに、一は教室に於ける多數の門人中につき、特に曾子のみに一語を教へて直ちに去り、曾子と他の門人とは猶ほ教室に止まり、一は樊遲問を發し、子の對へを得て、更らに聽かんことを願はざれば己れ先づ去り、孔子と他の門人とは猶ほ其の室に止まれり。斯く孔子は個別



的に、問答的教式を以て門人を教育したりと想像さる。

斯く多數の學生に對して一と問に應じ、其間又自身の勉學修養を怠らざりしが故に、孔子は閒暇極めて少なかりし。

孔子閒居し、曾子侍す。中畧夫子の閒なるや難し。(大戴禮王言篇)

とあるは、事實なりしならん。

孔子は高門逸足をして、本邦古塾の所謂代稽古をなさしめたるが如し。大戴禮に、

門人相互の切磋

門人に語りて曰はく、二三子、賓客の禮を學ばんと欲するものは、亦に於いてせよ。(大戴禮、衛將軍文子篇)

とあるが如きは是れ也。亦とは公西赤、字は子華也。

又弟子の間、互ひに切磋し、討論し、以て師より受けたる所を研究し、其の知徳の進歩に資したるが如し。是れ論語禮記等に散見する所なるが、左の一事の如きは、明瞭に塾友磨厲の効果を看取し得べし。孔子歿後、曾子が、子夏の禮を逸して其の子の喪に哭するの太甚しきを責めしとき、

考試の法

子夏其の杖を投じて拜して曰はく、吾れ過まてり矣、吾れ過まてり矣、吾れ群を離れて索居する、亦已に久し矣。(禮記檀弓)

とあり。離居索居の退歩を悲しむは、やがて群居討究のとき、日進月歩の喜びを追想せしむる也。

孔門には、別に考試の法は設けられざりしが如きも、時と門人に對して問を發し、直ちに答へしめ、又は其の志を言はしめ、其の進歩の程度を試み、進めるは推奨し、誤まれるは是正せるの例、論語中甚だ乏しからず。荀子に見ゆる左の記事の如き、二三子に對して同一の質問を試みし所、殆んど今の考試なり。其の成績は直ちに講評さる。

子路入る。子曰はく、由、知者はいかに、仁者はいかに。子路對へて曰はく、知者は人をして己れを知らしめ、仁者は人をして己れを愛せしむ。子曰はく、士と謂ふべし矣。

子貢入る。子曰はく、賜、知者はいかに、仁者はいかに。子貢對て曰はく、知者は人を知り、仁者は人を愛す。子曰はく、士君子と謂ふべし矣。

孔子の事業

顔淵入る。子曰はく、回、知者はいかに、仁者はいかに。顔淵對へて曰はく、知者は自ら知り、仁者は自ら愛す。子曰はく、明君子と謂ふべし矣。(子道篇)

當時は紙なく、筆墨も亦容易ならざれば、弟子の孔子より傳へられしもの、多くは記憶に止め、特に重要なるもののみは記録し置きしが如し。

子張これを紳に書す。(衛靈公)

の如く、終生の守りとなせるものもありき。漢書藝文志に、論語の編纂を述べて當時、弟子各、記す所あり。

といへる、記録の意なるや、記憶の義なるや、明かならず、恐らくは後者ならん。隋書經籍志に、

其の夫子と應答し、及び私に相講肄せるもの、言道に合へば、或は之れを紳に書し、或は之れを事として厭くなし。

といへる、子張が紳に書せしことより想像せしものならん。

孔子が家庭に於ける教育の状態は如何なりしやは、大に知らんと欲する所なり、當時にありても然りしならん。されば陳亢なるものあり、孔子の子伯魚に之

れを問へり。此の以外家庭教育の状態を徴し難しと雖も、略ぼ之れにより推察せらる。

陳亢伯魚に問うて曰はく、子亦異聞ありや。對へて曰はく、未だし也。曾て獨り立たれしとき、趨りて庭を過ぎしに、詩を學びたりやと曰はる。對へて未だし也と曰ひしに、詩を學ばざれば以て言ふなしと、教へらるの一語略さると見るべし。鯉退いて詩を學ぶ。他日又獨り立たれしとき、鯉趨りて庭を過ぎしに、禮を學びたりやと曰はる、對へて未だし也と曰ひしに、禮を學びざれば以て立つなしと、教へらる。鯉退いて禮を學ぶ。斯の二者を聞くのみと。陳亢退いて喜んで曰はく、一を問うて三を得、詩を聞き、禮を聞き、又君子の其の子を遠ざくるを聞く也と。(季氏)

是れによりて見れば、孔子は家庭の教育には頗る冷淡なりしが如く思はる。是れ孟子に所謂

古は子を易へて之れを教ふ。(離婁上)

にして、家門の愛は教育の嚴と兩立し難きを虞るゝか。

此の章以外に、孔子が伯魚に周南召南を學ぶべきことを

孔門の謝禮

勸告せることあり(陽貨)されど周南召南は詩の一篇なるが故に之れと同一のことを別々に修へたるものならんか

終りに孔子は門人より謝禮を徴せしや否やは明文の徴すべきなし。されど孔子の如く微賤に人となりしものが、其の一生を通じて頗る裕かなる生活をなせしが如きを見れば、諸侯よりの俸祿贈遺、又晩年には、成業せる官仕者よりの扶養ありし外、平時何等か収入なかるべからず。多分富める家より來れる子弟の謝禮は少なからざりしならん。但し定まれる謝禮なく、又一様ならざりしことは勿論ならん。

第二節 孔門の教授法

ソクヲテスに似たる啓發的教授

孔子の教授法が問答的にして開發的なりしことは學者の既に之れに注意せし如く、自ら無知と稱して、疑問を續發し、他をして自ら眞理を發見せしめし、ソクヲテスの所謂產婆術の教授に似たるものあり。

吾れ知るあらんや、知るなき也。鄙夫あり、我れに問ふ。空々如たり。我れ其

の兩端を叩いて竭くす。(子罕)

といへるものは是れ也。此の兩端を叩くの教授法は、鄙夫に對して之れを用ゐ、自然に自ら眞理に歸著せしめ得るものなれども、之れを更らに他の意義に解し、一事の兩面の意義を明かにし、眞理所在の點を覺知せしむるは、學徒に對しても觀念を正確ならしむるの益あり。されば叩兩端的教授は、之れを二様の方法と解されざるにあらず、必らずしも鄙夫に對してのみ之れを用ゐるにはあらず。

左の教授の例の如きは、名譽には聞と達との兩端あるを明かにし、眞の名譽の觀念を把握せしむるものなり。

子張士を問ふ、如何んか斯れ之れを達と謂ふ可き。子曰はく、何ぞや爾の所謂達とは、子張對へて曰はく、邦に在りても必らず聞へ、家に在りても必らず聞ふ子曰はく、是れ聞也、達に非ざる也。夫れ達やは、質直にして義を好み、言を察して色を觀、慮りて以て人に下る、邦に在りても必らず達し、家に在りても必らず達す、夫れ聞やは、色、仁を取りて行違ひ、之れに居りて疑はず、邦に在りても必らず聞へ、家に在りても必らず聞ふ。(顔淵)

兩端を叩くの教授法

又子貢が告朔の餼羊を去らんと欲せしを責むるに、

賜や、爾は其の羊を愛し、我れは其の禮を愛す。(八佾)

と簡單明白に教へたるも、巧みに兩端を叩きたるもの也。但し以上の二例は、兩端を叩いて真理を其の中に求むるにあらずして、一の真理と他の之れに反するものを對照せしめ、宛も黑白相對せしめて白益、白きを加ふるが如く、燦然として其の真理なるものに光明を與ふるもの也。

兩端を叩いて、真理を其の中に求むるは、堯舜以來、政治、道德、教育、又は處生等、一切の原理及び準則として敬重され、孔子も亦最も尊重する所の「中」と相關する所あり。

子曰はく、舜は其れ大知なるか、舜問ひを好み、好んで過言を察す、惡を隠して善を揚げ、其の兩端を執り、其の中を民に用ゆ、其れ斯れ以て舜となすか。(中庸) 中は真理なり、真理は兩端を叩くによりて知得せらるゝの意なり。是れ中なる真理の那邊に在りやを考察する方法をいへるもの。而して教授なるものは被教育者をして、明確なる真理の觀念を把持せしむるを目的とするものなるが

故に兩端を叩いて中を取るは、亦適切なる教授の一方法たるべきを疑はず。一面と其の反面との間に真理を發見するは、ヘーゲルの所謂辯證法なるもの、稍之れと比較すべきか。

孔子の開發的教授は別に篇を更めて詳説すべければ、此の章に於いては、單に如何に之れを實用せしかを示すを以て足れりとせん。孔子は所謂開發し得べき素質なきものには、復進んで教へんとせざりしことは左の言の如し。

憤せざれば啓かず、悱せざれば發かず。一隅を擧げて、三隅を以て反せざれば則ち復せざる也。(述而)此の章の解釋は教育説教授論の條參照

憤せしめ悱せしめんとせしも、遂に何等の反應なかりしが爲めに、復進んで教ふることなかりし例は左の如し。

樊遲稼を學ばんと請ふ。子曰はく、老農に如かず。圃を爲すを學ばんと請ふ。曰はく、吾れ老圃に如かず。樊遲出づ。子曰はく、小人なるかな、樊遲や。(子路) 一隅を擧げしに、三隅を以て反せしが爲めに、喜んで進んで教へし例は左の如きものあり。